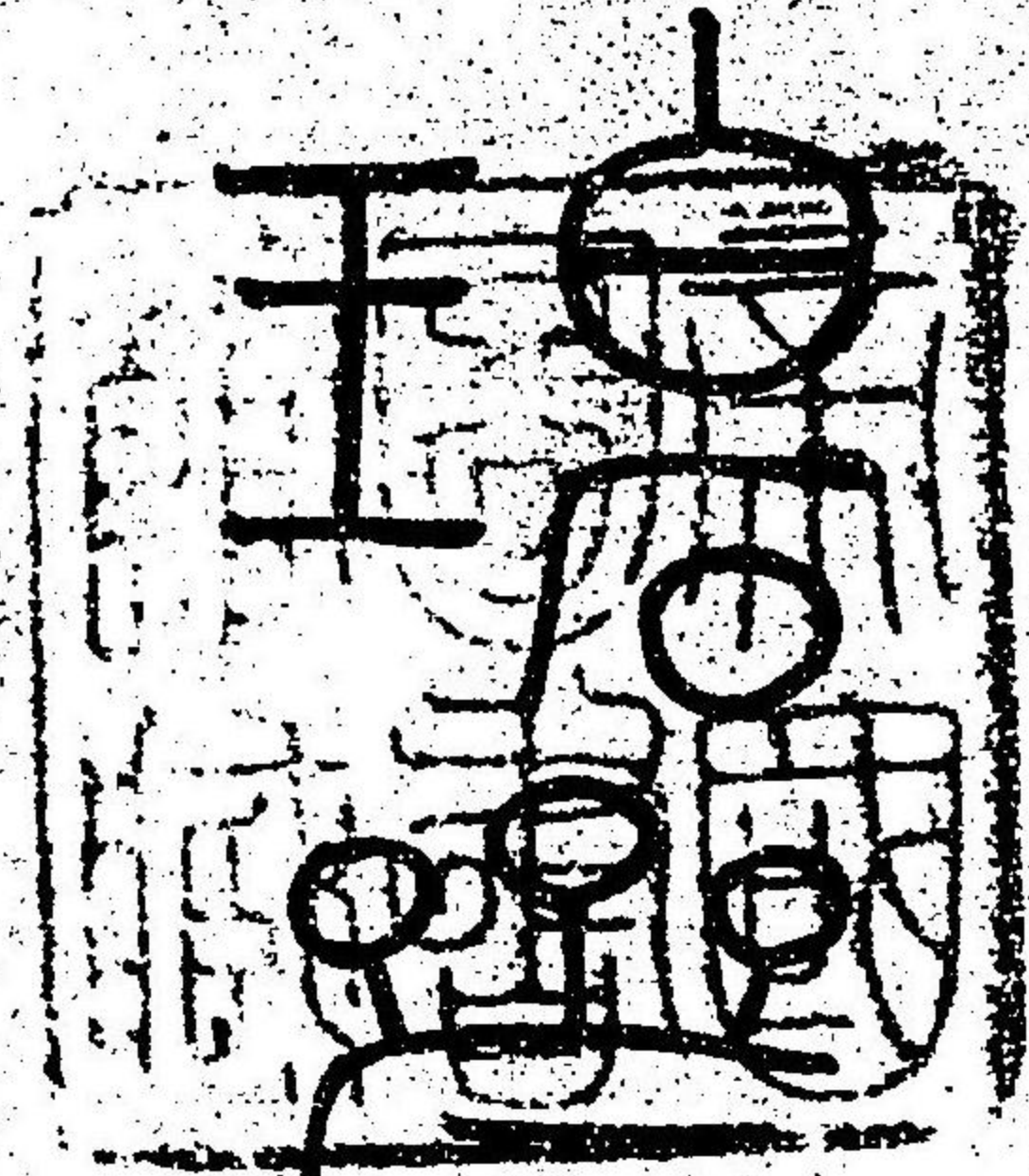


324-1



日本書紀
卷之六

明治
39 4 25
内交

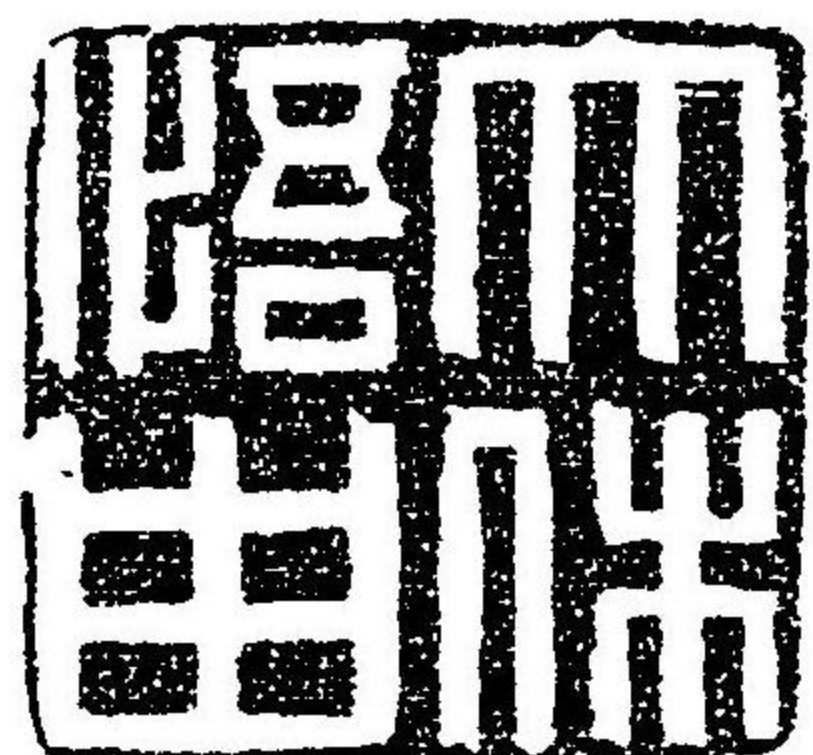
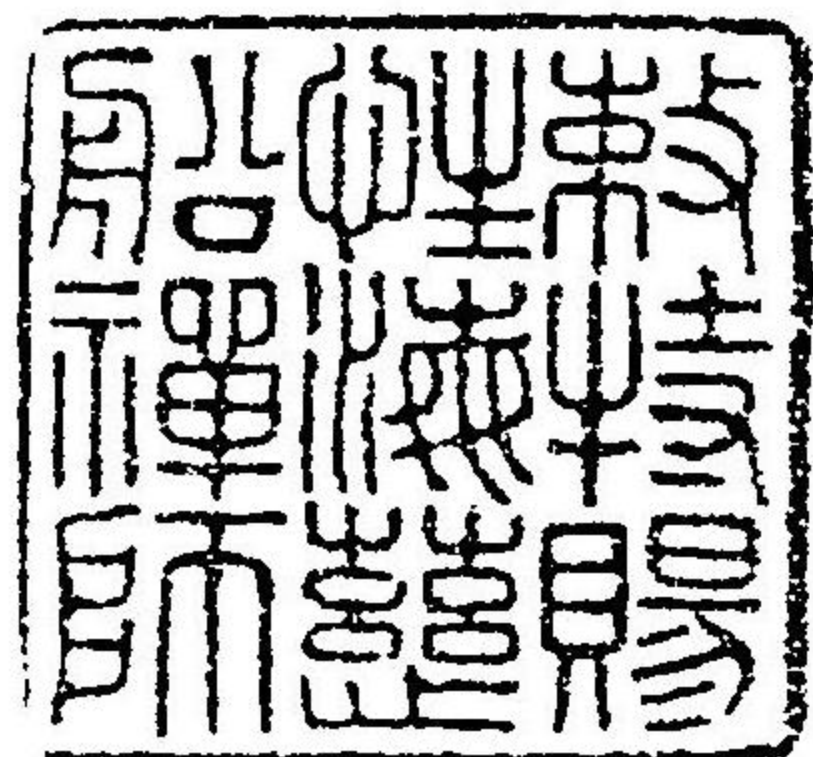


佛
祖
大
機

人
生
有
死

明倫彙編

水乎性由





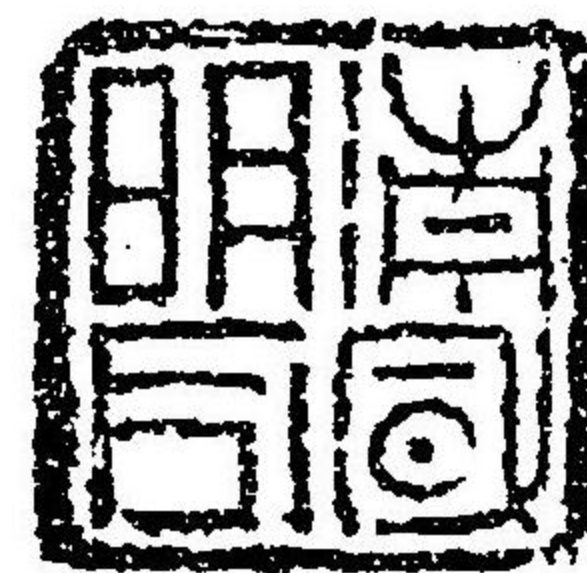
征山一姬太清秋

德批煌解意以鄰

出子蕭為家痛

動善大寺住持 聖

海持公



凡例

一 碧巖集は垂示と本則と頌と着語と評唱との五つを以て組立られたものであるに、今此の講話は其中の評唱を除いて其他の四つだけ講話したのであります。評唱は圓悟禪師が本則と頌との二つを批評的に註釋せられたるもので、頗る肝要なものであるに、何故に其れを除いたかと云ふに、何の意味もあるのでは無く、唯其の文が甚だ長くて其れを悉く講話することにすれば此の講話の四五倍も紙数の多き非常に浩瀚なる大冊となるので、容易に卒業することが出来ないと云ふだけのこと、已むを得ず略したのでありますから、尙ほ他日機縁の熟するを待て更に悉く講話したいと思ふて居るのであります。尤も本則と頌とに對

する圓悟禪師の批評は、評唱が無くても着語の上に於て大抵よく領解が出来るのであります。

一碧巖集の主腦とすべき所は、言ふまでも無く本則の公案に在るのであります。後學初機のために禪學の指南とすべき所は却て垂示に在るのであります。故に先づ第一に能く垂示に心を潜めて之を玩索し、其れから本則の公案に於て、彼の垂示に明かされた所の道理を、古人は如何やうに實踐せられてあるかを窺ひ、更に雪竇禪師は其れを如何やうに味はれたかと云ふことを頌の上に於て知るのであります。偕又圓悟禪師は其の本則の公案と雪竇の頌とを如何やうに見られたのであるかと云ふことは、即ち着語に於て之を窺ひ知るのであります。別して此の講話の如き評唱を略したものに於ては、尤も彼の着語に注意して

圓悟の見識を領得すべきであります。

一然るに其の着語が甚だ多きに過ぎて、中には同じ意味のことを語を換えて重複したのもあり、又は前後其の置き處を錯亂したかと思はれるのもあり、或は圓悟禪師の見識としては斯のやうな着語はなさるまいかと思はれるものもあり、且つ異本に無いのも他の本には載せてあるものもあり、或は評唱の中の語が混入したのもあり、要する所は最初久い間寫本で傳はつたものでありますから、其間に後人が自分の見込みを書き添へたり、又は備忘のために書き入れたりしたものが、いつとなく混じたのも多くあらうかと思はれる、其れ故に師家によりては全く着語を依用しない人もあり、さなくも往々取捨した人が多くあります。拙者も最初のうち少々除き棄て、講話を略したのもありました。

けれども、前申す如く今度は全たく評唱を除いたために、圓悟の見識を着語で見るより外に致しかたがありませんから、玉石混淆の嫌ひは有りながらも、なるべく着語を扶けて講話すること致したのであります。

一 碧巖集の版本寫本幾種類もあつて、本文に多少文字の異同もあり、孰れを正確とも定め難い所から、已むを得ず今度の講話は大智和尚の碧巖集種電抄を原本として、講話することに致したのであります。さりながら其の講話は大智和尚の説に據て敷演したのではありません。本より今度の講話は通俗を主として、初めて指を碧巖集に染める人にも成るべく解し易いやうにと思ふたのでありますから、禪學専門の衲僧たちには叱られても笑はれても一向に構はない、唯々後學初心の人のために幾分かの指

導になりさへすれば、其れて本望であると思ふ覺悟で着手したのでありますから、全たく藹々居士一流の通俗談と思ふて下されは其れて好いのであります。けれども此の講話を致すに就て多く参考いたしたのは、風外老人の耳林抄と、作者は誰か分らぬけれども碧巖集抄と題する古版本とであります。其他に玄虎藏主の大空抄だの本光和尚の黒漆桶だの天桂老人の舐憤抄だの華嚴鳳潭師の鐵壁雲片だのと云ふやうな數部の書も見ましたけれども多くの利益は耳林抄に得たやうに思ひます。但耳林抄には垂示が欠けてあつて其ればかりは遺憾でありました。

一 此の講話は本より第一垂示第二本則第三其着語第四頌第五其着語と、一々其文を逐ふて順次に講話したのでありますから、此の講話を読む人は必らず其本文を離れずに、一々其本文に當つ

て此の講話を讀むやうに志て下さりたい、若し然もなくて本文は讀むが面倒であると云ふやうなことから、打ち棄て、置て假名まじりの通俗談である講話ばかり讀まれたのでは、他はとにかくに着語の如きは何のこととも全たく分らない所があらうと思ふのであります、畢竟講話は本文の險路をたどる杖であると思ふことを忘れないやうに志て、杖ばかり虚空に躍らせぬ御注意をねがふのであります。

明治三十九年春季皇靈祭の日

藹々居士識

碧巖集講話 上巻目次

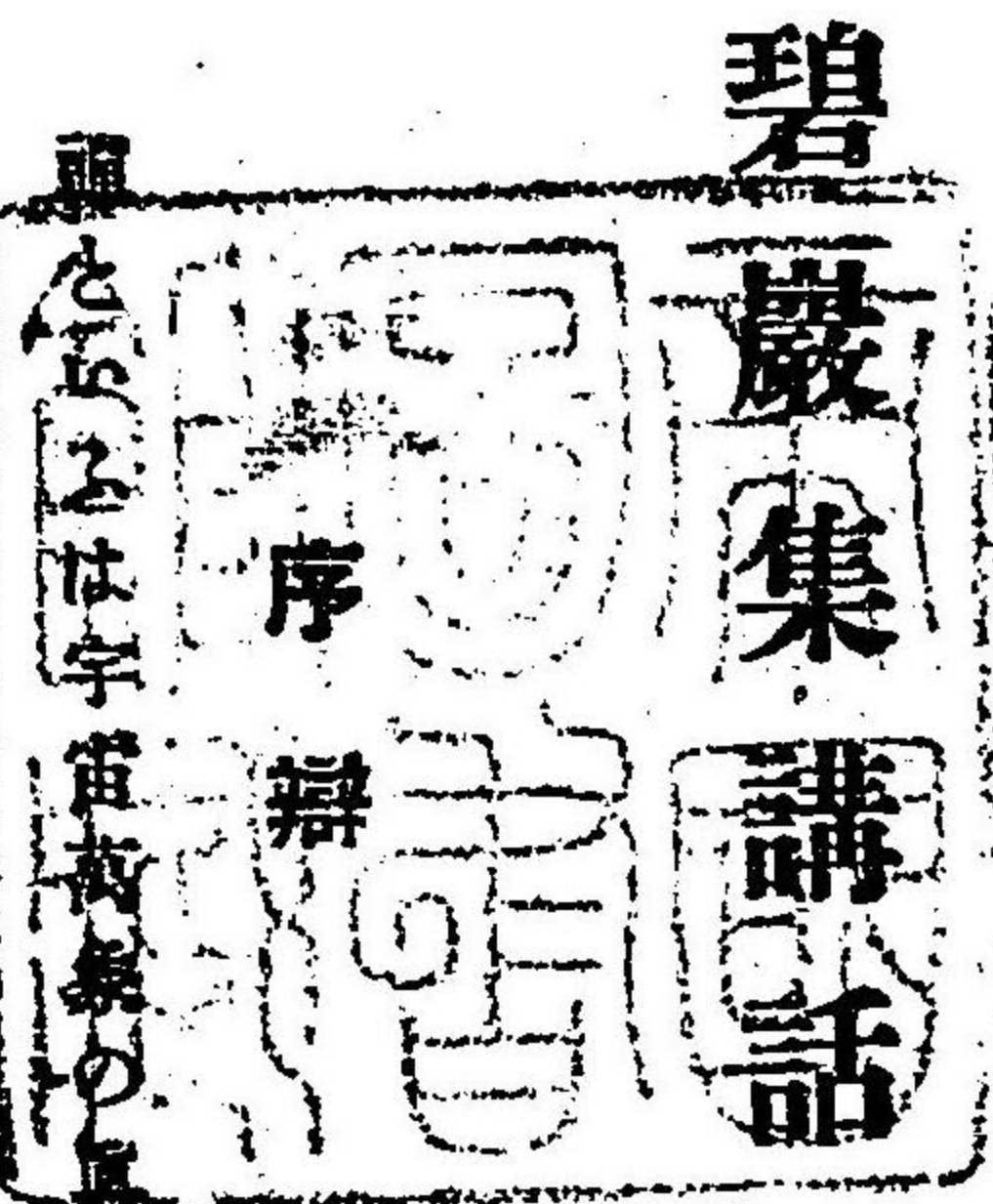
序	辯	一	
第一	則	武帝問達磨	七
第二	則	趙州至道無難	二八
第三	則	馬大師不安	四二
第四	則	德山挾複子	五六
第五	則	雪峯盡大地	七五
第六	則	雲門十五日	八七
第七	則	法眼答慧超	一〇二
第八	則	翠巖夏末示徒	一一四
第九	則	趙州東西南北	一二八
第十	則	睦州問僧甚處	一三四

第十一則	黃檗酒糟漢	一四三
第十二則	洞山麻三斤	一五四
第十三則	巴陵銀碗裏	一六五
第十四則	雲門對一說	一七四
第十五則	雲門倒一說	一八二
第十六則	鏡清艸裏漢	一八九
第十七則	香林西來意	二〇一
第十八則	肅宗請塔樣	二〇九
第十九則	俱胝指頭禪	二二二
第二十則	龍牙西來意	二三〇
第二十一則	智門蓮華荷葉	二四三
第二十二則	雪峰鼈鼻蛇	二五〇

第二十三則	保福妙峰頂	二六五
第二十四則	劉鐵磨臺山	二七三
第二十五則	蓮華庵主不住	二八一
第二十六則	百丈奇特事	二九二
第二十七則	雲門體露金風	三九八
第二十八則	涅槃和尚諸聖	三〇五
第二十九則	大隋劫火洞然	三一八
第三十則	趙州大羅蔔	三二八
第三十一則	麻谷振錫邊牀	三三四
第三十二則	臨濟佛法大意	三四六
第三十三則	陳尙書看資福	三五五
第三十四則	仰山問甚處來	三六五

第三十五則	文殊前三三	三七四
第三十六則	長沙一日遊山	三八三
第三十七則	磐山三界無法	三九二
第三十八則	風穴鐵牛機	四〇一
第三十九則	雲門金獅子	四一五
第四十則	南泉如夢相似	四二三
第四十一則	趙州大死底人	四三二
第四十二則	龐居士好雪片片	四四〇
第四十三則	洞山寒暑迴避	四四九
第四十四則	禾山解打鼓	四六〇
第四十五則	趙州萬法歸一	四七一
第四十六則	鏡清雨滴聲	四七九

第四十七則	雲門六不收	四九一
第四十八則	王太傅前茶	四九八
第四十九則	三聖以何受食	五一〇
第五十則	雲門塵塵三昧	五二七



藹々 大内青巒居士 講述

禪とは字面萬象の眞理實相を體達するのである。故に宇宙萬象皆其禪ならざるものは無いけれども、其中から或る一つを抜きあげて此れが禪で御座ると云ふことは出来ぬのであるから、禪は總ての言語や形様を以て顯はし示すことは出来ぬ。謂ゆる言語道断心行處滅であつて、言語の道が断えてゐるばかりでは無く、心行處も滅してゐる。即ち心の中に彼れの此れのと思考すれば、皆禪の本旨を失ふことになる。然るに今は其の禪宗の宗門第一書と稱せられる「碧巖集」を通俗に講話してくれよとの註文であるが、是れは實に甚だ無理な註文である。昔から此の碧巖集の如き禪録は提唱といふことは有るが、講話といふことは殆んど無い。提唱と云ふのは其の言句の意味を更に他の言句を以て評したり又は言句以外に色々な形様を

とへは、柱杖を卓すること一下とか、拂子を擲つとか、又は咄とか喝とか云ふやうな
こととして其の言外の意味を開發させるのである。其れを講話して注入的に禪理を分
らせて見たところ、其言句の理路は分るとしても、決して開發的の味ひは得られ
ぬ。古人の語に「老鼠入牛角」といふ句がある。年の老た鼠が牛の角の中へ飛びこんだ
といふのである。之を拙老が注解して「老鼠入牛角」といふは鐵砲玉が空中を飛て往
つたといふとじやと言ふた。然るに此の注解が愈々益々分らないから講釋してく
れろと云ふ、已むを得ず講釋して「老鼠は柔かなもの弱いもので牛角は剛いもの堅
いもの、其の柔かて弱いものが剛い堅いものへ入つたといふのは、剛いとか柔いと
か云ふ相對的な料簡に支配されて居るうちは分らない、一旦其の相對的な柔いと
か剛いとかいふ料簡を超絶して絶對不二の妙境に到つた上には、老鼠牛角の間に
剛柔も入不入も認むべきものは無い、其れだから老鼠入牛角といふのも鐵砲玉が
空中を飛ぶといふのも同じことである。鐵砲玉が空中を飛ぶのは易いこととして不
思議がないが、老鼠が牛角に入るのは難いこととして不思議なやうに思ふやうでは禪の
話を聞く資格が無いといふものじや、かやうに講釋をすれば一通り道理は分つた

やうに思ふであらう、けれども其れは理窟が分つたといふまでのこととして禪を會し
たのでも何でも無い、さりながら初めから言句も讀めず更に一往の理窟も分らな
いやうなものが、其れを超絶した所の妙味も合點することの出來べきは、づが無い。
然るに近頃は「碧巖集」や「無門關」の素讀も満足に出來ないで、一足とびに言句理論を
超絶した妙境に到り得たやうなつもりになつて、參禪を傳授物か何かのやうに心
得て、やゝもすれば入室とか獨參とかいふことばかり大切にして居るものもある
様子であるが、實は餘程おぼつかないものであらうと思ふ、其れ等の病人に對して
は此の碧巖集などを婆々談義流に講釋するのもマンザラ無益でもあるまいか、元
來文字言句の外であるものを已に雪竇禪師や圓悟老人が、かやうに文字を弄した
のである。からには、其の講釋をするといふことも不思議は無い、何とかいふ書家が
風の繪をかいてくれろと頼まれて、柳の靡く圖をかいたといふ話もある、なるほど
柳の枝の靡くところに風の様子はたしかに見える、しかし間接に風の様子がしれ
るといふだけのこと、初から風そのものを全く知らない者には決して其繪で風
そのものを知ることが出來べきでは無い、今此の碧巖集の講釋も柳の枝の靡く姿

だけが能くかければ結構だが、實地の風力は諸君の把握するとも放下するとも御自由に任せ申すより外に致し方がない。

此書物は「碧巖録」とも「碧巖集」とも申しますが、禪宗では宗門第一書などと名けた人も有て七八百年來中々さかに行なはれた者である。是より先きに宋の初め頃て今より九百四五十年に雪竇從顯禪師といふ高僧があつた。此人は同じ禪宗の中ても雲門宗といふ一派の人で、青原行思禪師第十世（達磨大師から第十六代にあたる）の法孫である。其師匠の智門禪師に提携せられて、宗乘に深く達せられたばかりで無く、餘程文才に優れた人であつたから、其頃の儒者たちの間にも雪竇に翰林の才ありと言はれて若し俗士であつたならば、翰林院の大學士となるべき人であると評判されてあつたと云ふことである。其人が禪宗歴代の高僧たちの歴史中から、宗旨の本色をあらはして後人の依標とするに足る問答や説話などを一百則あつめて、一々それを詩に作りて門人に示された。其題に成た古人の問答や説話のことを公案とも古則とも本則とも申すので、其詩のことは頌と申します。箇様な名目は是れから先きて始終申さんければ成らんから、ドウゾ記憶して置いてもらひ申し

たい。サテ其本則と頌とを一百則まとめて一冊といひし、雪竇頌古と名けて久しく世に行はれて居たものと見えるが、其後二百年ばかり経て宋の哲宗徽宗ごろに佛果圓悟禪師といふ人があつた。此人は同じ禪宗の中でも臨濟宗楊岐派の法流で、南嶽禪師より第十五代（達磨より二十一世）の法孫である。此人が彼の「雪竇頌古」を殊の外よろこんで、一則毎に小序を附して其れを垂示と名けられた。是れは圓悟が自家の門人に示したのであるから垂示です。サテ又本則と頌との一句毎に短評を加へて其れを著語と申します。此著語が餘程面白い。又本則にも頌にも委しい總評を附して其れを評唱とも又は單に評とも申します。以上雪竇の集めた本則と頌と、圓悟の垂示と著語と評唱と都合五つ集まつて一部の碧巖録と名けられたのです。碧巖と云ふ二字は圓悟の居られた澧州夾山の靈泉院の居間の額に碧巖と書て有たので、其碧巖室で撰述せられた故に碧巖録と名けたのだと申すことだ。其れが今より七百四五十年前、圓悟禪師は我が崇徳天皇の保延四年即ち南宋の高宗皇帝紹興六年に遷化せられたのことである。然るに禪宗と云ふ宗旨は本より教外別傳、一字直指人心、見性成佛と云ふので、手に信せ口に任せて活潑自由に自からも

にも参ぜしむべき筈であるから、かやうに一部の書物などを作つて人に示すべきものには無い、かやうな書物などが有ると卑劣な學生等が文字の上だけ白さばかりで、禪宗の悟りを開いたやうな風をしたり、或は理屈の分つたのを悟りを開いたやうに思ふたりする者が出来て甚だ宜しくないと云ふので、圓悟の弟子の大慧宗杲禪師と云ふ人が師匠が切角こしらへた碧巖録の草稿を火の中へ入れて焼いてしまふたと云ふことだ、此大慧が彼の程子朱子などと同時代で、朱晦庵が佛教の道理を聞かちつて理學を初めたのは、全たく此大慧から聞いたのだと申す評判がある、朱子の語類などに杲老と稱してあるのが即ち此大慧です、然るに其後さらに燼餘の草稿をまとめた者があつて、今日にまで傳はつたので有りませんが、我日本へ初めて渡つたのは圓悟禪師遷化の後九十年ほど経て、日本曹洞宗の高祖永平寺開山承陽大師道元大和尚が宋國に留學せられた時に、一部寫して、我か土御門天皇の安貞年間に歸朝の節、お持ち歸りになつたのが、第一最初である、其寫本は加賀の大乗寺に秘藏してあると申すことだ、又此本の註釋は黃蘗宗の人で肥前の大智和尚と云ふのが、種電鈔と云ふのを十冊あらはして有る、まゝと云つた者は是れだけ有

るが、やはり門外の人には少しも分らん、其外には、國字鈔だの、紙積鈔だの、耳林鈔だのと云ふ假名交りの者も有るが、皆専門家が専門家を相手に提唱されたのであるから、通俗どころか専門家でも他宗の人には少しも分らん、其れを今通俗に講釋せよと云ふ注文は、甚だ無理な注文であるけれども、已むを得ず先づ第一則から始めます。

第一則 武帝問達磨

【無示】隔山見烟。早知是火。隔牆見角。便知是牛。舉一明三。百發

銖兩是衲僧家尋常茶飯。至於截斷衆流。東涌西沒。逆順與棄自在。正當恁麼時。且道是什麼人行履處。看取雪竇

これは第一則の垂示です、先づ初めに舉人平生俊發の作用を擧げて、山を隔てる見る早く是れ火なることを知る、牆を隔て、角を見る、便ち是れ牛なること、と言はれた、是は涅槃經に釋迦如來が説かれた譬で、随分俊發の機轉にないけれども、まだ、其んな事では許せぬぞ、一を擧ぐれば三を明めると

目機に銖兩を辨ずると云ふも、皆一寸も抜け目の無い様子で、目機と云ふは俗に云ふ目分量と云ふので、チヨツと見ると直に一厘一毛までが分ると云ふやうに、宇宙の真理を手の上て轉がし、社會の現象を鼻の先きで弄らうと云ふのだから、伶俐は伶俐に違ひないけれども、其んなことは、衲僧家に於ては尋常の茶飯である、何も珍らしくは無、衲と云ふは破れ衣のことで、袈裟の異名です、ソコで衲僧と云へば總べて僧侶のことでは有るけれども、禪宗の慣習で俊發伶俐な作用のある者を稱することにて成て居る、尋常の茶飯と云ふは朝飯前のお茶の子と云ふやうな言葉じゃ、衆流を截斷するに至りてはとある、衆流と云ふのは、一源に對した言葉で、一源と云ふは眞如法性靈妙心源などと有難そうな名を付ける所である、其れに對しての衆流であるから世の中に有りとは有らゆる、一切の現象みな衆流じゃ、吾々凡夫は生れてから死ぬるまで、衆流の間に浮たり沈んだりして居るから、自由が得られぬ然るに、今其衆流を截斷とタチキリて仕まつた日には、東浦西没、逆順縱横、與棄自在じゃ、正當愆廢の時且らく道へ是れ什麼人の行履の處ぞとある、正當愆廢の時と云ふは、ナ、斯う成た時にはと云ふやうな同じや、愆廢も什麼も昔宋國の俗語で、愆廢は此

の如きの意、什麼は何と云ふ意味、行履は行狀履歷と云ふことで、動作のことじゃ、其東浦西没、逆順縱横、與棄自在の行履の人は誰で有らうぞ、雪寶の葛藤を看取せよ、昔し雪寶老人が書いて置いた葛藤がある、其れを看るが好いぞと云ふ、葛藤と云ふは松の木などに纏ひ附くものじゃ、松は千歳の翠を保つと云ふけれども、葛藤の爲めに枯れることがある、佛法は松の木のやうなもので、元來葛藤のやうな文字、句に用は無、然るに動もすれば、經だの論だの註だの釋だのと色々な葛藤が蔓延して、遂に佛の慧命を枯すことに成る、近頃は哲學だとか論理だとか云ふやうな、計な葛藤が纏ひ付くから、油斷がならぬ、其れはトニカク雪寶にドンな葛藤があるぞ。

本則 梁武帝問、達磨大師、如何是聖諦第一義。磨曰、不識。

云廓然無聖。帝曰、對朕者誰。磨曰、不識。

帝不契。帝曰、對朕者誰。磨曰、不識。

學問志公曰、陛下還識此人否。

日不識。得是武帝承公案志公曰。此是觀音大士傳佛心印。胡亂指注○帝
悔遂遣使去請。果然把不住志公曰。莫道陛下發使去取。人助其○

一時闔國人去。他亦不回。志公也好與三十神○

これが即ち本則とも公案とも古則とも言ふのです。古則と云ふは古人の公案一則と云ふのを略したのでありましやう。公案と云ふは公府の案牘で今の政府などで云ふ法律案とか議案とか云ふのと同じ意味です。佛祖の一言一行は確乎不拔にして味まじ難く背き難きこと、公府の案牘の威嚴なると同様じやと云ふ所から公案公案と言ひ慣はしたのであると申すこととす。本則と云ふのは前の垂示や後の頌に對して、是れが全く其本文であるからじや。舉の字は舉示の義で雪寶が門下に示した様を記者がしるした詞です。梁の武帝は姓は蕭名は衍、字は叔達、漢の蕭何二十五世の孫であることと云ふことじや。初め梁公に封せられ又梁王となり遂に帝位に即いて高祖武帝と稱せられた。殊の外篤く佛法に皈依して其頃佛教の學問にも篤行にも秀てた。寶志和尚だの善慧居士だのと深く交はり又武帝の子の昭明太子と云

ふのも中々の學者で信者で、互ひに餘程佛教の道理を研究し殊に寺を建てたり僧侶を供養したりするやうな事業は中々多く有た様子であるけれども、謂ゆる衆流を截斷して逆順縦横與奪自在と云ふ場合に夢にも到つたことが無かつたから、初めて達磨大師に逢ふた時に武帝が問ふたのが可笑、朕は寺を建たり僧を度したり佛を供養したり經を讀たりした事は幾らと云ふ限りもない程であるが、ドンな功德が有らうぞと問ふた、達磨が之に答へて無功德と罵しり付けるやうに言はれた。武帝は其意が解せぬ、ソコで今度は此本則の問答に成て如何なるか。是れ聖諦第一義と問ふた。聖諦と云ふは眞諦と云ふと同じこととて、第一義は讀て字の如くてあるから、聖諦第一義と云ふ五字を通俗に義譯して見れば、佛法の道理の此上も無く大切な有難い所と云ふ意味になる。武帝は餘程の功德があると思ふて居た大事業を達磨に無功德と蹴り返されたので有るから、ヤツキと成て然らば佛法の道理の此上も無いと云ふ所は如何で御座ると問ひ掛けたのじや、ソウすると達磨は相變らず叱り付けるやうな聲をして、聊然無聖と答へた。聊然はガツリとして何も無い有様じや、無聖と云ふは武帝が聖諦と問ふたから、ソんな聖などと云ふものは無い

前は佛法の道理の此上の無い所と問ふけれども一體に佛などと云ふものは絶えて無いぞと云ふたのです、ドウです諸君、諸君は佛とか凡夫とか云ふものが有ると思ひますか、武帝にはかり心配させて置くわけには往かんじやア無いか、有ると言へば常見じや無いと言ふなら斷見じや、武帝の眼中には佛も有れば凡夫も有る、ソコで更に進んで朕に對する者は誰ぞと詰りかけた、今現在我れと向ひあふて居るのは何じやと云ふのです、達磨は平氣で不識と答へた、誰やら一向知らぬぞと云ふのじや、武帝到頭何のこととも少しも分らん、其様子を記者の詞で帝契はすと書いてある契ふと云ふは符節を合せるやうにスカリと禪機の投合することじや、然るに今武帝はソウ往かなんだ、達磨は武帝に眞實の佛法を參究する力の無いのを見限つて楊子江を渡つて魏の國へ往て嵩山の麓の少林寺と云ふ寺へ引込てしまふた、ソコの様子を達磨遂に江を渡りて魏に至ると書いてある、然るに武帝は其後平常歸依する實志和尚が來た時に、其事を話したと見える、帝後に舉して志公に問ふとある、志公は即ち實志です、ソコで志公の反問が面白い、陛下還て此人を知るや否や、あなたはその達磨と云ふ者が如何なる人であるやら御存知でありますか、武帝が何て

其れを知て居るものか、帝曰く不識、一向存知ないと云ふたのだが、前に達磨が武帝に答へて不識と云ふたのは、實に萬斤の力のある不識で有たが、同じ不識でも武帝が志公に答へた不識は頓と力が無い、ソコで志公が言ふには、此れは是れ觀音大士佛心印を傳ふと有難そうな一言を聞いた時の武帝の顔つきがドンなで有たやらサテこゝで少々達磨大師の履歷を申して置きましやう、初め釋迦如來靈鷲山に於て八萬の大衆と稱する弟子たちに對し、金波羅華と云ふ花を拈りて見せられたと云ふことだ、いつも有れば必ず四辯八音の妙法があるのて有るに、今日に限りにて妙法は成されず、たゞ華を一枝チラリと拈弄せられただけで有るから、多くの弟子たち誰ありて其意を解せる者が無い、唯一人摩訶迦葉と云ふ老僧だけが莞爾と微笑したと云ふことだ、釋迦如來が之を御覽せられて、我に正法眼藏涅槃妙心實相無相微妙法門あり、摩訶迦葉に附屬すと言はれたとある、是れが佛心印傳授の證據です、印の字は印可だの印證だのと續く字で、タンカに證據立ることじや、釋迦の心も迦葉の心もピッタリと相印證して不二じや、其證據が拈華と微笑との摩訶の間にはあらはれたものと見える、サテ又迦葉は之を阿難に附し、阿難は之を商那和

修に授け、嫡々相承二十八傳して達磨に至つたのです。名を具さに申せば、菩提達磨と云ふので、俗姓は南印度の國王で香至王と云ふ人の第三子であると申すことじや、二十七祖般若多羅の弟子に成て遂に佛心印を相承した。後師匠の遺言に依て支那傳道の途に上り、梁の普通年間に支那に渡り、其れから前に申したやうなわけ、少林寺へ引込て、九年が間時機を見合せて居られたが、九年目に神光慧可と云ふ弟子に佛祖相承の衣鉢を附屬し、即ち支那禪宗の初祖と仰がるゝことに成たのです。觀音大士と云ふは委しく申せば、觀世音菩薩とも觀自在菩薩とも云ふので、此娑婆の人では無い、極樂世界の教主阿彌陀如來の高足の弟子であるが、大慈悲心の爲めに種々の身を現して十方世界に傳道布教せらるゝと云ふことじや、ソレで此娑婆世界へも色々な姿と現して來化せらるゝものと見える。達磨となつて佛心印を傳ふるのみでは有るまい、基督となつて十字架にも上り、加藤清正となりて猛虎と組打をもするで有らう、花となつて春の庭に開き、月となつて秋の空にも照る様子じや、吾々互ひ人々各自に觀音大士となつて佛心印を傳ふる時節も無ければならぬ、大士と云ふは菩薩を翻譯したので、大人と云ふも同じ意味です。サテ梁の武帝は

元來觀音大士を信仰すること尤も篤く、請觀音經の説に依て、圓通懺摩法と云ふものを撰述し、頻りに禮拜懺悔などを勤めて居る人であるから、其觀音大士が釋迦佛附屬の佛心印を支那國に傳へなされるため、遙々と東渡せられたのであると志公から聞た時に驚ろいたの驚ろかないのと云ふ沙汰では無い、ソレは一向に知らなんだ、其れと知たら禮拜供養して御利益にあづかるべきで有たにと云ふわけ、帝悔ひて遂に使を遣はし、去て請せしめんとす。早速勅使を魏の國の少林寺へ遣はして招請したいもので有ると云ふのを、志公が打消して道ふこと、莫れ陛下使を發し去て取らんと闔國人去るも他は亦た回らずと言はれた、たとへ梁の君臣士庶人までが皆一同にお迎ひに往たからとて、アノ達磨が何て歸つて來ましやうぞ、其んなことはお止めなされるが好いと云ふのじや、サスガに實志老僧は達磨の知音じや、武帝は達磨と云へば楊子江を渡り魏の國へ往てしまふた碧眼の胡僧のこととばかり思ふて居るから使を遣はして請したいなどと云ふけれども、其んな考ては眞の達磨に相見することは出來ぬ、武帝ばかりでは有るまい、人々各自に脚下に氣を附けぬと、達磨に蹴つまづいて地獄の釜の底へコロガリ落るぞ。

本則は先づ此位にして置て是れから着語を辯じましやう、着語と云ふのは前に申して置た通り、圓悟禪師が本則と頌との一句毎に短評を加へたのじや、禪宗には妙な癖が有て裏の方から譽めたり謗つたりする風がある、是れは世間にも往々あることとて理盡き詞窮まる所へ往つては何とも言ひやうが無いから、悪口を言て褒詞に代へることがある、其味が呑込めない、と着語の中には随分驚き入た悪口があるから、其れを文字の表面からばかり見て通ると何の事とも分らないのが多い、先づ第一に梁武帝問達磨大師と云ふ下に這の不啣喙を説く、漢とある、這の字は此の字と同じ意味、不啣喙は宋國の俗語で不伶俐と云ふほどのこと、漢の字は我國の俗語にコノ男とかアノ男とか云ふ時の男と云ふのと同じほどの意味であるから、此着語を俗譯して見れば馬鹿なことを言ふ男だと云ふのです、宇宙の眞理は他人に問ふに及ぶべきでは無い、人々各自に反省して見るが好い、其れを達磨大師に問ふとは何事じや、如何是聖諦第一義の下に是れ甚の緊驢極ぞとある、甚の字は何の字に同じ、緊驢極は驢馬を繋ぐ木極と云ふことと甚だ賤しい、マラマ物のことじや、武帝が有難そうに聖諦第一義などと問ひ掛けたが、それは一轉何の緊驢極じやい、

穢らはしいものを持出しては困るぞと云ふアンパイ、廓然無聖の下に將は爾へり多少の奇特と達磨老僧はハルハル天竺から御座つたと云ふから何ぞ多少の奇特なき答でもあるかと思ふたに廓然無聖と言ふだけのことか、それは當り前のことでは無いか、然し其んなことを武帝に言て聞かせてドウするつもりか知らんが、新羅を過ぐ、箭は矢でありませす支那から東の方のはてが新羅すなはち今の朝鮮であるが、射た所の箭が新羅を通り過ぎてしまふたとしては、ドコへ往て落ることやら目的が分らんと云ふので俗語に落着の分らんことを箭新羅を過ぐと云ふのだらうです、廓然無聖と答へた落着がドウなることやらと云ふのじや、可憐明白とある可憐は甚の字の意味でハナハダと訓ひのです、此着語は達磨の答の脱鉢現成、毫も隠蔽する所なきを稱したのじや、對朕者誰の下に滿面の慚惶、強て慳々とある、武帝は達磨の答を解し得ず實に滿面の慚惶、身の置き所が無い答であるに強て慳々とシラ／＼しく慚をかくし惶をこらえて朕に對するものは誰ぞなどと第二の起した氣の毒さよと言ふ評じや、果然として摸索不着、ソレ見たことか武帝の刀細工で幾ら摸索してからとて、決して達磨の痒いところへ手の届くもので

い磨曰不識の下に咄とある咄と云ふのは叱と云ふのと大同小異て物事を叱り付ける詞じや、達磨が不識と答へたのを圓悟が何て咄却したのであるか、ぼめたのか、誇つたのか吾々互ひも咄却されないやうに用心せねば成るまい、爾來半文錢に直らずと第二の着語を下した、前に廓然無聖を賣り附けやうとしたけれども武帝は一錢にも買はなんだ、然るに又々不識などと觸れ込んでも半文錢の價值もあるまいと云ふのです、帝不契の下に可惜許とあるア、惜いことをした何を惜いと云ふのか、武帝が悟れ得なんだのが惜いか元來迷悟は無い筈じや、達磨が武帝を度しそくなつたのが惜いか元來濟度などを受くべき衆生は無いぞ、然し武帝が達磨の機に契はぬと云ふ所が却て些子に較れりてがな有らうと是れは全く武帝を愚弄した着語らしい、渡江至魏の下に遁の野狐精と達磨を罵しつた、この一罵これ實に祖師西來の洪恩に報謝して感涙潸然たる所て有らう、種電鈔に三世諸佛も是れ野狐精、歷代祖師も是れ野狐精と言てある其れに違ひない、しかし諸君この野狐精の跡後を追ひあるくと未來永劫魔魅されて浮ぶ瀬はありませんと免れず一場の懺懼、これは達磨を抑へた着語じや、懺懼と云ふは耻辱と云ふも同じことて、達磨が空

しく梁を去て魏に赴いた様子を批評的に言ふたまでの事て有らう、其次の西より東に過ぎ東より西に過ぐとあるのも同様て達磨が衆生濟度のために東奔西走する有様の評じや、然し此中に元來迷悟も無く凡聖もなく盡十方法界一枚の大光既であることを顯はして居る、帝後舉問、志公の下に貧兒舊債を思ふとある、サスガ武帝も無功德だの廓然無聖だのと云ふ聞き慣れない説法を聞て、何となく氣に掛つたと見えて志公に問た様子が、貧窮人が古い借金を思ひ出した様である、と評したのじや、傍人に眼ありと云ふは志公を褒めたのです、達磨に和して國を逐出して始て得てんと云ふのは、志公が武帝に反問して還て此人を知るや否やと云ふ様子が、達磨と同じ穴の野狐精らしいに依て、達磨を逐出して魏の國へ遣たやうに志公をも逐出してしまふが好いと云ふので、志公を褒め且つ武帝を愚弄したのです、更に好し三十棒を與ふるに國を逐出すばかりでなく三十棒を與へて打擲つてやるが好いと云ふのじや、是れでも未だ志公を褒め足らぬと見えて、達磨來也と云ふた、達磨が復た出て來たやうであるぞと云ふのです、帝曰不識の下に却て是れ武帝達磨の公案を承當すとある、さきに達磨が武帝に答へて不識と云ふた時には、武帝一向

に合點し得ぬ様子にて有たが、今武帝が其れと同じ詞で志公に向ひ不識と云ふのが、是れが却て達磨不識の公案に承當し得たので有るかも知れんと飽くまで武帝を嘲弄した着語です。佛心印の下に胡亂に指註すとある。志公は觀音だの佛心印だのと妙な註釋を下したが、觀音が達磨に限つたわけも有るまいし、又佛心印と云ふものは、他に傳へ得べきもので有るやら無いやら、いづれにしても受取にくい胡亂な指示註釋であるぞと云て吾々に問題を授けられたのじや、臂膊は外に向て曲らずとある。膊は俗に謂ふムカフズ子じや、ヒヂヤムカフズ子は内の方へこそ曲れ、外へ曲るものには無い、ドの様には方便して言ふて聞せたらからとて武帝に悟りが開けるものでは無いと云ふのです。遣使去請の下に果然把不住とある。ソレ見たことか武帝は決して觀音も佛心印も分るもので無い、把不住はトリトメ得ぬと云ふ詞じや、向に道ふ不唧噥と其れだから最初から武帝は不唧噥を説くの漢であると云ふて置いたのじや、莫道云々の下に東家の死すれば西家の人哀を助くとある。志公が斯んなことを言て武帝を諷す様子が丁度隣家の死人にも悔みを言ふやうなアンパイであるかと冷かした、也好し。一時に國を逐ひ出すにトカク志公は色々なことを

言ふて武帝を誑らかす様子が達磨と同罪に相違ないに依て、梁の國を逐ひ出すが好いと云ふ、亦不回の下に志公也好し。三十棒を興るに、是れも前と同じ筆法じや、知らず脚跟下に大光明を放つことを、人々各自の脚跟下に達磨大師が大光明を放つて居るぞと吾々に注意して呉られた、互ひに脚下を照顧せねば成るまい、先づ着語も斯んなこととして、次に頌じや。

頌 聖諦廓然通新 何當辨的通也 對朕者誰再來不直手文後 還云不

識三人四人 因茲暗渡江穿人鼻孔不得 豈免生荆棘脚跟下已 閻國人

追不再來爾重公案 千古萬古空相憶換手換胸 休相憶還什麼

清風匝地有何極果然 師願視左右云這裏還有祖

師麼爾特語 自云有阿場 喚來與老僧洗脚更與三十棒

これが雪竇禪師の作て達磨の公案を頌したので、頌と云ふことは詩の六體に比賦興風雅頌と云ふた時の頌の意であります。呉音で讀むからジユと云ひ慣はしてある、一轉に僧の詩を偈と申しますが、偈は梵語に伽陀または偈陀とも云ふのを

漢語に譯すれば頌の意味であると申すことと、即ち譯語を以て申せば頌、原語では偈陀の陀の字を略して偈と申すのです。此第一則の頌は長短句十二句ある。初めの四句は四言で、次の二句は五言で、あとが七言五句の間に三言の一句が挟まつて居る。先づ第一句は武帝の問の聖諦第一義と達磨の答の廓然無聖とを一句にまとめ、て其儘に拈し來つた間に髪を入れぬ機会が見える。序に着語も申して往きませう。圓悟が箭新羅を過ぐと着語した、謂ゆる落處が知れぬぞと云ふたのじや、又嘆と云ふてある嘆と云ふは笑ふ貌でフ、ンと云ふたやうな工合であるが、圓悟が何を笑ふたので有らうぞ、第二句に何ぞ的を辨ずべきとある。的は端的じや端的と云ふは正直と云ふも同じこととて其物そのまゝ、其事そのまゝに露堂々明歷々くらす所、の無い有様を云ふ、今武帝が聖諦と問ひ達磨が廓然と答へた此聖諦廓然の端的がドウして辨ぜられやうぞと云ふのじや、圓悟は過也と着語した、イヤ違ふた何も辨じ難いことは無い、舉足下足皆是れ廓然の端的じや、第三句に朕に對する者は誰ぞ、武帝の詞をソツクリ其儘持て來た、ソコで圓悟が再來半文錢に直らすと着語した、此語は前に武帝が達磨に買ってもらふつもりで遂に資本まで失したので有たに雪

寶も亦た之を賣りに來たかと云ふのでさらば又懸崖たし去るやと叱る、お前も武帝と同じやうなことを成さるかと云ふのです、第四句に還た云ふ不識と前に廓然無聖と云ふて置たに更に亦た不識と云ふたから、還云と頌した、着語に三人、四人中、れり、コレは前に達磨が不識と武帝に答へ次に武帝が志公に答へて不識と云ひ、今また雪寶が不識と云ふたから、三人も四人も同じ矢を放つがドウじや中るかかと云ふやうなアンバイ咄、他人の事はイヤ知らず雪寶老人にして斯んなことを云ふのは甚だ其意を得ぬと云ふので更に咄破した、第五句に茲に因て遂に江を渡る、着語に人の鼻孔を穿ち得ず、却て別人に穿たるとある、コレは圓悟が達磨を抑さへて達磨が武帝を濟度し得ず、却て後に志公に濟度されたやうな有様に見えるのを評したものと見える、蒼天々々、ア、悲しい事ではあるぞ、好大丈夫、俗に謂ふ、ヨイベラボウだなどと云ふやうな詞じや、第六句に豈荆棘を生ずることを免がれんや、一鉢に釋迦が天竺に於て說法を初めたのからして、風なきに波を起したので有るか、一休和尚は、釋迦と云ふいたづらものが世に出て、多くの人を迷はする哉と云ひ、昔し雲門大師は四月八日に釋迦がオギヤ、と生れた時に打殺して狗に食はせ

てさへ仕舞へば、こんな厄介な佛法だの禪學だのと云ふ世話もやけなんだにと云ふたと申すことと有るが、カテ、加へて今また達磨が渡りて来て、無功德だの無聖だの不識だのとトテツも無いことを言ひ散らして、其上に江を渡りて少林山へ引込むなど、云ふやうな餘計なことをするものだから、種々さま／＼の荆棘を生じて一千七百の公案などと云ふ厄介な事も起つたのであると云ふので有らう、ソコで圓悟が脚、跟、下、己に、深、き、數、丈と評した、コレは圓悟が雪竇の發言に同意を表して、實に其通りじやドコもかも荆棘だらけじやと云ふ、ソレ諸君の足元にも様々な荆棘が澤山あるぞ、御油断あつて蹴つまづきなさるな、第七句に閩國人追へとも再來せずコレも本則そのまゝじや、ソコで圓悟が兩重の公案と着語した、又追ふことを用ひて、作、廢、す、ると云ふた、人の跡を追ふなど、云ふことは男らしい者のすることでは無い、大丈夫の志氣、何、く、に、か、在、る、第八句に千、古、萬、古、空、相、憶、着、語、に、手、を、換、え、て、胸、を、槌、つ、と云ひ、空を望んで啓告すと云ふ、皆男らしく無い有様を評し得て面白い、空を望んで啓告すと云ふは、彼の朝顔と云ふ盲婦が男の跡を慕ふて大井川の川留にあふたとき、天道さま聞えませんと言て泣たると云ふやうな有様じや、十字架の上で神

を恨んだり、歴史を書きかけて天道は是か非かと口説たりするのも大抵似たやうな者で有らう、相、憶、ふ、こ、と、を、休、め、よ、コレは三言じや、此句で此頃の舞臺がクルリと廻つたぞ、圓悟が怪しんで什麼と道ふぞと着語した、しかし矢張鬼窟裏に向て活計を作すので有らうと奪ふた、鬼窟裏の活計と云ふは餓鬼の飲食相談じや、何程工夫しても到底満服することは出来ぬ、第十句に清風、匝、地、何、の、極、ま、り、か、有、ら、ん、い、つ、ま、でも人の跡を追ふには及ばぬ、何處に清風、明月の無いところが有るぞ、夜着もたぬ、貧乏人の窓からも明月はさす、正月の餅は食へんでも鶯の初音はタシカに聞える、人々各自光明の在る有り釋迦の足を借りて歩くには及ばぬ、達磨の御世話にあづかつて臥起すべきでは無い、ソコで圓悟も果然と云ふた、テツキリ其れに違ひないと云ふのじや、しかし清風だの明月だのと云ふまでに説明せんでも好からうに餘りに親切すぎるぞと云ふので、大、小、の、雪、竇、草、裡、に、鞆、す、と評した、大小の二字には別段の意味は無い、人を指斥する時に大小の和尚だの大小の先生だのと云ふのが此頃の俗習と見える、草裡に鞆すと云ふは大道を歩まずに路傍の草の中にコロガリ落ると云ふこととて、兒を感んで醜態を忘れる形容を落草と云ふのが禪家の套語で

す、私などが斯んなやうに碧巖の講義などをするのは、落草どころか溝泥の中へコロガリ落ちたやうなもので、醜とも陋とも申しやうの無い有様であるから、禪宗の専門家にはドンなに叱られるか知れんけれども、諸君のために浮身をやつすのじや、諸君も少しは感れむが好い師、左右を顧視して云くと云ふ六字は記者の詞です、這裏還て祖師ありや、これは雪竇が此頌を作つた時に門下の大衆を集めて提唱して聞せた、其時に第十句を唱へると直に左右を見廻して這の裡に達磨大師が居るかナと言ふた様じや、ドウてす諸君ソコに達磨が居りますか居りませんか、よく足元に氣を付けて搜がして御覽なさい、魏の少林山へ往てしまふたなど、云てはイケませんぞ、しかし雪竇は前に相憶ふとを休めよと云ふて置きながら、何ゆゑに達磨を搜がすのじや、汝番款を待つや、番款と云ふは翻款の音通て、款と云ふは罪人が裁判官の前で白状した文書のことださうです、己に前に相憶ふことを休めよとタシカに白状して置きながら、また祖師ありやなどと達磨の跡を追ふと云ふものは、前の款を翻覆すると云ふものじや、汝雪竇はたして翻款するかと評したのじや、猶ほ這の去就を作すかと云ふは、矢張そのやうに達磨の跡を追ふかと云ふので

す、自ら云ふ有り」とある三字は記者の詞で、有の字を一字句と見る説もある、雪竇みづから答へて達磨はコゝに居ると云ふのじや、着語の場、薩阿、勞は我國の俗語に御苦勞千萬なことじやなどと云て人の仕事を愚弄することがあるアレと同じ意味と見える結句に喚び來れ、老僧がために洗脚せしめん」とある、老僧と云ふは雪竇自分のこととす、祖師が居るかと思ねたのは禮拜でもするつもりかと思たら、喚び來れ私の脚を洗はせるからと云ふのじや、何の御用かと思ふたら、飛ても無い御用じや、其上に圓悟は更に三十棒を與へ、逐ひ出すも也、たまた分、外と爲さずと助言した、一鉢祖師に何の怨、疑が有て箇様なことを申すので有りませしやうぞ、諸君よく考へを願ひたい、上すべりをして面白いとか愉快だとか云ふだけの事では何の所詮もない、ソレでは私は丸るて落語家か軍談師のやうなものに成てしまふ、ア、マ、に情ないては無い、圓悟が更に着語して這の去就を作す、猶ほ些子に較れりと云ふた、雪竇が祖師に脚を洗はせると云ふたのが餘程賛成と見える、しかし自分の脚を洗ふに達磨を頼まんでも洗はれらうなもので有るに、

第二則 趙州至道無難

垂示 乾坤窄。日月星辰一時黑。直饒棒如雨點。喝似雷奔。也未當得。向上宗乘中事。設使三世諸佛。只可自知。歷代祖師。全提不起。一大藏教。詮注不及。明眼衲僧。自救不了。到這裏。作麼生請益。道箇佛字。拖泥帶水。道箇禪字。滿面慚惶。久參上士。不待言之。後學初機。直須究取。

この垂示は向上宗乗中の事と云ふ六字が眼目で、向上宗乗中の事の廣大無邊なるに比ぶれば、乾坤の廣大も尙ほ窄く、向上宗乗中の事に比ぶれば、日月星辰の光明なるも尙ほ暗黒であるぞ、直饒禪宗の高僧が其廣大光明を言語文章に顯はすことが出来ぬからと云ふて、理盡き言窮まれば、杖を振り上げて人を打ち、或は聲を勵まして大喝一聲カァーッと怒鳴る、其喝が喝々連喝して雷の奔るに似たりとも、又その棒を下だすこと、雨の點々飛下するが如くて有ても、決して也た未た向上宗乗中

の事に當得せしむることは出来ぬぞ、同じ佛教の中でも天台華嚴眞言淨土などの諸宗は、教家と申して、釋尊一代の説教を書き記したる經文を尊び、三世諸佛のお説教と言へば、此上も無いことのやうに思ひ、又禪宗の方では、教外別傳と唱へて、歷代の祖師の以心傳心を此上の無いことのやうに思ふて居ることと有るが、其教家で尊ぶ三世諸佛でも、此向上宗乗中の事に至ては、只自知す可して、決して之を他人に説き示すことは出来ぬぞ、其禪宗で尊ぶ歷代の祖師でも、此向上宗乗中の事に至ては、全提不起じや、全提と云ふは、其儘ソツクリ引さげると云ふことと有るに、其下には不起すなはちタテマと有るから、向上宗乗中の事を其儘ソツクリ引サゲテ起ツと云ふことは出来ぬと云ふのじや、三世諸佛も歷代の祖師も其通り有るのだから、其諸佛の説かれた一、大藏經すなはち一切經五千四百八十八卷にも、決して此向上宗乗の事を詮註することは出来ぬ、又彼の歷代の祖師の兒孫と稱する禪宗の者などは、設ひ明眼の衲僧と自から誇つて居て見たところ、他人の濟度は云ふに及ばず、自救不了、て自ら己れを救ふことだけでも出来ぬもの、では無い、衲僧と云ふ衲の字は、襤褸を綴り合せた衣服のことであるが、袈裟と云ふものは、全く襤褸を綴り合

せるのを本式とするので有るから、袈裟のことを袈衣といふのです、それが一轉して袈裟を掛ける僧徒の事を袈子だの袈僧だのと云ふことに成たのじや、這裏に到て作廢生が請益せん、サー斯う成た處に到てドウ相談したもので有らうと云ふのです、請益と云ふのは論語やらに益を請ふと云ふ詞が有て、有る上にモツと増してモラフと云ふ意味で有るが、それが一轉して師友は物を聞た上に更に質問討論することを請益と云ふのです、サー何と相談したもので有らうぞ、箇の佛の字を道ふも拖泥帶水じや、敎家の人は直に佛とか菩薩とか有り難そうに言ひ出すけれども、其れは誠に見苦しいぞ、拖泥は泥をヒク帶水は水をカブルと云ふので有るから、俗に謂ふ泥溝鼠が猫に逐はれたやうな様ぞ、又禪宗の方の人は、轍もすれば禪の字を道ひたがるけれども、其れも滿面の慚惶、いかにも外聞の悪い限りじや、久參の上士ヒサシク向上宗乗中の事に參得し來た上根の士は之を言ふを待たぬことと有るが、後學のもの又は初て其事に參する機根のものは直に須からく究取すべし、直の字は餘處目を振らず、理窟に滯ふらず、方便に泥ます、言句に着せず、伎倆に執せず、サ何としたものじや。

本則舉。趙州示衆云。道老漢至道無難。非難唯嫌揀擇。眼前是什麼

有語言。是揀擇。是明白。兩取三面老僧不在明白裏。眼身已盡

是汝還護惜也無。此也時有僧問。既不在明白裏。護惜箇

什麼。也趙州云。我亦不知。妙和尙既不知。爲什麼。

卻道不在明白裏。看走向什麼處去趙州云。問事即得。禮拜了退。道老

趙州と云ふは漢土の地名じや、其趙州の趙州城と云ふ處に觀音院と云ふ寺が有て其寺の住侍に從禪禪師と云ふ名僧が有た、此人は六十歳の時に初めて發心修行の途に上り、八十まで行脚して餘程有名なもので有たから、時の人が皆其名を言はずに趙州和尚とばかり呼だと申すことじや、サテ其趙州和尚が或時門下の衆に示して云はるゝには至道無難唯嫌揀擇、これは達磨大師から三代目の祖師すなはち三祖鑑智僧寮大師と云ふ人が「信心銘」と申して四言長篇の韻文の法語を書て置かれた、其冒頭に至道無難唯嫌揀擇、但無憎愛、洞然明白と書き出してある、其前の二句だけを擧げて、あとの二句は自分の詞の中へ含めて機に語言あれば是れ揀擇、是れ明

白と言はれたのじや。至道と云ふは至極の大道即ち向上宗乗中の事じや。無難と云ふは困難なるものでは無いと云ふ意味、俗にムツカシクナイと云ふほどの事じや。實に向上宗乗中の事ずなはち至道さらに詞を換えて申せば宇宙の真理は何もムツカシイ事は無い、春になれば花が咲く秋になれば紅葉が散る、眉毛は眼上に横たはり呼吸は鼻の孔から通ふ何も世話のやけたことでは無い、此真理が森羅萬象の往來する至極の大道であるから至道と云ふ、君父も此道を通れば臣子も此道を通る、商人も此道さへ通れば安全じや、百姓も此道さへ通れば間違ない、清風も通れば明月も通るぞ、此道が直に佛祖の大道じや、ソコで向上宗乗中の事とも名けられるのです。唯、揀擇、揀擇は二字ともにエラブと云ふ字じや、目に色を見る赤いと知り黒いと知る誠に無難じや、赤いは赤いに任せて置け、黒いは黒いに任せて置け、餘計な世話を焼くには及ばぬ、然るに直に揀擇とエリキラヒをする、赤いのが美しく黒いのが醜い^{キナシ}と見るもムツカシイことは無い、美しいなら是非欲しい醜い^{キナシ}から見ても厭やじやと食ばつたり瞑つたりする、サー斯う成て來ると修羅の警察署も地獄の裁判所も事務御多端と相成る、然らばドウなれば好いかと云ふに、三祖は此語

に續いて、但、憎愛なけれは、洞然として、明白なりと言はれてある、明白と云ふは山は山て水は水である花は紅めて柳は緑であることじや、詞をかえて教家のやうに云へは、揀擇は迷て明白は悟りじや、サテお話が復た後へ戻つて至道は無難であるから不可思議不可稱量じや、四の五の餘計なことを言ふには及ばぬ、然るに若し纒に語言あれば、是れ、揀擇、是れ、明白、佛だの衆生だの迷だの悟だのと苟くも口端に掛ければ、早や揀擇か明白か迷か悟かのドチラへか墮落する、迷に沈むのがツマランばかりでは無い、悟に沈んでもツマラぬぞ、譬へは病に苦しむのは病人に違ひないが、薬に取り附いて居るうちは、矢張病人に違ひないやうなものじや、ソコで老僧は明白裡に在らず、老僧とは趙州自分のことじや、此趙州などは揀擇の迷路に流浪して居らぬばかりでは無く、明白の一味平等なる悟道にも躊躇しては居らぬぞ、是れ汝還た護惜すや也、た無や、お前だちも能く自ら保護し珍惜する所が有るや、無いやらドウじやナと問ひかけた時に門下の一人進み出て、趙州へ逆縁に問ひかけた、既に明白裡に在らずと言はるゝては無いか、外に何も護惜すべきもの有らうはづが無いでは御座らぬか、箇の什麼をか護惜せんと一本やりこめた、趙州は

平氣て之を外づし我も亦た知らず、ソコは我も一向に知らぬのじやと云て濟まし
 こんで居る此我も亦た知らずと云ふた一言に斬釘截鐵の力量あることを知らぬ
 は成らん然るに此間ひ掛けた僧も中々承知せぬ和尚既に知らずんば什麼として
 か却て明白裡に在らずと道ふや和尚と云ふは趙州を指して謂ふので先生とかア
 ナタとか云ふも同じことじや、アナタは知らぬと仰せらるゝが御自分で知らぬな
 ら何故に老僧は明白裡に在らずと仰せられたぞ尻口で物を言ふものでは御座ら
 ぬ此僧の言ふところが實は本統なのじや趙州が明白裡に在らずと云ふたが初か
 ら方便で明白裡に在らずと言ふただけ既に明白の臭氣がある知らぬと云ふも其
 實は早や第二第三じや、纒に語言あれば是れ揀擇是れ明白と言ふたては無いかし
 かし趙州はサスガに先生じや尊大に構へて嚴格に言はれた事を問ふことは即ち
 得たり禮拜し了りて退ぞけ其方は中々理窟を言ふて人に物を問ふことが上手じ
 や、しかしモ一其れて宜しい禮拜して退ぞかしやれすべて佛教者の問答は問ふ者
 が先づ禮拜して問を起し、それ／＼答を受けて別に問ふことが無くなれば又禮拜
 して自分の席へ退ぞくのが普通の禮儀です、今は恰かも禮拜して退ぞくべき時て

あるから、禮拜し了りて退ぞけと號令しただけのことよ、コレが若し茶を呑むべき
 時て有たら、喫茶去と云ふかも知れん、若し又飯を食ふべき時て有たら、喫飯し去れ
 と云ふて有らう、寢に就き去れと云ふも洗面し來れと云ふも皆同じことて別に何
 の不思議も無い、平常普通の事じや、揀擇でも無ければ明白でも無いぞ、臣と爲ては
 忠を盡し去れ、子と爲ては孝を盡し去れ、花と爲ては開き去れ、紅葉と爲ては散り去
 れ、誠に至道は無難ぞよ、マ一是れて本則がザツと濟んだ、これから圓悟の着語を調
 べて見ましやう。

示衆云の下に道の老漢什麼をか作す葛藤を打すること勿れとある、至道は元來語
 言を絶したものでじや、然るに衆に示して云くなど何を仕るのじやツマラヌ葛藤
 を持出して人に厄介を掛けぬが好いぞ、至道無難の下に難に非ず、易に非ずとある、
 至道は元來難易の間には居らぬ、然るを無難とは何事ぞと咎めた、すべて着語は揚
 げたり抑へたり互ひに相鏡を打て名刀を鍛錬するやうなもので有るから、其つも
 りて見るが宜しい、唯、揀擇の下に眼前是れ什麼ぞ、眼前に椅子もあればテーブル
 もある、コップもあれば水瓶もある、是れ何の揀擇する所があるぞ、然し趙州が今此

二句を自分の物らしく持出して来たところは三祖大師が猶ほ御健在のやうじやと冷かした。是明白の下に兩頭三面終に語言あればと自分で言ひながら矢張そらいふ語言を發して居るところが頭が二つ有て面が三つもある化物のやうであるぞ。サテ又揀擇とか明白とか色々なことを並へ立て、人に見せびらかす様子は小賣店小商賣をするやうなもので儲が無いばかりでは無く元資まで失さねは好いが、一鉢に言句を絶した様子示さうと言句を述べるのであるから魚泳けば水濁り鳥飛べば毛を落す如く跡をかくさうとすれば愈々跡が見えるぞ。不在明白裡の下に賊身己に露はる。明白裡に在らずと云ふだけ明白の賊意が露顯する。一鉢に明白裡に在らずなどと云て、ドこへ逃げて往くつもりであるぞと云ふので什麼の處に向て遁れ去るぞと云ふた也。無の下に也。一箇半箇あり、一人や半人ないても有るまい。果して僧あり出て、問ひ掛けた箇什麼の下に也。好し。一抄を與ふるに、これは質問に出掛けた僧を教唆たのじや、舌上の騎を挂ふと云ふはサスガノ趙州も此僧の質問には閉口であらうと冷かしたやうに云ふて、ますく僧にケシカケル我亦不知の下に這の老漢を抄殺すとある。到頭趙州老僧を問ひ殺したかな。我も亦た

知らずと本音を吹かせたぞ。しかし此の我亦不知の一言には三世諸佛も歴代の祖師も倒退三千里て有らう。日本軍に逐はれた露兵のやうに退却するより外は無い。此邊の着語すべて質問の僧を抑揚して飽まで冷かす氣味が見える。不在明白裡の下に看よ。走りて什麼の處に向て去る。斯う問ひ詰められた趙州がドコへ走り去るか諸君よく趙州の足元を見て居るが好いと門下に注意した。逐ふて樹に上り去らしむと云ふは問ふた僧を冷かすので、最早や手の届かぬところまで趙州を逐ひ上げたぞと云ふのじや。禮拜了退の下に頼に這の一着あり。サスガ趙州老人じや此の一語で三世諸佛も歴代祖師も壓倒し得るぞ。サテく恐ろしい老和尚では有ると云ふので圓悟が其後容を見送りて這の老賊。近代の風外本光禪師が、に着語を下して火牛復青と言はれたも面白い。

頤至道無難 三重公案 言端語端 八裂 一有 分 多種 分

丁二無兩般 何堪四五六七 天際日上月下 下 檻前山

深水寒 一死更不再活 獨體識盡喜何立 行者是他同參 枯木龍吟鎖未

乾○枯木再生花難○邪法難伏難○倒一說揀擇明白君自看○將謂由別人

此頌も長短十句あり本則の要語を其儘第一句にした所は前の第一則の頌と同じやうです、實に至道は無難じや、風は揀擇と吹きはせぬ、雨も明白と降りはせぬ、花は迷ふて開くてもなく、紅葉は悟りて散るでもない、吾々も互ひの日々夜々造次頭沛も其が無ければ成らぬ筈じやに、ナセやしもすれば揀擇明白の兩端に狼狽するぞ、圓悟の着語に三重公案とある、コレは三祖大師の語を趙州和尚が衆に示し其れを今また雪竇禪師が頌に用ゐたから三重の公案じや、満口に霜を、含ひと云ふは、口に含んで満たしむることの出来べき者でない、至道の無難さ加減も言ふに言はるゝものでは無いと云ふほどの評じや、第二句に言端語端これは趙州が纔に言語あれば是れ揀擇これ明白と言ふたのを、雪竇は反對に言ひあらはして、言も至道の端のよ語も至道の端のよと言ふたのです、たゞ言端語端ばかりでは無い、造次も至道の端的じや、頭沛も無難の端的じや、花も月も馬も牛もヨソコで圓悟が魚行けは、水濁ると着語した、言ふだけ野暮じやと云ふアンバイじや、然るに彼れの此れのと云へば、七華八裂よ、搽胡よ搽胡と云ふもメチャクに成ることです、第三句に一に多種

ありとある、一と云ふは平等一味のところ謂ゆる明白の體じや、多種と云ふは千差萬別の有様、謂ゆる揀擇される境界よ、圓悟の着語に一の中に多種あると云ふなら、分開したら好からう、若し又たゞ一般ヒトツきものなら、什麼の了期か、有らん、何の役にも立たぬぞと言ふのじや、第四句に二に兩般ニなし、多種ありと聞いたら復た幾つもあるやうに思ふて揀擇するて有らうが、二に元來兩般は無いぞ、春花秋月山色水聲千差萬別の境、個々絶對獨立獨尊にして他の厄介には預からぬ、圓悟が評して兩般さへ無いので有るから何ぞ四五六七に堪えんと言ふた、然し雪竇は斯んなことを言ふて何の爲めにするのじやと云ふので、葛藤を打して、什麼をか作すと着語した、先づ此れで此公案の頌は済んであるが、雪竇が更に文才を弄して第五句に天際日上り月下る、夜が明ければ日が東海に上り、月は西山に傾むく、是れ此の端的、揀擇が明白か、圓悟は觀面相呈すと云ふた、眼ある者は看よと云ふのです、又た頭上漫々脚下漫々とある、至道の端的は屋根の上にもあれば椽の下にもあるぞ、ト言へばとて頭を昂げて上を仰いたり、頭を低れて下に俯したりしては成らぬぞと制した、第六句に檻前山深く、水寒し、前句と同轍で別意は無い、天際と云へば遠大に聞えるが

檻前と聞けば手近いやうに思はれるまでのことじゃ、ソコで一死更に再活せずと
 圓悟が云ふた、然し山深く水寒しと聞けば何となく深山幽谷の心もちに成て誰や
 らが巴峽猿の啼く處を過ぐれば鐵作の心肝も亦た斷腸と云ふたやうなもので、寒
 毛の卓立するを覺ゆること無しやと吾々に向ての撻着じや吾々はトカク人の口
 うらに乗せられては心を動かすに依てコンなことを言はれるのぞ、獨體識盡きて
 喜何ぞ立せん。此七八の一聯には色々の故事を多く含んであるけれども、其穿鑿は
 おあづかりにして、成句の上だけザット見て通れば、獨體に喜怒哀樂の情の無いは
 勿論である、至道無難の端的も亦た揀擇明白の知つたとは無いぞと云ふのじや、
 識盡てとある識の字は心識または識神とつづいて俗に謂ふ魂魄のことです、圓悟
 の着語に棺木裏の瞠眼とある、これは死中に活所のあることを云ふ俗語じやと云
 ふことです、又盧行者是れ他の同參と云ふ着語は盧行者と云ふは六祖大師が俗人
 てあつた時の名であるが、大師の偈に、生來坐不臥、死去臥不坐、一具臭骨頭、何爲立功
 果と云ふのが有る、其れが雪竇の此句と同參すべき所ぞと云ふの意であらうと申
 すことです、第八句に枯木龍吟銷して未だ乾かすとある、死中に大活を得來つた有

様じや、枯木に風の颯々と觸れる龍の吟ずるが如き聲が起る、銷して未だ乾かすは
 死だと思ふたら未だ息があると云ふやうな詞じや、ソコで圓悟が枯木再び花を生
 すと評した、又達磨東土に遊ぶと云ふた、達磨は西天の第二十八祖であるに復た東
 土の初祖と成た、サテ斯く大死一番して後さらに蘇生し來つて見れば、娑婆往來八
 千邊、八萬四千の煩惱を相手に衆生濟度の千變萬化せねばならぬ、ソコが第九句の
 難々じや、今までは無難とばかり聞えて有たに、今度は反覆して難々と言はるゝ、彌
 陀の本願に打まかせて淨土へ參らせてもらふのは何の世話の無い無難極まる仕
 事であるが、五濁惡世に還りては釋迦牟尼佛の如くにてと云ふところへ來ては、實
 に難々じや、圓悟が裏の方から相槌を打て、邪法扶け難しと云ふた無難の舞臺へ難
 々などと踊り出すことは賛成し得ぬぞと云ふのじや、また倒一説とある、從前の説
 を一倒し來たナ、這裏是れ何の所在ぞ難と説き易と説くぞ、結句に揀擇明白君自か
 ら看よ、ソ、に至りては揀擇も好し明白も好し人々各自に眼を開いて看るが好い、
 他人の足を借りて歩くは至道の往來て無いぞ、圓悟は瞎と云ふた瞎は盲目じや、看
 よと云ふたから圓悟は其んなものを見る眼はもたぬぞと云ふのです、是れ此一瞎

光明遍照十方世界じや、將に謂へり別人に由ると我に看よと云ふのでは有るまい、頼に自から看ると云ふ雪竈も前自から看たくば看るが好い、山僧が事に干からず、圓悟は一向關係は御座らぬぞと云ふのじや、何が故に此の如くなる從來眉毛は眼上に横はれり今さら看るには及ばぬぞ。

第三則 馬大師不安

匪示 一機一境一言一句。且圖有箇入處。好肉上剝瘡。成窠成窟。大用現前。不存軌則。且圖知有向上事。蓋天蓋地。又摸索不著。恁麼也得。不恁麼也得。太廉纖生。恁麼也不得。不恁麼也不得。太孤危生。不涉二途。如何即是。請試學看。

この垂示が五節に分れると云ふことじや、第一節に「一機一境一言一句且らく箇の入處あることを圖るも好肉上に瘡を剝り窠を成し窟を成すとある機」と云ふは機轉と續いて心のハタラキ境と云ふは形に顯はして見せるもの、言句は讀て字の如し、都べて普通教化の手段は機境言句の外は無い、釋尊が華を拈じたのは一境で迦

葉が微笑したのは一機じや、笑て答へずば一機で立て山を見るは一境ぞ、南無阿彌陀佛も一言一句で南無妙法蓮華經も一言一句じや、月落聲鳥啼ても古池や蛙飛び込むも、喝も咄も光明遍照も念佛無間も皆一言一句の範圍を出ることは出来ぬ、箇様な機境言句に涉るものは都べて暫時の間學人を誘引して入處あることを圖るまでのこと、一大光明あることを知らしめんが爲めにマツチをチラリと摺て見せるやうなもので有る、却て好肉上に瘡を剝り窠を成し窟を成す、窠も窟もアナと云ふ字であるが吾々が色々の穴を堀て其中へ自から埋めて居る、其穴の惣名を理窟と稱すると云ふことじや、大乘だの小乗だの顯教だの密教だの禪宗だの眞宗だのと云ふ色々の理窟がある、近頃は哲學だの論理だのと云ふ穴堀機械が多く舶來したから新らしい穴も澤山ふえる、油斷すると無間地獄まで通りぬけじやぞ、第二節に「大用現前軌則を存せざるも且らく向上の事あることを知らしめんことを圖る蓋天蓋地又摸索不着、此れが第二節です、前とソツクリ違ふて機境や言句には涉らぬ、大用は大體のハタラキじや、大體とは宇宙萬象の一大本體、其まゝに活潑々地

の作用を起す、月は照り風は吹く柳は緑に花は紅、それが即ち大用の現前じや、法律

も入らねば規則も不用ぞ、手に任せ拈し來りて是非も無ければ迷悟も無い、然し是れも亦た暫らく向上の事あることを知らしむるまでのことよ、向上は進趣と云はんが如き詞て大智慧門の方じや、淨土門て往相と云ふやうなアンパイぞ、向下と云ふは退歩と云はんが如き詞て大慈悲門の方じや、淨土門て還相と云ふやうなアンパイぞ、詞をかへて申さば自己の本分を顯はす邊を向上と云ひ、利他の方便を廻らすのが向下であるから、即ち前の第一節は全く向下にあたる、蓋天蓋地の蓋の字はオホフと云ふ字で、物の一面に充滿する意味じや、故に蓋天蓋地と云ふは盡天盡地と云ふも同じことで、天上にも地下にも摸索不着とツラマイやうが無いぞと云ふのじや、ソコて第三節に慙麼も也た得たり不慙麼も也た得たり太廉穢生とある、慙麼はコレとかコノとかカクノゴトクとか云ふやうな意味であるから、慙麼も也た得たり不慙麼も也た得たりと云ふのはドチラても宜しいと云ふことじや、宇宙萬象そのまゝに大光明の遍照て、謂ゆる盡十方無碍光中の千紫萬紅捨つべきものは一つも無いぞ太廉穢生と云ふ太の字と生の字には意味が無い、廉穢と云ふは物のコマカなることであるから、サテく能く行届いたことぞと云ふやうな詞じや、第

四節に慙麼も也た得たり不慙麼も也た得たり太孤危生と、前と全く反對じや、ドチラも採用相成らぬとある、大用現前の處には規則が無いから、上告の致しやうも無ければ辯護のしやうも無い、三世の諸佛も此に至りては、聖人の如く、歴代の祖師も、嬰兒の如くじや、太孤危生これも太の字と生の字には用がない、孤危は孤立危険と云ふこととて、千丈の岩石などが直立して居る有様、甚だ險峻て攀ぢ登りやうが無いぞ、二途に涉らず如何か、是なる請ふ試みに擧す看よ、サ、向上向下慙麼不慙麼すべて二途に涉ることは許さぬぞ、ドチラへモ片寄らぬと云ふて途中にブラくして居ることも成らぬぞ、何としたもので有らう、幸に面白い昔し話があるから、擧揚して看せるほどに氣を附けて參究しなさい、

本則 擧馬大師不安証漢語通不也。院主問和尚近日尊候如何。

四可四瓶一時被○三日後不送亡僧是好手○仁義道中 大師云、日面佛、月面佛可熟新詳○養子之縁。

馬大師と云ふは達磨大師八代の法孫て、江西の馬祖山に居られた道一禪師と申して、臨濟大師四世の祖じや、唐の興元四年二月一日に寂せられたが、其前日に此問答

が有たと申すこととす不安は不豫とか不例とか云ふのと同じ意味で、病氣のこと
 じや、圓悟の着語に此漢漏逗少なからずとある、漏はモル逗はト、コフルて器など
 の用に立たなく成た有様じや、馬大師も老衰せられた病氣などをやるやうに成て
 はモ一役に立たぬぞ、其上に別人を帶累し去る、此老漢の不安の爲めに多くの人に
 迷惑を掛けるぞと云ふ、これは千年以前に白骨に成てしまつた馬大師の事ばかり
 ては無いぞ、吾人も互ひに安だの不安だのと云ふことが有るもので有らうか、無い
 もので有らうか、人々各自の主人公を人々各自に診察一番して見るが宜しい、主人
 公には安も不安も無いはずで有るに、何故にか種々さまざまの病的症候の見える
 のは主人公では有るまい、下婢か從僕か食客などの類で有らう、其んなものに面會
 して主人公に遭ふたつもりに成て居るものが世の中に多いと云ふ評判じや、能く
 氣を付けて置かぬと萬一の時に飛だ太耻をかくぞ、院主問ふ和尚近日常候如何、院
 主と云ふは役僧の役名で、此時に馬祖山の院主を勤めて居た僧と見えるが、其人の
 名は傳はらぬ、サテ其院主が馬祖に問ふて云ふには和尚これは馬祖に向てアナタ
 と云ふほどのこと、近日尊候如何、近頃御病氣の様子に承はりましたが御容體は如

何て御座ると云ふた馬祖ばかりでは有るまい、諸君近日尊候如何と人々各自に問
 ふて見るが好い、圓悟の着語に四百四病一時に發るとある、イヤハヤ有りとは有らぬ
 る病氣が皆一時に發つたぞと云ふのじや、院主がコンなことを問ふのが實に自分
 が大病の爲めに謔語を吐くのじやと云ふのです、馬大師元來不安は無い、ソレに
 病氣見舞を言ふとは何事ぞ、雨の降る日に太陽に向て、尊候如何と問ふやうなもの
 よ、或は此着語を馬祖の方へ掛けて、尊候如何と云ふて無いぞ、馬祖の病氣は四百四
 病一時に發つたのよと云ふたを見る説もある、昔し維摩居士が自分には病氣は無
 いけれども一切衆生に病氣があるから自分も病氣すると云ふたことが有るが、馬
 祖の病氣も維摩と同症かも知れんぞ、次の着語の三日の後に亡僧を送らざれば是
 れ好手とあるも、兩方に掛けて見られる、此容體では三日も立たら死亡した僧の送
 葬を行ふ様に成らねば好いがと云ふたのじや、然し院主は仁義道中で問ふたのか
 も知れぬと辯護した、仁義道中と云ふは我國の俗に御挨拶するとか御辭儀するとか
 云ふやうな詞と見える、ソレで馬祖は何と答へたか、大師云く日面佛月面佛實に
 妙な答では有る、是れが向上か向下か、將た太廉織生か大孤危生か、南無阿彌陀佛と

か南無妙法蓮華經とか云ふことは聞いたことも有るが、こんな佛には是れまで御
 懇意申したことが無い、ソッて圓悟が甚だ新鮮と着語した、又圓悟は評唱の中に
 ウ云ふてある、此れ箇の公案若し落處を知らば便ち丹霄に獨歩せん、若し落處を
 知らずんば往々枯木巖前に差路し去ること有らんと云ひ、又只這の日面佛月面佛極
 めて是れ見難し、雪寶も此に至りて亦是れ頌し難しと云ふてある、然し圓悟が更に
 着語を下して子を養ふの縁と云ふた、子を養ふの手段ならばサマデ孤危峻峻なこ
 とを、言ふはづも無さそうなものて有るが、獅子は其子を千丈絶壁の巖上から蹴落
 して其氣力を試みると云ふ例もあるから、結局これは理窟で解了すべきでは無い、
 人々各自に實修實證して默識心通するが宜しい、然し日面佛月面佛と云ふ言句だ
 けの姿は分らんければ成らぬ、是れは佛名經に月面佛の壽命は僅に一日一夜で、日
 面佛の壽命は一千八百歳であると説いてある、十方三世の一切諸佛の中には色々
 な佛が有る、娑婆の釋迦佛は八十で入滅せられたが、極樂の彌陀如來は無量壽じや
 と云ふ評判ぞ、一日一夜の佛もあれば千八百歳の佛も有る、かげろふのあしたゆう
 べをまたぬも、露のひぬまの朝顔も、三千歳の桃も八千年の椿もあると云ふことじ

や、今馬大師は幾つて死だか分らんが、院主が御容體如何で御座ると問へば、一日一
 夜で死ぬる佛もあれば一千八百歳で死ぬる佛もあるぞと答へた、何の不思議もな
 いことよ、然し佛と云ふものは生れたり死たりするもので有らうか無からうか、ソ
 コが工夫のしどころぞ、元來法身佛には生滅去來は無いはずで有るが、衆生濟度の
 爲めには報身應身の生滅去來を示さねば成らぬ、ソコを淨法界身、本無出沒、大慈願
 力、示現去來とも云ふて有る、吾人互ひの生老病死も大悲願力の去來となれば何
 の苦も無く樂も無い、承陽大師は六趣四生に輪轉すとも皆是れ菩提の行願と爲る
 と言はれた、六趣と云ふは天上と人間と修羅と餓鬼と畜生と地獄じや、四生と云ふ
 は胎生と卵生と濕生と化生です、如何なる所へどんな姿で生れても、其れが其まゝ
 に悉く衆生濟度の行願となるぞと云ふことで、見真大師は、安樂淨土に到る人、五
 濁惡世に還りては、釋迦牟尼佛の如くにて、利益衆生さむも無しと言はれてある、釋
 迦牟尼佛も吾々凡夫を御濟度の爲めには法性法身の御姿を、おやつしなされて、吾
 々凡夫と同じ姿の人間にお生れなされ、人間と同じやうに生老病死を示させられ
 た、吾々が設ひ極樂淨土へ往生しても極樂に逗留して獨りて樂しんで居るわけに

は參らぬ矢張り釋迦牟尼佛の如くに一切衆生濟度の爲めには再び此娑婆の五濁惡世へ還つて來なければ成らぬ、サ一斯うなつて見れば生死去來が布教の爲めに巡回派出をするやうなわけ、其面白さ加減言はん方なしと云ふことに成る、其れ故に此日面佛月面佛の六字が、佛法世法一切諸法の蘊底を盡した一語である、是れは一塲の閑話では無い、實着に參究して落處を知れば生々世々受用不盡じや、一此れて本則は濟だとして、あとは雪竇の頌であります、六言が一句、七言が四句、一字句と二字句とが間に有て都合七句の古詩體です。

頌日面佛月面佛開口見佛○如兩面五帝三皇是何物好○可貴可憐二十一

年來曾苦辛自是汝落草○不于山爲君幾下蒼龍窟何惜愁○其用心屈殺

人○愁人○堪述向何誰說○既明眼更須子細○納僧倒退三千莫輕忽

第一句に日面佛月面佛は直に馬大師が院主に答へられた句を拈し來りて諸人に示された、ドウじや此一句の面白さは諸君よく聞えなかと云ふあんばい、圓悟の着語に口を開けば膽を見んとある、此一句で馬祖の膽も見えれば雪竇の膽も見

えるぞと云ふた諸君もよく見えなかつたか、又兩面の鏡の相對して中に於て影像なきが如しとある、鏡と鏡と相對すれば互ひに光と光と相映するのみで、毫髪ばかりも影や像は見えぬ、影や像が見えぬからと云ふて、何も映らぬかと云ふに、映るも映る馬祖と雪竇と二つとも言はれねば一つとも言はれぬ有様相互ひにアリ、と見える吾々も互ひも亦た常に佛祖と相對して兩面の鏡の相對して中に於て影像なきが如くに成らねばならぬ、佛祖に相對してと云ふたら、又別物のやうに思ふかも知れんが、君と臣と相對し父と子と相對し乃至朋友互ひに相對して兩面の鏡の中に於て影像なきが如くにさへ成れば、仁慈も忠孝も皆無爲無作の仁慈忠孝じや、第二句に五帝三皇是れ何物ぞとある、此句に就ては昔から色々な議論があるが、本と此句は禪月大師貫休が公子行の時に、錦衣鮮華手擎鶴、閑行氣貌多輕忽、稼穡艱難總不知、五帝三皇是何物と詠じた古成句を、雪竇が其儘こゝへ借りて來たので、此禪月の句意も二様に見える、公子の傲遊する有様は、下民の辛苦艱難も知らず、祖先の五帝三皇が如何なる苦勞をして國を盛め家を起したか、も知らぬ様子ぞと言はれたと見ても好し、又は公子を誡めて祖先の辛苦を思はぬかと言はれたと見ても見える

が是れ何物ぞと云ふと語勢は矢張り前の意味で五帝も三皇も眼中に無い様子が強いやうである。ソコで雪齋が此句を此へ持込たのは、全く馬祖が傍若無人に日面佛月面佛と云ふた勢ひが佛祖も衆生も迷悟も生死も絶えて眼中に無い様子、如何にも氣高い言ひやうで、世に尊貴だの卑賤だのと云ふことの有ることをも知らぬ風情、彼の禪月が詠じた公子の意氣揚々たる有様ぞと云ふたと見るが一と通りの見かたじや、圓悟の着語もソコと見えて大高生とあるエライ天狗じやナと云ふた氣味です、他を諷することなくんば好しと云ふたも同じ心であるが、雪齋に向て馬祖を侮蔑しては悪いぞと云ふたと見ても、又は五帝三皇を諷じなざるなと云ふたと見てもドウても好からう、然るに天桂禪師は此句を前の句から引き續けて、日面佛か月面佛か五帝か三皇か是れ何物ぞと云ふ意味ぞと言はれた、太郎か次郎かお竹かお梅か猫か杓子か是れ何物ぞと云ふのも同じことよと見られたので、甚た面白いやうでは有るが漢文の法としてソコは見られぬかも知れぬ、然しソコが人々各自の見識じや、諸君は諸君で勝手に見るが宜しい、然るに之を妙な見やうをしたのは、宋國の朝廷の大臣等です、神宗在位の時に此の雪齋頌古を大藏經だいざうきやういはゆる一

切經の中に入れてたいと願ふた所が我君王の祖先たる五帝三皇を是れ何物ぞなどと云ふて國を諷つた句のあるものは大藏中に入れられぬと云ふ評議で、上奏却下に相成たと申すことじや、今日の日本なれば發賣禁止、維新前なら雪齋和尚は斬罪か輕くも遠島へ流されるわけ有た、然るに雪齋は禪月からの借り物にも拘はらず、ソレが中々得意の句です、ソコで第三句に二十年來會て苦辛す、一鉢此公案の頌は前の二句で済んだので、是れからあとには雪齋自分の昔話をして學人を警醒するのです、ア、此雪齋も此事に就ては二十年このかた中々苦辛したぞと云ふ、圓悟が其れを評して自ら是れ汝の落草とからかつた落草と云ふことは大道を往かずに草の中の横道に入り込むと云ふことと有る、其れを轉じて兒を感んで醜を忘ると云ふやうな所に使ふ詞にしたのです、今の詞で申したら其れは、前が自分の勝手に其様な苦辛をしたまてのことで誰れも頼んだわけには無い、元來佛法の大道には苦樂は無いに強て苦辛したは落草と云ふものじや、山僧が事に干からず山僧と云ふは圓悟自分のことです、雪齋がドンなに苦辛しても、此圓悟が關係したことでは無いぞと云ふ、然し其苦辛の有様は、墮子苦瓜だうしくわを喫して幾ら苦くても言ふに言は

れず其時の顔がドンなて有たらうと冷かした然かし此一段の話を圓悟や雪竇の昔話にばかり任せて置ては、切角碧巖を研究する所詮が無い、人々各自に苦瓜を喫して見て而して後に其れを昔話にする時節が無ければ成らぬ、其苦辛の有様を第四句に幾たびか君が爲めに蒼龍窟に下る、君と云ふは日面佛月面佛と無造作に言ひ得る境界を指したのです、蒼龍の領下に珠を得るには幾たびも蒼龍窟に下らねば成らぬ、實地の修行は命がけて有りますから、屢々死地に飛び込まんでは成就しがたいト云ふのを圓悟が打消すやうに、何ぞ恚麼なることを消せん、何もソんなことをするには及ばんと云ふのです、消せん、と云ふは、費さんやと云ふのと同じ詞と見える、驪龍領下の珠は人々各自に元來所持して居るはずじや他の蒼龍窟などに下るには及ばぬぞと云ふたのです、トは云ふもの、錯まりて用心すること、無くんは好し、心得違ひしては成らぬぞと門下へ注意した、屈コレは一字句です、ア、長い間の苦辛で怖ろしい窮窟な目に逢ふた、サスの圓悟も此に至りてモハヤ堪え切れなんだと見えて、人を愁殺すと云ふた、悲しいことを言ひなさるな、昔し實地に命がけの修行をしたことを思へば、ワシとても御同様じや、愁人、愁人、向て、説く、こと

勿れ、其やうなことを同情の人に向て話すものには無いぞと云ふ、第六句に述るに堪たりとコレは二字句じや、窮すれば則ち通ずと云ふとがあるが、多年屈した結果が述るに堪えたりと云ふことに成て、五帝三皇是れ何物ぞと云ふ境界に成り得るぞ、圓悟の着語に何誰に向て、説くとある、お前は述るに堪えたりと言ふが、其れは誰に向て何を説かうと云ふのじや、實地を履んで來たもので無ければ、幾ら説いて聞かせたからとて分るものには無い、サレばとて同臭味の人に向て話したならば、其人が泣くて有らうぞと云ふので、愁人に説與すれば人を愁殺せん、互ひに斷腸の外は無いぞ、是れは圓悟が眞實に雪竇の知音たる一言じや、吾々互ひも其知音仲間に入らぬは成らぬぞ、明眼の衲僧も輕忽すること、莫れコレが結句じや、サ、此の場合に至りては三千世界を見透しにするつもり、衲僧でも、輕々疎忽に看過するとは成るまいぞ、ソコで圓悟が門下の諸子に向て更に、須からく子細にすべし、念に念を入れて綿々密々に參究するが好いぞと注意した、其雪竇に對しては何も輕忽だの鄭重だのと云ふには及ぶまいと云ふので、咄と叱り附けた、然し雪竇の着々誠實なる言句には誰でも、倒退三千て有らう中々寄り附けたものでは無いと、揚げた

り抑へたり相鑑を打て馬大師不安の公案を参究せられたソコの調子を能く吞込んで各自に實参實究するが宜しい。

第四則 德山挾複子

垂示青天白日不可更指東割西時節因縁亦須應病與藥且道放行好把定好試舉看。

此垂示を三節に分けて見る第一節に青天白日東を指し西を割す可からずとある。青天白日と云ふは一點の雲も霞も無い景況吾々各自の本體本性の上に於て迷悟も無ければ生死も無い有様に譬へたのじや東を指し西を割して佛だの法だのと騒ぎ廻るには及ばぬぞトは云ふもの、自己の本分ばかりで済むべきでは無い、衆生濟度の方便としては第二節に時節因縁亦た須からく病に應じて藥を與ふへし時節と云ふは謂ゆる臨機應變で順縁でも逆縁でも因縁次第に衆生の病氣を見はからふては其れ相應の藥を與へねば成らぬサー斯う二た筋の道が有るがドウしたもので有らうぞと云ふので第三節に且らく道へ放行するが好きか把定する

が好きか試みに舉す看よ放行と云ふは自由に任せることと即ち第一節の青天白日がソコじや把定と云ふは取り留めて收束することと有るから即ち第二節の應病與藥です果してドチラが好いぞ試みに一則の公案を拈提して見せるぞ能く氣を附けて参究さつしやれと云ふのじや。

本則舉德山到瀉山挾複子於法堂上從東過

西從西過東顧視云無無便出不得草草

云勘破了也德山至門首卻云也不得草草

便具威儀再入相見和尙瀉山擬取拂子雪竇着語

德山提起坐具云和尙瀉山擬取拂子

德山便喝拂袖出法堂著草鞋便行

云勘破了也德山背卻法堂著草鞋便行

瀉山至晚間首座適來新到在什麼處

首座云、當時背卻法堂、著艸鞋出去也。○靈龜曳尾○好與三十棒○瀟山云、
 此子已後向孤峯頂上盤結草庵、呵佛罵祖去在。○下稱後張弓○天雪
 寶着語云、雪上加霜。然○點果

さて此本則は徳山禪師と瀟山禪師との立ち合て相撲なら關取と關取の取組じや、
 徳山と云ふ人は本と三論宗や法相宗を學んだ學僧で禪宗は知らぬ人て有た殊に
 金剛般若經が得意で講釋は能く爲られたが即心是佛と云ふことを知らぬに依て
 禪宗の宗匠たちが即心是佛とか本來成佛とか説くのを面憎く思ふて禪宗を攻撃
 しやうと云ふ考から澧州と云ふ所へ往く途中で或る茶屋へ休むと其茶屋の婆々
 が餅を賣て居るのを見てコレ婆アーさん拙僧に其餅を二つ三つ賣て下さいと云
 ふた婆々が云ふには餅を買て何になさる○點心をするから賣てくれ點心と云ふ
 は心を轉ずるとも書くので腹の空たときに鳥渡何か食ふこととす婆々は點心と
 聞いて然らばお問ひ申したい事が有るが其れをお答へ下されてコレ婆々に得心
 が入たなら餅を御供養いたしましやう一鉢貴僧が背負ふて御座る本は何て有り

ますか○コレは金剛般若經の講釋を拙僧が書たのであるが其れを問ふて何にす
 る○イヤ其金剛經の中に分らんことが有るからお問ひ申したいのです○金剛經
 の中に分らんことが有ると云ふならドンなことでも問はしやれ○然らばお問ひ
 申しますが貴僧が今點心すると言はれたが金剛經の中に過去心も不可得なり現
 在心も不可得なり未來心も不可得なりと説いて有る然るに貴僧は何れの心を點
 ぜらるゝやサア答へて下さい○ササガの徳山こゝに至りて一言も無い佛法は講
 釋だけでは自由がきくませんぞ婆々はセ、ラ笑て餅は上げますまい餘處へ往て
 買ふならお買ひなさい徳山は驚ろいたの驚ろかないのと云ふ沙汰で無い、お婆ア
 ーさんお前はドウして其様なエライ見識を具へたのじや○ナニ此近處に龍潭禪
 師と云ふお方が御座る貴僧も其お方に參じて御覽なさい婆々に耻をかゝせられ
 ない位のこととは有らうよと聞いたから、徳山は年來長い間苦辛して隣の家の寶物
 を數へるやうな學問ばかりして居たのが誠に耻かしいと云ふので切角背負ふて
 來た金剛經の抄疏を皆火に投じて焼き棄て、仕舞ふて直に龍潭禪師の處へ往か
 れた其れから又一段の面白い話があるが餘り長くなるから其れは預かりとし

て置いてトにカクに徳山はコウ云ふわけて禪學へ飛込んだ人で有りますから誠に太氣な人であります、サテ其後龍潭の處で悟を開いたが尙ほ諸方の禪師たちに歴參しやうと思ふて或る時に瀉山禪師の處へ往かれた其頃瀉山禪師は天下に名高い宗匠で此人の弟子に仰山と云ふ名師が有り兩人の名を合せて瀉仰宗と云ふ一宗の祖師に成られた人で、コレが達磨門下が五宗に分れた中の一番古い宗旨です、さて徳山は此瀉山禪師の處へ何をしに往たので有らうぞ參禪問法の爲めに往たのでは無くて瀉山の悟を勘檢しに往たやうに見えるソコで複子を挟さみて法堂上に於て東より西に過ぎ西より東に過ぎとある複子と云ふは行脚僧の荷物のこととて法堂と云ふは瀉山禪師が弟子たちの爲めに説法して居られる處のことです、ソコへ徳山は旅支度のまゝて荷物を引提げたまゝノソリノソリと飛込て東から西へ西から東へと歩き廻りて、サテ何と云ふたかと思へば願視して曰く無々いかにも傍若無人のやりかたじや、人間並の上で申したら無禮とも不敬とも申しやうの無い致し方です、無々ないぞくと云ふたので有らうが何が無いので有りましたやうぞ、花もあれば月もある風も吹けば雨も降る世の中に、何が無々じや、こんなこ

とを仕たり言ふたりしたなら瀉山がドンなことを言ふかドンなことをするかソコを勘檢しやうと云ふ考か知らんが、サスガは瀉山じや八風吹けどもビクともせぬ富嶽の巍然たるやうなものじや、ソコで徳山便ち出つとツイと外へ出て仕まふたコゝの様子を後に雪寶が着語して勘破了也、勘破了也と云ふは勘檢して仕まふたぞと云ふこととて、徳山が瀉山を勘破したので有らうか又は瀉山が徳山を勘破したので有らうか又は雪寶が瀉山徳山兩人の作略を勘破したので有らうかソコは人々各自に見るが好い、徳山門首に至り却て曰く也、草々なることを得ず、傍若無人にヤツ附けて見たが更に考へ直したので、門首に至ると云ふは瀉山の寺の門の處まで出て往てと云ふこととて、草々は匆々と云ふも同じこととて、コレは少し丁寧に勘檢して見なければ成らぬと云ふのです、便ち威儀を具して再ひ入て相見ず、前には旅支度のまゝで無禮至極な有儀で有たが、今度はチャンと弟子たるものが師匠に物を問ふだけの威儀をつくらふて再ひ入て相見す、禪宗ではお目に掛るとか拜謁するとか云ふほどのことを相見すると云ふのが平生の詞に成て居ります、其時に丁度瀉山禪師が坐つて御座つたが、徳山は坐具を提起するとある、坐具と

云ふは禮拜するときに下へ敷くもので原名を尼師壇と云ふ袈裟を掛けたときに
必らず持たなければ成らぬのです。瀧山は坐して居る徳山は立禮て立つて居ての
ことですから、坐具をたゝんで手に持て居たのを更に提起と少し引き上げて、サテ
何と云ふたかと云ふに、和尚、和尚と云ふたのは瀧山禪師を呼だので、先生とかアナ
タとか云ふほどのことです。瀧山は徳山が坐具を提起して和尚と呼び掛ける様子
を見ると、椅子の側に置いて有た拂子を取らうとした、ソウすると間に髪を容るゝ隙も
無く、徳山便ち喝して拂袖して出づ。何と烈しい掛合では御座らぬか、徳山が和尚と
呼び掛けただけでマダ外に何にも言はぬに、瀧山は拂子を取らうとした、スカサズ
徳山は大きな聲をしてカアーツと言て袖を振り拂て出て往て仕まふた、コレは一
鉢いかなことと有りましやうぞ雪寶は相變らず勘破了也と着語した、今度は徳山
が門首で考へ直す用も無いと見えて法堂を背却して草鞋を着けて便ち行く、サツ
サと旅支度をしてドコへか往て仕まふた、コレは先づコレで一幕としてサテ瀧山
晩に至て首座に問ふ、適來の新到什麼の處にか在る、晩に至ると云ふは其日の夕方
に成ると云ふほどのこと、首座と云ふは弟子たちの中の第一座に居る人のこと、新

到と云ふは禪宗の一つの名詞で新たに弟子入りを願ふて來たもの、このことを新到
と申します、新入の生徒と云ふほどのこととす、適來と云ふは先き程からと云ふや
うな詞で有るから、先刻見えた徳山と云ふ僧はドコニ居るぞと首座に問はれたの
です、ドコニ居ると云ふのは五尺の形體のことでは無からう、アノ徳山と云ふもの
の立脚の地はドンな處であると思ふぞと云ふて瀧山が首座を勘檢せられたのと
見える、其れとも知らずに此首座はノロマにも當時法堂を背却して草鞋を着けて
出で去れり、アレは先刻旅支度をしてドコへか往て仕まひました、頓と力の無い答
へやうじや、瀧山はソレにも構はず此子已後孤峯頂上に向て、艸庵を盤結して佛を
呵し祖を罵しり去ること、在らん、此子と云ふは徳山のと、孤峯と云ふは山々の多く
ある中に一段と秀てたる峯のことであるが其頂上と云ふので有るから、絶對高尙
この上も無い所です、ソレへ草庵を結んで佛を呵し祖を罵しるとて有らうと言は
れる、瀧山が大層に徳山を褒められたやうに聞える、然るに雪寶は雪上に霜を加ふ
と着語した、瀧山老人も餘計なことを言ふたものでは有る、凡そ生きとし生ける者
誰れか孤峯頂上に草庵を結んで居ぬものがあるぞ、佛を呵し祖を罵しると云ふも

後れた話じや、花は佛と咲くか、月は祖と照るか、元來佛だの祖だのと言ふもの、有らうはづが無いに、何の呵するの罵しるのと云ふ世話が入らうぞ、ソナなことを言ふだけ雪上に霜を加へると云ふもの、餘計な世話じやと云ふあんばい、先づコレで一と通り本則のちもてが濟んだ、ソコで圓悟の着語を調べて見やう、徳山到滬山の下に擔板漢とある、擔板漢と云ふは板を擔ふた男と云ふのであるから、後を振り向て見ることも出來ず、左右を顧りみることも成らず、たゞ一方に往くのです、當節なら馬車馬と云ふても宜しい、徳山が滬山に到る意氣軒昂の様子、馬車馬のやうじや、しかしコイツ中々喰えない奴ぞと云ふので、野狐精と第二の着語を下した、挾複子於法堂上、の下に妨けす人をして疑着せしむとある、いかにも傍若無人の仕方であるに依て如何なる人でも何をするので有るか、疑はぬものは有るまい、然し其の人を疑着せしむる所が却て脚色が見えて、大失策ぞと云ふので、敗缺を納ると言はれた、從東過西、從西過東、の下に甚だ禪ありて、什麼をか作さん、徳山は頻りに悟りに誇つて居るものと見えるが、何も珍らしくも無いことを、河の端へ水を賣りに往たやうなものぞ、無々の下に好し、三十棒を與ふるに、御褒美に思ふさま打ち擲

つてやるが好い、然し甚だ氣天を衝く、ちそろしい勢ひでは有るぞ、眞の獅子兒よく獅子吼す、アノ無々と言て飛び出した様子、獅子奮迅の有様じや、勘破了也、の下に錯と果然と點と三つ續けさまの着語が有る、錯はチガフたと云ふやうな言葉、果然は其れと反對でソレにチガヒないと云ふ言葉、當節の演説場などでヒヤ／＼と云ふたり、ソウ／＼と云ふたりするやうなもので有るが、何がヒヤ／＼て何がソウ／＼ウやら一人て兩方を言ふたばかりで無く、モ一つ點と言ふたコレは點定と點破と點頭との差別が有ると言ふことじや、が點定ならば事物を把り留めて動かさぬ方であるから、宇宙の萬象の／＼其本位に住する有様、點破ならば事物を放擲する方であるから、一切諸法を空散して跡を留めさせぬ點頭ならば、俗に謂ふ合點することじや、圓悟が此の通りの三つの着語を三ヶ所に下して、諸人還て會すや、有時は一莖艸を將て、丈六の金身となして、用か、有時は丈六の金身を將て、一莖艸となして、用ゆと云ふてある、丈六の金身と云ふは佛のことじや、或時は佛陀世尊を一本の艸として使ふことも有り、又或時は草一本を佛陀世尊として禮拜供養することも有るぞと云ふ、下にカク佛と草とが同じ價値に違ひない、露のひぬ間の朝顔の蔓、一筋

と壽命無量の金剛不壞の身と相違に違ひは無いと見える、何でも實參實究が肝要
 じゃ、不得草々の下に放去收來とある放去は無々と云て出て去た有様、收來は更に
 門頭で考へ直した様子、頭上太高生、末後太低生とある、太の字と生の字には意味が
 無い、龍頭蛇尾と云ふたほどのこと、前にはエライ勢ひで有たが今度は又甚だ御丁
 事じゃ、と冷かしたのじゃ、過を知て必らず改む能く幾人がある、然し前の勢ひに
 乗じたのが悪るかつたと知て更に草々なることを得ずと改めたのが感心じゃ、さ
 ういふ心掛の人は誠に少いもの、是れも冷かしたやうに聞えるけれども、其實
 は門下の者に着實參究を諭されたものと見える、再入相見の下に依前として道の
 去就を作す、コレは徳山が第二の手段として威儀を具して再び入て相見したのを
 圓悟は肯がはぬのじゃ、矢張り様に依て胡盧を書き其のやうな有りふれた所作を
 するかと罵しり更に己に是れ第二重の敗缺と云ふた、前の粗暴も敗缺、今度の丁寧
 も敗缺、と云ふたことは、蓋山老人を勸破することが出来ぬのみで無く、峻ア、危険
 なことでは有るぞ、蓋山坐次の下に冷眼にして道老漢を見る、徳山元來意地の悪い
 男であるなら威儀を具して再び入て相見するときに蓋山老人がチャンと坐つて

居るのを見るとイヤ、目付をして彼れを睥んだであらう、然し蓋山のやうな虎の
 鬚を拵ることは也た須からく是れ、還般の人のして始て得べし、サテ、冒險な仕
 事ではあるぞ、和尚の下に面を改め頭を換ふとある前には無々、今度は和尚、調子が
 變つた、風なきに浪を起す、元來大地に衆生なし問ふべき法も無ければ答ふべき
 法も無いに何をすることやらと圓悟が獨り言を云ふてツブヤイて居る、擬取拂子
 の下に須からく是れ、那漢にして始て得べしとある、蓋山は敢て徳山に答ふるても
 無く、サリとてポンヤリして居るても無く、ソロリと拂子を取りに掛つた、サスガは
 蓋山じゃ、劍も抜かず矢も放たぬ間に強敵を挫く手段がある、ト云ふので、書を帷
 幄の中に運らすと評した、サ、斯う有てこそ妨げず、天下人の舌頭を坐斷するに、徳
 山ばかりではあるまい、滿天下に誰一人この蓋山に向て物の言へるものは無から
 うぞ、拂袖出の下に野狐精の見解この畜生メがと云ふたやうなアンパイ、中々一筋
 縄ては心かぬ奴ぞ、追の一喝また權ありまた實ありまた照ありまた用ありとある
 長い著語は恐らく圓悟の下語では無くて後人が心覺えに書き入れなどをしたの
 が着語の中に混じたのでは有るまいかと思ふ、權實だの照用だのと經驗の注釋の

やうなこと面白くもないやうに思はれる。一等に是れ雲を撃らひ霧を攫む者中に就て奇特なり。コノは徳山の活機を稱賛したのじや、一等等と云ふは達磨以來歴代の禪祖だち誰れ一人としてエラク無い者は無いかと云ふので雲を撃つらひ霧を攫むと云ふは龍の空中をかける有様を形容した詞じや、サテ其龍の多い中にも徳山はまた一段エライ者では有ると云ふので中に就て奇特と言はれた、勘破了の下にまた錯と果然と點との三語を連下してある、ノック、ヒヤ、チヨンと言ひつづけた調子、著紳鞋、便行の下に風光愛す可しと徳山が袖を拂て出て行く有様の瀟瀟落落たる景況を圓悟が羨ましさうに看みて門下の者の顔を見まわしたらうかと思はれる、ソコで然し公案未だ圓ならずと更に一語を下し、其上に頂上の笠を麻ち得て脚下の鞋を失却すと云ふたのみならず已に是れ喪身失命し了れりと言はれた徳山が一喝を下して拂袖して出掛けた活機は笠を拾ふて草鞋を失したやうなものゾ、其實は瀉山が拂子を取らうとした時に徳山の頭を打ち落とされたのよと評したのじや、在什麼處の下に東邊に落節し西邊に抜本す、是れは瀉山を評したので瀉山が前に徳山を接得しやうとしては一喝で遁け出され、今度は首座を接しや

うと思へば無感で暖簾と脛押するやうな有様、東邊では落節し西邊では抜本じや、抜本と云ふは商賣の資本を亡くすること、落節と云ふは商賣の掛引に損耗することじや、眼は東南を觀て意は西北に在り、コノは瀉山が首座に適來の新到什麼處に在りやと問ふたのは、其實徳山の事を問ふたのでは無くて首座の識見を勘驗したので有るから口と心とが違ふて居るぞと云ふ意味、出去也の下に盤龜尾を曳くとある、コノは何やら故事のあること、龜と云ふものは子を生むときに卵を沙の中に藏して置いて自己はソツと餘處へ往て遊んで居る、其れは卵の在る所を他のものに知らせまいとての手段である、そうじやが、其ソツと餘處へ通げて往くときに尻尾を引摺た跡が沙の上につくことに氣が附かぬから、藏せば愈々其跡があらはれると云ふやうな意味のところ、盤龜尾と云ふことを云ふて、首座の答に力の無いのを訪つたのじや、ソコで好し三十棒を興ふるに、叱り附けた、このやうな無感覺な首座は、チト痛い目に遭はせて遣るが好い、道般の演腦後に多少を喫せしむべし、ドシ、打擲つて遣らねば成らぬぞと重々首座を呵嘖する、屬祖去在下に賊過後の張弓、瀉山が今さらに斯んなことを言ふのを圓悟が口惜しがつて、

ゼ彼の徳山が一喝して遁げ出すときに其う言はなんだぞ、盜賊の遁げてしまつた後で弓を引いたからとて何にも成らなくては無いか、トハ云ふものの、瀧山の眼は高いぞ、天下の積僧も跳不出いかなるものでも此の瀧山が張つた網の目をくじるとは出来まい、雪上加霜の下に圓悟が又錯と果然と黠と三轉語を下した例のノウ<とヒヤノ>、チヨンと一點やつたのじや、これがマ、圓悟の見かたよ、ソコで雪寶のは何と見た。

頌 一勘破言猶在 二勘破公案重 雪上加霜會 峻墮三段不同 飛騎將軍在什麼處

入虜庭再斬○賊軍之將無分 再得完全能 幾箇得活中 急走過傍若無人○三十六

用 不放過穿卻鼻孔 孤峯頂上草裏坐果然○穿過鼻孔也○未爲奇特○爲什麼卻

三々蓋路行○唱
拍相應○便打

長短六句の古詩體の頌じや、六言が二句ある其れを三言四句と見る向もあるて有らう、第一句の一勘破、二勘破、これは雪寶が本則を擧揚したときに勘破了也と云ふことを二度言ふてある、其れを其儘また頌にして來た、彼の徳山が無々と云て飛び

出した時に勘破了也と言たが、徳山が瀧山を勘破したと云ふのやら、瀧山が徳山を勘破したのやら、又は雪寶が瀧山、徳山兩人を勘破したのやら、何が何をドウ勘破したので有らう、次に徳山が一喝して飛び出した時にも同じやうに勘破了也と言つたソコで圓悟の着語に言猶ほ、耳に在りとも、兩重の公案とも有て、先刻本則で承はりましたと云ふアンバイの評じや、又過と云ふてある此れはスギタと云ふ意味で、トウに濟んでしまつたことと云ふほどのことよ、雪上に霜を加ふ會つて峻墮すと云ふは本則の瀧山が首座を勘驗して此子已後向孤峯頂上盤結、神庵可佛、屬祖去在と云はれた所て雪寶が雪上加霜と云ふて置たのを其まゝ、頌の句にして會峻墮と云ふ三字を加へたまでじや、峻墮と云ふはアヤウイことと有たソと云ふ詞、圓悟が三段不同と着語した、一勘破と二勘破と雪上加霜との三段みな其調子に差別が有るゾと云ふ詞であるが、此着語が三段不同であるばかりでは有るまい、月は月よ、花は花よ、凡そ宇宙間に不同ならぬものは無いゾ、在什麼處と云ふ着語は雪寶が會つて峻墮すと言てアブナイことよと頌したが、其アブナイ處はドコに在るゾ工夫して看よと圓悟が門下に注意したのであると申すことじや、飛騎將軍虜庭に入るコレは

漢の時代の故事で漢の武帝の臣下に李廣と云ふ大將が有たが馬に騎ることが達者で有るので武帝から飛騎將軍と云ふ名をもらふたと云ふことじや、又一説には天子から名けられたのでは無く敵の虜等が其う言ふて稱賛したとも云ふが、其李廣が單于と云ふ虜に擒にされて虜の酋長の前へ引出された、其時李廣は少々手疵を負ふて居たが虜等は李廣を馬と馬との間に寝かして置て已に斬殺さうとした、李廣は目を閉ぢて死たふりをして居たが、側に一人の虜が善馬に騎て居るのを見て、李廣はスカサズ飛び起きて其虜を付き落して自分が其馬に飛び騎り剩つさへ其虜の持て居た弓矢を奪つて、一目散に駆け出してトウ／＼逃げのびて漢の本陣へ歸つて來たと云ふことが史記の李廣の傳に見ゆるが、今徳山が瀉山老人の虎の鬚をチヨイト引張て見てアブナイ所を一喝して飛び出した様子が李廣に能く似て居るゾと云ふのじや、ソコで圓悟が嶮と着語してアブナイゾと注意した、更に瀉山に建議して徳山のやうな敗軍の將を再び斬るには及ぶまいゾ、先刻の無々て大敗北ソレに懲りずに復た一喝、打捨て、置ても彼は已に喪身失命で御座ると飽くまで徳山を抑へつけた、再び完全を得る能く幾箇かあると雪竇は徳山をほめる、ソ

コで圓悟は死中に活を得たりと相槌を打つ、急に走過す放過せずコレも一句と見ても三言二句と見ても宜し、急に走過すと云ふは徳山の敵馬に騎て逃げ出した有様、放過せずと云ふはサスガの瀉山老人なか／＼徳山に諷着されぬと褒めた圓悟が急走過の下に傍若無人と着語してある、徳山の一喝して拂袖し去た勢ひは實に傍らに人なきが若くてあると云たので、更に三十六策汝が神通を盡すも何の用をか作すに堪えんと評した、兵法に三十六計を説いて遂に通ぐるが第一の上策と成て居ると云ふことじや、コレは徳山を抑へたので、其次に不放過の下に理能く豹を伏すと着語した、コレは瀉山が優柔の手段を以て強猛なる徳山を勘破した景況、鼻孔を穿却せよと云ふは鼻の穴へ綱を透せと云ふのであるから、荒れまわる牛を生捕にしたやうなグアヒ、結句に孤峯頂上草裏に坐すとある、此一句に二様の意が見えると云ふ評判じや、しかし其語は瀉山が徳山の後來を見ぬいて此子他日孤峯頂上に向て艸庵を盤結し佛を呵し祖を罵しり去ることあらんと云ふた詞を其儘七言一句にしたまで、有るが、其意は瀉山自身が孤峯頂上に草裏に坐して居るとも見える、又やはり徳山の後來を言ふたとも聞える、雪竇の頌には本則の語を其まゝ、

に持て来て而して其意味は更に深く成て居るのが多いからソコは人々の親しく
 参究すべき所である、孤峰頂上と云ふは草の生えぬ所て大智慧門超絶の地、草裏と
 云ふは草茫茫たる所て大慈悲門慈兒忘醜の境界、其つもりて各自にドウとも解し
 て見るが好いが、圓悟は果然と着語した、雪竇の此句に同意と見える、更に鼻孔を穿
 却するも也、未だ奇特と爲さずと云ふた、コレは前に鼻孔を穿却せよと云ふて置
 たが、其れてさへも未だ〱奇特とは言へぬものを、何故に草裡などに坐するのじ
 やと、瀉山に向つたので、ソコで、什麼としてか却て草裡に在て坐するゾと云ふ着語
 を連下した、其次に咄とある、この咄却は雪竇が頌の結末に置たので、圓悟の着語で
 は無からうと云ふ説がある、成るほど其方が面白いやうじや、其れならば前の草裏
 に坐するのを咄却して叱り附けたと見える、會すやとあるコレは、圓悟が門下の者
 に注意したので、ドウじや合點が往たかと云ふたまでのこと、兩刃相傷と云ふは英
 雄と英雄とが戦へは兩方の刀と刀に傷が附く、徳山と云へ瀉山と云へ又それを評
 した雪竇と云へ孰れも孰れじや、兩々三々奮路に行くこと二人も三人も道づれに成
 て格別斬新なことも無いソと圓悟が言ふ、然らば何ぞ斬新なことの有るべき筈か

と云ふに、元來宇宙に斬新なことの有るべき筈では無い、花はいつも花よ月はいつ
 も月よ、ソコで唱拍相隨ふと歌ふものが有れば手を拍つものが有る、徳山が歌へは
 瀉山が踊る雪竇が囁やす、圓悟がドウするゾ便ち打つ、この一棒には虚空も痛い痛
 いと言て泣くやら笑ふやら。

第五則 雪峯盡大地

垂示 大凡扶豎宗教、須是英靈底漢。有殺人、不貶眼底手脚。方
 可立地成佛、所以照用同時。卷舒齊唱、理事不二。權實並行、放
 過一著、建立第二義門。直下截斷葛藤、後學初機、難爲湊泊。昨
 日恁麼事、不獲已、今日又恁麼罪、過彌天。若是明眼漢、一點謾
 他不得。其或未然、虎口裡橫身、不免喪身失命。試舉看。

垂示は何れも皆佛果圓悟禪師が門下に對しては垂誡教示じや、今度は何を垂示せ
 られたぞ、禪門の大宗匠が學人を接するやうす、實に人情を容れられぬ有様じや、宗

教を扶堅すと云ふは人の師匠に成るにはと云ふほどのこと、宗教は元來人々各自に具へて居るもので有るけれども、先覺者の扶助を得て始めて堅立することの出来るが多い、故に大凡そ人の爲めに宗教を扶堅させやうと思ふには、並大抵のことは出来ぬ須からく是れ英靈底の漢なるべし、英は千人に勝るゝを英と曰ふとも申して拔群絶倫の人のと、靈は靈妙不可思議の靈の字で人間普通の智識では無い、いかにも神か佛かと思ふほどの靈活の作用の有る人で無ければ成らん、漢は男子と云ふほどの俗語じや、然らば其英靈は加減はドンなて有るか、と云ふに、人を殺して眼を貶せざる底の手脚あるを要すとある、平生は如何にも豪傑らしい人で有てもサア、と云ふ時に成て人を手に掛けて殺すと云ふやうな場合に成ては、餘ほどの馬鹿か大悪人か、さも無ければ眞の大豪傑で無ければ、幾分か心が動くに違ひない、其心の動く様子を眼を貶すと形容せられた、眼がチラ／＼とすること有らう、然るに今佛祖の大道を擧揚して人天の大導師と爲る人は、法の爲め道の爲めに毫髪ほども人情を加へず、露ばかりも我見を雜えぬに依て、之を世間の事に譬へて見れば、人を殺して眼を貶せざるやうなものよ、何も佛祖の宗教を扶堅するものが、人

殺しをして平氣で居ると云ふわけでは無い、其れを下手に誤りて昔は安りに棒チギリなどを振り廻して法の爲めに殺してやるぞなどと云て、随分雲水坊主を打ち殺したなどと云ふ話もある、飛ても無い事と申さねば成らぬ受け難き人身を受け遣ひ難き佛法に遣ひながら、其位なことも分らぬ者に打ち殺されてタマルものか、然し此第五則の主人公である雪峰禪師は随分手荒いことを行らかす人であつた、其人情を容れぬ無慈悲のやうな大慈悲の手段が有つて、方に立地に成佛せしむ可し、サも無いと一生虚しく過ぐして切角佛法に遣ふた甲斐も無いことに成るのが多いぞ、然らば其立地に成佛させる手段と云ふはドウすることかと云ふに、所以に照用同時卷舒齊く唱へ理事不二權實並べ行ふとある、照用の二字は其機を鑑みるを照と云ひ其機に應ずるを用と云ふと、古人が注したのもあるが、其れでも好からうとにカク間に髪を容るゝいとまなく直接に活照活用することよ、照と云ふは心が考へること、用と云ふは其考へた通りを實地に行ふこととて有るが、何事に對しても、先づ考へて其れから後にと云ふやうなノロマなことでは無い、ソコを同時と云はれたものじや、卷舒齊しく唱ふと云ふのも詞が變つただけで照用同時と意味に

變りは無、經論の講釋などで使ふ詞て言ふたならば卷と云ふは折伏のことて、舒と云ふは攝受のことよ、又與奪と云ふも同じ意味じや、然るに其二つを或時は奪て折伏し或時は攝受して與ふると云ふわけでは無く、齊しく唱ふと云ふのであるから、卷とも舒とも痕迹は見えぬ、箇様な提撕の仕方て有るから、教家などで理事とか權實とか色々ひつかしく講釋することも、皆不二並行て理論と事實とか二つに成らぬ、權の方便も實の目的も別々には成らぬと云ふのじや、然るにコレでは元來佛も無ければ衆生も無い、悟りも無ければ迷ひも無い、即ち生佛不二迷悟同時と云ふので謂ゆる向上の一著と云ふのであるから、更に其一著を放過して第二義門を建立して直下に葛藤を截斷す、トカくに多くの學者が理事とか權實とか生佛とか迷悟とか色々な葛藤に纏綿されて、向上第一義の一著に到着することが出来ぬに依て、已むを得ず第二義門を開いて先づ直下に其葛藤を截斷して纏綿を解脱させることて有るが、其れすら後學初機と云ふ並大底の人では溟泊を爲し難し、中々寄り附くことが出来ぬ、溟はアツマル泊はトマルて大海を渡りてあるく多くの船が風波を避けよ、い港へ集まつて錨を卸すことだ、そうなる、ソコで昨日も恁麼なる事、已むを

獲す今日も又恁麼なる罪過、瀾天であるぞと云ふ、恁麼はドコでも此通りと云ふだけの俗語であるが、コ、て昨日も此通り今日も此通りと云ふのは、此通りに色々な方便を廻らして參禪辨道の手引をして居ることて有るがと云ふ意味じや、サテ其方便手引が實に已むを得ぬに起つたことて、元來宇宙の眞理と云ふものは口に掛けて彼れの此れのと辯論したり、所作に掛けてドウじや、コウじやと形容したりすべきものでも無ければ、結局辯論し得べきもので形容し得べきものでも無い、然るに今は向上一著の第一義門に直に到着し得ぬ後學初機の爲めに、萬々已むを得ず色々な方便手立を廻らすことであるが、元來無疵の美しい壁に疵を附けるやうなものて有るから、罪過瀾天じや、瀾天は天に瀾ると云ふので身の置き所の無いほどの大罪であることと云ふことじや、ジャに依て此道に參する學人が、若し是れ明眼の漢ならば、一點も他を説することを得ず、實に萬々已むを得ざるの提撕を受けるので有るから、盲目て無い限りは毫髮ばかりも此間に我説邪謬増上説等を起すわけには往かん、眞實至誠に參究せんければ成らぬ、其れ或は然らず、若しヒョット其れが反對て有たならば、虎口裏に身を横たふ、猛虎の口の中へ飛び込むやうなもの

て喪身失命を免がれざらん。ドウせ命は無いぞ地獄の釜の底まで真倒さまじや決して浮ぶ瀬は無いぞ其れに就て雪峯禪師の示しがある試みに擧す看よ。

本則 擧雪峯示衆云山僧從來不一善見眼晴直引衆外只恐放不下盡大地撮來如粟米粒大手是什麼

漆桶不會打鼓普請看爲三軍

雪峯和尚は此前の本則に有た徳山禪師の弟子で、雲門大師の爲めには師匠じや平生學人を接するに甚だ峻峻なことで有た、或る時などは雲門が如何なるか是れ佛と問ふたところが、この和尚が一言に叱り附けて寐語すること莫れ、チゴトを言ふな、實に人情を容れられぬ接しかたじや、然し今のところは垂示にある通り事已むを得ず罪過彌天と知りつゝの示衆であるから、少しはヤサシイことでも云ふかと思へば、盡大地撮し來るに粟米粒の大きさの如くである、と云ふ、盡大地と云ふも三千大千世界と云ふも一天四海と云ふも其詞はドウでも好い、何か知らんが盡大地とでも云へば大きいものゝやうに思ふて有らうが、其れを撮し來ると云ふは指の先

でツマンで見れば、粟米粒ほどの大きさをと云ふ、粟と云ふは日本の俗語にモミと云ふので、まだ殻を除かない米のことだ、さうな盡大地は且らく置き吾々互ひの五尺の身體はドウじや、大きいか小さいか、盡大地と聞いては何となく大きいやうな心もちがしたり、粟米粒と云へば何やら小さいやうな心もちがするやうては、己れの身體の分量も分らぬぞ、トニカクに先づ大小の邊量を抛却して來んては相談にはならぬ、ソコで雪峯が面前に抛向して見せられた、抛向と云ふは、ナゲダスことじや、ナゲダサレたなら誰にも見えさうなものであるに、漆桶不會、漆桶と云ふは眞黒なと云ふ譬の俗語、不會は合點がゆかぬと云ふこと、有るから、粟米粒の大きさの盡大地が鼻のさきにゴロ／＼して居るのに、其れが少しも見えぬとは如何なることぞ、皆これ情識思量に驅逐せられて、大小深淺迷悟凡聖等の邊量を超越することが出来ぬからのことよ、眞理は天井の上にもあれば、椽の下にもあるぞ、ドウじやマダ見えぬか、見えぬなら仕方が無い、鼓を打ちて普請して看よ、大勢よび寄せて懸掛りて探して見るが好いと言はれたのじや、普請と云ふは、マアチクコフと讀むので、多くの人を一同に頼むと云ふ意味、コレは禪宗の寺に雲水僧が五十人も百人も居

るのを寺中の大掃除などをするとときに普請鼓と云て大鼓を打つ、其大鼓が鳴れば一同出掛けて掃除なり何なりすることを普請すると云ふので、其れが遂に世間の詞に成て今では土木を起すことをばかり普請と云ふことに成たが、元來は今申したやうなわけである、ソコで今も雪峰和尚が吾々に向て汝等愚味て一人て眞理が見えぬなら大勢惣掛りて探して見ると言はるゝので有るが、諸君コレはドウしたもので有らうぞ、先づ圓悟老人の了簡も聞いて見やう、圓悟は雪峰示衆云の下に「盲衆盲を引くと着語した、元來一法の人に示すべきは無いものを雪峰あながちに衆に示すなどと出掛けたから、メクラドチ／＼引くものも引かれる者も溝の中へても落ち込まねば好いがと云ふやうなアンバイ然し其れも萬々己むを得ざる事もあれば分、外と云ふわけでも無いと、前の着語で奪て後の着語で與へた如、粟米粒大の下に是れ什麼の手段ぞ、盡大地は盡大地よ其れを殊さらに粟米粒の大さなどと妙な手品を使ふたものじゃ、何の爲めに其様なおかしきことをするぞ、山僧從來鬼眼睛を弄せず、この圓悟などは生れつき其様な子供威かしに鬼のやうな顔をする事などとは嫌ひで御座ると云ふのじゃ、抛向面前の下に只恐らくは抛不下ならん、雪峰は面前に抛向すると言はれたが實際果して能く抛向せらるゝやらドウだやらと言て吾々學人の顔を見廻されたかと思ふ、トカクに何事でも執着して抛下し得ぬ癖のある凡夫の耳の甚だ痛い着語ではある、しかし果して能く抛向し得たとしたところで其れが何の役に立つぞと云ふアンバイで更に什麼の伎倆が有るツマラン藝よと評された、漆桶不會の下に勢ひに倚て人を欺む、雪峰和尚は色々なことをして人を馬鹿にする、盡大地を粟米粒大であるなどと言ふさへ餘計なことであるに、其れを面前に抛向すると云ふやうな手品を使ふたり、また漆桶不會などと云ふて人を欺むくと云ふものは勢ひに任せると云ふものじゃ、何の漆桶不會なことが有らうぞ春になれば毎年百花爛熳と咲いて居る、十五夜の晩には毎月月が丸くなる、其れが見えない者があるものか、自領出去、お前が自分で見えないと云ふなら御自分の御勝手にお持ち歸りなされ、如何に大衆が幼稚であるからとて餘りに設じて侮どらないが宜しいと云ふた、普請看の下に瞎とある瞎は盲目じゃ、普請して看よと云ふたからとて、其んなものを見る目は持たぬ鼓を打てと言はるゝけれども鼓を打つ、といふことは三軍の爲めなり、ソレは戦争の時にこそ打つもの

るのを寺中の大掃除などをするとときに普請鼓と云て大鼓を打つ、其大鼓が鳴れば一同出掛けて掃除なり何なりすることを普請すると云ふので、其れが遂に世間の詞に成て今では土木を起すことをばかり普請と云ふことに成たが、元來は今申したやうなわけである、ソコで今も雪峰和尚が吾々に向て汝等愚味て一人て眞理が見えぬなら大勢惣掛りて探して見ると言はるゝので有るが、諸君コレはドウしたもので有らうぞ、先づ圓悟老人の了簡も聞いて見やう、圓悟は雪峰示衆云の下に「盲衆盲を引くと着語した、元來一法の人に示すべきは無いものを雪峰あながちに衆に示すなどと出掛けたから、メクラドチ／＼引くものも引かれる者も溝の中へても落ち込まねば好いがと云ふやうなアンバイ然し其れも萬々己むを得ざる事もあれば分、外と云ふわけでも無いと、前の着語で奪て後の着語で與へた如、粟米粒大の下に是れ什麼の手段ぞ、盡大地は盡大地よ其れを殊さらに粟米粒の大さなどと妙な手品を使ふたものじゃ、何の爲めに其様なおかしきことをするぞ、山僧從來鬼眼睛を弄せず、この圓悟などは生れつき其様な子供威かしに鬼のやうな顔をする事などとは嫌ひで御座ると云ふのじゃ、抛向面前の下に只恐らくは抛不下ならん、雪峰は面前に抛向すると言はれたが實際果して能く抛向せらるゝやらドウだやらと言て吾々學人の顔を見廻されたかと思ふ、トカクに何事でも執着して抛下し得ぬ癖のある凡夫の耳の甚だ痛い着語ではある、しかし果して能く抛向し得たとしたところで其れが何の役に立つぞと云ふアンバイで更に什麼の伎倆が有るツマラン藝よと評された、漆桶不會の下に勢ひに倚て人を欺む、雪峰和尚は色々なことをして人を馬鹿にする、盡大地を粟米粒大であるなどと言ふさへ餘計なことであるに、其れを面前に抛向すると云ふやうな手品を使ふたり、また漆桶不會などと云ふて人を欺むくと云ふものは勢ひに任せると云ふものじゃ、何の漆桶不會なことが有らうぞ春になれば毎年百花爛熳と咲いて居る、十五夜の晩には毎月月が丸くなる、其れが見えない者があるものか、自領出去、お前が自分で見えないと云ふなら御自分の御勝手にお持ち歸りなされ、如何に大衆が幼稚であるからとて餘りに設じて侮どらないが宜しいと云ふた、普請看の下に瞎とある瞎は盲目じゃ、普請して看よと云ふたからとて、其んなものを見る目は持たぬ鼓を打てと言はるゝけれども鼓を打つ、といふことは三軍の爲めなり、ソレは戦争の時にこそ打つもの

よ、祖師門下は元來泰平じや、鼓などを打つ用は無いぞと云ふアンバイ、圓悟の見やうは先づ斯うぢや、雪竇禪師はドウ見たぞ、

頌 牛頭没

閃電相似

馬頭回

如擊石火

曹溪鏡裏絕

塵埃

打破鏡來與汝相見須是打破始得

打鼓看來君不見

割破汝眼晴○夢難見○好

百花春到爲誰開

法不相離○葛藤場狼藉○葛藤

冠經川
頭來

牛頭没馬頭回は六言一句じや、又は三言二句と見ても宜しい牛頭と云ひ馬頭と云ひ没すると云ひ回ると云ふ、皆兩端に迷ふ有様を言ふたものと見える、盡大地とか粟米粒とか生死とか涅槃とか還相とか往相とかトカク兩端に涉りたがるのが世の中の有様であるが、其れを面前に抛向するやうす、間に髪を容れぬ、ソコで圓悟は閃電に相似たり、擊石火の如しと着語した、分別に涉る暇は無いぞと云ふ、雪竇が没するとか回るとか云ふ其口うらに附いて廻ると蹉過了ぞ、ドコに没するものがあるドコに回るものがある、見んと擬すれば蹉過了じや、曹溪鏡裡に塵埃を絶す、曹溪の鏡と云ふは彼の本來無一物何の處にか塵埃を牽かんと云ふた鏡じや、この鏡には

元來塵埃を絶して居るに依て牛頭も馬頭も月も花も歷々分明に能く見える、と云へは又その鏡と云ひ絶塵と云ふところに取り附くものが有らうかと圓悟が心配して鏡を打破し來れ、汝と相見せんと注意した、更に御丁寧にも須からく是れ打破して始めて得べしと云ふてあるが、この着語は無くもがなと思はれる、或は後人が鏡を打破し來れの講釋を聴きながら書き入れてもしたのが混入したのかも知れん、鼓を打て看せしめ來るに君見え、曹溪鏡裡には歷々分明であるけれども、其れを見とめ得ぬものが多いに依て雪峯は鼓を打て普請して看よとまで、老婆心切を盡されたけたども、矢張り見えぬものには見えぬ、如何にも殘念なことでは無いかと云ふやうに雪竇が言はれたのである、其れゆゑ圓悟が其れを吾々に紹介して汝が眼睛を刺破す、それ貴様だちの目の先きにと注意してくれられた、上に輕易に、すゝか、と莫くんば好しと云ひ、又漆桶什麼の見難き所か有らんと云ひ、重ね／＼の注意ぞ、尤も漆桶什麼の見難き所か有らんと云ふ着語は、雪竇が君見えすと云ふたのに向て何の見えんことが有らんと云ふたと見ても宜しい、百花春到りて誰が爲めに開く、雪竇の慈悲の深さ、見よと云ふても見えぬなら、それ見せて遣らうかと云ふ

ので、到頭樂屋を打ち明けて、百花春到りて誰が爲めに開くと云ふてしまつた、ドウ
 じや春の百花は牛頭と開くか馬頭と散るか、迷か悟か佛か衆生か、法相饒さずと圓
 悟が着語した、相饒さずと云ふは餘計なものは無いと云ふことじや、山は高く水は
 長し一切諸法餘計なものも無ければ足らぬところも無いぞ、一場の狼籍これは雪
 竇があまりに説き過ぎるのを咎めたので、何と云ふ取り亂しやうぞと云ふたやう
 なアンパイ、葛藤窟裡より出頭し来る、コレは雪竇の頌の文彩を賞美したので有ら
 うと申すことじや、實に雪竇は翰林の戈ありと世間の學者にも評判された人であ
 ると云ふことであるが、文字を扱ふことが誠に自由であるから、向上の宗乘を何
 の苦も無く面白く言ひ顯はされる、しかし獨りて讀て居れば誠に面白けれども、
 之を講釋させられては其文字の面白いところほど其講釋が面白く無くなる、ソコ
 のところを能く呑込んで居て聞いてもらはなくては、甚だ不本意のことに成る、
 且また圓悟の着語の中には餘程おかしなものが混入して居るかと思はれるのが
 有る、其積りて聞てもらはんければ成らん、

第六則 雲門十五日

本則 舉雲門垂語云十五日已前不問汝汝十五日已後道汝

將一句來來自代云日々是好日日

不海神知價

此一則是圓悟の垂示が無くて直に雲門の本則です、雲門大師は諱を文偃と申して
 雪峰禪師の法を嗣がれたが、門下に洞山の守初だの徳山の縁密だの香林の澄遠だ
 のと云ふ歴々の人が多く有て、遂に一家の規模を立てたに依て禪宗五家と稱する
 中の雲門宗の高祖と仰がる人であります、此人は最初に睦州道蹤禪師に參禪し
 ました、睦州は甚だ險峻な師家で、誰でも參禪の人さへ來れば直に捉まへてサ
 ン言て見るとイキナリに突掛るソコ、デ狼狽すれば直に室外へ推し出して、秦時の
 轆轤轆轤と言て罵しる、秦時の轆轤轆轤といふのは、秦の始皇が阿房宮を建てた時の道具
 のこと、今この用に立たない奴ぞと云ふこと、どう云門も參禪に往くたびごとに
 例の如く推出されたが、三度目に往た時に門の戸をコック、叩くと睦州が内から

誰だと云ふから文假でありますと云ふ陸州が少し門の戸を明ける雲門が飛び込む陸州はイキナリ雲門を捉まへてサー言て見ろ雲門はモッ／＼するうちに例の通り推し出して門の戸をビシャリと閉めたが雲門の片足がまた室内に在たのだから堪らない雲門は痛い／＼と叫びながら忽ちに悟が開けたと云ふこととす箇様な手殿しい師家の爐鑪で鍛へられたので有りますから後に自分が人を接する時にも他の師家とは大に様子の變つた所があつて即ち一宗の高祖とも仰かれることに成たので有ります此垂語は亦た其平生の様とも遠ふて誠に愛敬のある言ひやうて雪竇も餘程おもしろく思ふたものと見えて骨を折て頤を作つて置かれた十五日巳前は汝に問はす十五日巳後一句を道ひ將ち來れ、大慧禪師の説では此れは四月八日の釋尊降誕會に雲門が上堂して此垂示をせられたので有ると云ふことじやソコで十五日と云ふ中に八日と云ふことも含んで居るとかイヤ釋迦誕生以前以後と云ふ意味で有らうとか色々ツキ廻つたことを云ふ向もあると云ふことであるが十五日が二十日でも三十日でも何日でも好い、固より日て無くても好い昨年巳前は汝に問はす今年巳後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い過去

以前は汝に問はす現在以後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い、大悟以前は汝に問はす却迷以後一句を道ひ將ち來れとも見るが好い有頂天以上は汝に問はす無間地獄以下一句を道ひ將ち來れとも見るが好い横からも見る、豎からも見る、ソコで何とか言て御覽と云ふのであるがサスが雲門門下の衲僧たちも忽卒に口を開くことが出来ぬから誰も何とも言ふ者が無かつたと見える已むを得ず雲門大師自から代て曰くとある、此代語と云ふことは此後にはドの宗匠にも幾らもあるが是れが其濫觸であると聞て居る、垂示と云ふことも別語と云ふことも雲門以來であることと云ふことじや、其んなことはドウでも好いが雲門の代語は何と言ふた何ぞ格別に驚ろくやうなことも有らうが、何も驚ろくやうなことの有らう筈は無い、日々是れ好日、この語を國悟が評して此語古今を通貫す従前至後一時に坐斷すと言ふてある、然しながら此れも復た語に隨て解を生したので、終に道理を作せは坑に隨ち墮に落つるナゼかと云ふに雲門の語は一句の中に衆流截斷の句と、函蓋乾坤の句と隨波逐浪の句とが備はつて居るぞと國悟が言はれてある、結局理致が分つただけでは何の詮も無い、日々是れ好日と云ふたからとて天地未開以前に何の

日が有たぞ切火洞然として大千俱に壞し去た時に何の日がある雲門の口先にの
 せられぬやうにせねば成るまいがソコは人々の工夫のしどころよ、圓悟の着語に
 十五日已前不問汝の下に半は河南にして半は河北とある河と云ふは黄河のこと
 て其南北と云ふはアチラコチラと云ふほどのこと雲門の語に以前とか以後とか
 云ふのが兩端に跨がつた言ひやうで言中に響があるぞ、這裏舊曆日を收めず這裏
 と云ふは圓悟の手元舊曆日と云ふは古い曆本去年の曆は今年の役に立たんから
 其んな者は貯はへて置かぬに依て十五日以前だの十五日以後だのと云ふ曆の御
 相談は御免かふむると云ふたやうなアンバイ道將一句來の下に免がれず朝より
 暮に至る十五日以後もヤハリ朝から晩までよ、日は朝々東に上り月は夜々西に沈
 むのよ、何の不思議が有らうぞと云ふた、トは云ふもの、十五日以後と云ふ口車に
 のせられて明月は十六日御座るなどと云ふまいぞと是れは圓悟の婆心で吾々
 に注意してくれられた月日は流るゝが如し少しも壅滯は無いぞ以前だの以後だ
 のとドコで隔てを附けるぞと云ふたのと見える日々、是好日の下に收とある只こ
 の一句に無始劫來未來永劫を皆收藏して遺す所は無い、鰥跳れとも斗を出てす誰

が何と云ふても此一句の外に出ることは出来ぬぞ、トは云ふもの、敢て珍らしい
 ことでも無い雲門にばかり言はせて置くわけでは無からうと云ふので誰が家に
 か明月清風なからんと著語した然し明月清風はドコにもあるイツでもあるけれ
 ども其れが見えんでは致し方が無い、盲者の見ざるは日月の谷に非ずやと云ふの
 て還て知るやと門下に注意した然るに世間一般の有様では海神の貴きを知て價
 を知らざる如くぞと誠められた、此れは海中に珊瑚珠のやうな貴い寶物を持て居
 ても、只貴いと云て海底へ藏して置ただけでは頓と其價が知れぬと同様で、只この
 公案の言句に付き廻つて雲門の垂示は別段であるとか日々是好日鐵撒子て齒が
 たぬとかばかり云ふて居た日には何にも成らぬぞと云て、實參實究を勸誠せら
 れた、サテ次に雪竇の頌は

頌去卻 一七穿八穴 向何 拈得七拈不出 上下四維無等匹何似生 出飛上是天

禽跡 見解亦無此消息 依然只在 野狐精野狐精 艸茸茸消息 烟霏々未出 空生空生

岳畔花狼藉

在什麼處○不聊

彈指堪悲

舜若多

四方八面盡法界○向舜若多鼻

莫動着

動者時如何

動着三十棒

自領山去

雪竇の宗眼明徹なることは言ふにも及はず、其文才の縦横なることも百則の頌古
いつれにオロカは無いけれども、中にも此頌などは聲朗らかに吟じて見たまへ何
とも言へぬ妙味がある一を去却し七を拈得す上下四維等匹なし徐ろろに行て踏斷
す流水の聲縦まゝに觀て寫し出す飛禽の跡艸茸々烟霧々空生巖畔花狼藉彈指し
て悲むに堪えたり舜若多動著すること莫れ動著すれば三十棒棒ドウも不立文字の
上に建立した文字は實に格別な味ひがある、第一句は三言じや一を去却し七を拈
得すこの句を十五日以前と十五日以後に配當してはツマらんぞと圓悟が云ふ
て置た實に其通りてはあるけれども一棒に雲門が以前以後と兩端に掛けて言
ふたものだから、雪竇も亦た兩端に掛つたやうなことを言ふて而らして其兩端を
拂ひ徐けた、擲を以て擲を抜くと云ふ手段ぞ、一を去たと言へば直に七が出る一と
も七とも言はれまい、日が西山に傾いたと思へば月が東山に上る、斯の間に以前以

後の論量は入らぬ雲門の日々是れ好日に十五日以前もなければ十五日以後も無
い只是れ日々是れ好日じや然りと雖も十五日は十五日よ十六日は十六日よ其れ
がソツクリ日々是れ好日じや畢竟差引勘定するには及ばないソレだから上下四
維に等匹は無い、寒山の詩にも吾心秋月に似たり碧潭澄て皎潔物の比倫に堪たる
なし吾をして如何が説かしめんと云ふのがあるが、實に日々是れ好日の風光吾を
して如何が之を説かしめん、天地の間に等匹の物が無いに依て何とも譬へやうも
無いと云ふのじや、コレで本則の頌は濟だのでアトは例の雪竇の文才を弄する所
で日々是れ好日の風光を提唱讚歎する徐ろろに行て踏斷す流水の聲縦ままに觀て
寫し出す飛禽の跡この二句一對は蹤跡の無い處に蹤跡を示す景狀を吟詠せられ
た其句の意は如何ほど脚の達者な人でも水の流れる聲を踏み斷つと云ふことは
出来まい然るに今雲門の日々是れ好日と言ふたのは格別に脚に力を入れるては
無い徐々として行動する時浩々たる流水の聲も亦た應に踏斷すべしと圓悟は註
釋を下されたサテ如何ほど書を上手にかく人でも禽の飛ぶ跡を寫し出すことは
出来まい然るに今雲門の日々是れ好日と云ふたのは其の禽の飛ぶ跡を自由に觀

ぬいて分明に寫し出したやうなもの、圓悟は目を縦まゝにして一觀するとき、饒ひ
 是れ飛禽の跡を亦た寫し出だすが如く相ひ似たりと云ふてある、箇様にばかり申
 したなら亦た日々是れ好日の句にのみ取附いて行く人もあるかも知れず、亦た雲
 門の事とばかり他に譲る人もあるかも知れぬが、コレは雲門にばかり任せて置く
 べきことでは無い、日々是れ好日と云ふ言句に拘はつたことでも無い、人々各自に
 煩惱生死とか菩提涅槃とか悟りとか迷ひとか云ふて居る道中筋の、山も川も足に
 任せて自由に奔走し、目に任せて自在に見渡すことが出来んては何の詮も無いこ
 とよ、其れ故に圓悟は人多く末を逐ふて其本を得ず、先づ本正しきことを得れば自
 然に風行けば草偃し水到れば渠成る、這裡に到て鏝湯熾炭の地獄の火もフツと吹
 けてしまふと云ふことにも成るのじやと云ふてある、然し箇様にばかり云ふたな
 ら、理路ばかりタドリ歩く者もあらうかとて、更に雪竇の大慈悲心、チラリと目光を
 かへて艸茸々々、烟霏々々と前の風景を一言に引くり返してしまふた茸々々は字典に草
 の多く生いた貌ちとある霏々々は物を掩ひ蔽すかたじや草は茫々と生ひ茂りて大

蛇でも出そうな有様、烟は幕を張たやうに立ち籠めて一寸先は少しも見えぬコリ
 ヤ一體誰のことと有らうぞ何のことと有らうぞトカク世の中には早く極樂へ往
 て如來さまの御弟子に成りたいと云ふ人は有ても寧ろ地獄へ往て赤鬼青鬼の師
 匠にならうと願ふ人は無いやうなもので、流水の聲を隔斷したり飛禽の跡を寫し
 出したりする明白底の風景を愛す人は多く有ても草茸々々、烟霏々々の間に一段の光
 景を弄する人は少ないと云ふことじや、この様子を敎家流義に講釋すれば前の
 流水飛禽の一對は真空中に妙有あることを示し、草茸々々、烟霏々々は妙有中に真空あ
 ることを示されたのじや、ソコで或は復た空見に落ちては成らぬと云ふ注意から
 次の句の空生巖畔花狼籍が出て來た空生と云ふは釋尊十大弟子の中で解空第一
 と言はれ空理を解することに妙を得たと云ふ須菩提尊者のことじや、此尊者が或
 る時に或る處の巖中に坐禪をして頻りに空理三昧に入て居られる所へ帝釋天が
 出掛けて來て華を雨ふらせて讚歎した、ソコで須菩提が之を見答めて華などを降
 らせるのは誰じやと云ふた帝釋は之に答へて我れ尊者の般若を説くを重んずる
 に依て花を散らして供養讚歎すると云ふ、須菩提は只坐禪して居ただけのこととて

般若も何も説いた覚えが無いから、我れ未だ嘗つて一字も般若を説かぬ、何故に汝は其れを讚歎するや、ソコで帝釋の言ひやうが面白い尊者無説、我乃ち無聞、無説無聞是れ眞の般若と云て亦た大に花を雨ふらせたと云ふ故事がある、其れを今雪寶が引いて來たので須菩提は解空第一には違ひないけれども謂ゆる偏空で妙有を知らんから、空は空でも眞空とは言はれぬ、其れだから帝釋などに窺はれて華の雨の御馳走などに預かるが此れが眞實に眞空妙有片落のない大菩薩で有たなら、帝釋などが冷かしには來れぬはずじや、彈指して悲むに堪えたり、舜若多、この舜若多と云ふのは天竺の古俗に謂ふ虚空の神と云ふこととて虚空を以て身體として居るから、虚空の外に身の無い神であると云ふことじやソコで雪寶が前の須菩提と云ひ帝釋と云ひ又この舜若多と云ひ、只に空と云ふ方へばかり片落して居るに依て彈指して悲むに堪えたりと言はれた、彈指と云ふは指をピチリとハヂクこととて、人などを驚かしたり氣を附けたりする時にも彈指するが、今は不淨彈指と云ふて穢ららしい物を見たり聞たりした時に其れを拂ひのけるために彈指するので、サテもサテも偏空に片落して居る悲しさよと云ふところから彈指せられたのじや、然

るに彼の舜若多も佛の光明に照らされると、直に其身體が顯はれると云ふこととてあるが吾々も偏空の二乗根性では到底致し方が無いが、佛光明にさへ照されれば直に本身が顯はれる然るにトカク十五日以前と云へは以前に取り付き十五日以後と云へば以後に取り付き有と聞けば有に落ち空と聞けば空に落ちるから雪寶老人が頻りに氣をもんで色々のことを言ふたがドウ落著を附けたもので有らうぞ、コゝてウロツクと地獄の釜の底へまつさかさまぞ動著すること莫れ動著すれば三十棒と慈悲片々たる勸誡ぞ、動著と云ふは心のピクシヤクすることであるが、動著するなといふたからとて死灰枯木のやうに成れと云ふのでは無い、尤も一度は無心無念離相對の所に入ることにも有らうが、更に百尺竿頭に一歩を進むるとき絶後に蘇生し來つて大活用を得る、其際に動の不動のと云ふ論量は入らぬ、サテ雪寶の頌を圓悟が何と評した、其著語を調べて見やう去卻、一の下に七穿八穴とある一を取りのけたと云ふから穴が七つも八つも開いたぞと云ふて雪寶の手段を讚歎した何の處に向て去る一を去たと云ふがドウへ其一を持って往たか行先へ氣を附けると云ふアンバイ、此れは門下への注意と見えるが、一體に一にもせよ七に

もせよ取りのけべき物が有らうが有るまいが六祖は何の處にか塵埃を惹かんと云ひ南嶽は縦ひ將ち來るも著る處なしと云ふたぞ一著を放過すとある此れは碁を打つときに相手に油断させるためにチョイと一手をユルめるのだそら雪竇の口先にウカリと油断は成らぬぞと云ふたやうに見ゆる拈得七の下に拈不出とある七を拈得すと言はしやるけれども七どころで無い一つも拈し出だすことは出來まいぞと云ふのじや拈し出し得ぬのでは無い元來拈得すべきものが無いのよ又却て放過せすとある前には一を去却すなどと云ふて一著を放過するかと思ふたに直に七を拈得すなどと反對なことを言て中々放過せぬ様子じやイヤハヤ自由自在に勝手なことを言ふから頓と窺ひが附かぬぞと云ふやうな調子上下四維無等匹の下に何似生とある等匹が無いと云ふなら何に似て居るぞと云ふのじや月に似てるか籠子に似てるか承陽大師は鳥飛て鳥の如く魚行て魚に似たりと云はれたこともあるぞ上は是れ天下は是れ地東西南北と四維と此れて謂ゆる十方であるが皆各々個々獨立て何の等匹も無い天は天に似て地は地に似て居るまでのことよ然しながら正偏回互して如何と見れば庭の築山が富士の山に似て居

て華嚴の瀑布が牛の小便に似て居るぞ争奈せん柱杖我が手裡に在り柱杖と云ふは長さ七尺ある棒じやマゴくするとドシンと擲ぐるために圓悟の手にチヤンと持て居るソコで此七尺の柱杖と雲門の日々是れ好日とは等匹せぬかドウじやと云ふたやうなアンバイじや徐行陷断の下に脚跟下を問ふこと莫れとある行くと云ひ蹈むと云へばとて直に脚のことばかり思ふては成らぬぞ手でも行き頭でも踏まねば自由がさかぬ喫茶喫飯尿放尿みな是れ流水の聲を陷断するので無ければ茶に呑まれ飯に食はれると云ふものじや然しコノ所が中々チョイとの仕事では無いぞと云ふので體究を爲し難しと言はれた此れ等の着語は皆圓悟が吾々に向て拈提して見せられたので其次の葛藤窟裡に打入し去り了れりと云ふのは雪竇に向ての言ひぐさよモハヤ本則の頌は澤山であるのに色々と文筆を弄して葛藤窟裡に飛び込んで何とするのじやと云ふたやうな調子を縦観寫出の下に眼裏に亦た此消息なしとある縦観とは云ふものゝ眼裏に於て觀るの觀ないのと云ふ沙汰のあるべきでは無いぞ又野狐精の見解と云ふた雪竇が色々な手品を使ふに依て此の老野狐に魔魅されてはイカンぞと學者に注意しつゝ雪竇を抑

揚した、又依然として只舊窠窟裡に在り。コレは全く雪竇を抑へて色々と文才を弄しつゝ、落草の手段を用ゐるのを冷評したものと見える。艸茸々の下に、腦後に箭を抜くとある。コレに支那の五代の時に王殷と云ふ人が杜重威と戦かつて、矢が腦後に中つて、矢鏃が口から突き出したけれども、其矢を直に引き抜いて敵へ射かへしたとか云ふ故事がある。そうナ、必死の所を助かつたと云ふこととて、今雪竇がガラリと局面を一變させて、艸茸々と云ふた有様を形容して讚歎したのじや、更に是れ何の消息ぞと云ふのもイヤ、案外なことを言ひ出したぞと云ふたやうなアンパイ平實の處に、墮在すと云ふは、何も不思議のことは無い。コレが雪竇の平生の持前で、ソコが即ち凡聖に落ちぬところて、烟霏々の下に、未だ這の窠窟を出てすとある。前の艸茸々と此の烟霏々とが同じであらうか、違つて居やうか、圓悟は舊窠窟を出てぬと云ふたぞ、足下雲生ずイヤ、ハヤ雪竇は自由自在にドコでも奔り廻る人ではあると讚歎した。空生巖畔の下に何の處にかある。其空生と云ふものがドコに居ると答めて、花狼籍の供養などに預かると云ふは、イカにも不啣喙の漢よと、空生を抑へ、遂に勘破了也と云て、偏空に落ちて居る空生を彈呵し盡した。コレは他の須菩提

尊者のこと、ばかり思ふては居られぬぞ、彈指堪悲の下に、四方八面、盡法界とある。コレは舜若多すなはち虚空神の有様を言ふたが、彈指の音も悲む聲も亦たヤハリ盡法界であらうぞ、然し悲しんで居るよりは、舜若多の鼻の孔の裡に向て、一句を道へ將ち來れ。此の偏空に沈落した所から活機輪を轉じ出して見よと云ふのじや、活きた一句が言ひ得られて、諦當で有ななら、即ち舜若多が活きて働らくのよ、何の處にか在る。其の舜若多とか云ふものが、一轉ドコに居るのじやと、門人に一擲した。莫動着の下に、前言何くにか在る。コレは全たく雪竇を答めたので、お前は人に向て動着するなと言はれるが、先刻からお前こそ動着しぬいて居るては無いか、一體に動着すればナゼ悪いのじや、動着する時如何サ、動着したてドウするぞと、突き込んで、雪竇が三十棒と云ふ其言下に、自領出去、三十棒ならお前こそ自分で受けるが、好いぞと言ひながら、ビシヤリと便ち打たコ、ラの着語には一分も隙がない。圓悟の腕力はコンな所て、チラリとく見てゆかねば成らぬ。

第七則 法眼答慧超

垂示聲前一句。千聖不傳。未曾親近。如隔大千。設使向聲前辨得。截斷天下人舌頭。亦未是性燥漢。所以道。天不能蓋地。不能載。虛空不能容。日月不能照。無佛處。獨稱尊。始較些子。其或未然。於一毫頭上透得。放大光明。七縱八橫。於法自在。自由信手拈來。無有不是。且道得箇什麼。如此奇特。

復云大衆會麼。從前汗馬無人識。只要重論蓋代功。即今事且致。雪竇公案。又作麼生。看取下文。

此垂示は中々長いが眼目とする所は無佛の處、獨り尊と稱すと云へる六字に在るかと思はれる、先づ冒頭に聲前の一句と提起した、凡そ言句と云ふものは先づ音聲にあらはれて次に文字に寫し出されるもので有るが、今は其音聲と云ふもの、未だ無い前の一句と云ふのじや、コレは如何なる言句で有らうぞ三世の諸佛のまだ出世せられない前に八萬四千の法門があるぞ、其れを禪宗の套言に那一句と云ふ、

其那一句は本より誰れも説いたことも無ければ教へたことも無いから千聖不傳じや、聖と云ふは佛祖のことで、即ち千聖を云ふは三世の諸佛も歴代の列祖とも云ふことになる、聲前の一句は諸佛も列祖も傳授することは出来ぬと云ふのじや、ナゼかと云ふに那一句は人々各自冷煖自知するより外に致し方は無いからのことよ、未だ親觀せざれば大千を隔つか如し、親觀の觀の字は諸侯が天子に朝拜するのだ、そうなが、今は只相見と云ふことに見れば宜しい、何者に親しく相見するや自家の獨尊佛に親しく相見せんければ大千を隔つるが如くに遠くして遠い、大千と云ふは三千大千世界と云ふことを略したので、佛教では十方三世の一切諸佛と云ふて佛と云ふものが限りも無く多くあるが、其佛が一佛毎に一國土を化土と定めて、其一國土と云ふのが即ち三千大千世界であるが、先づ此に一つの須彌山と云ふ山が有て其山の四方に地球のやうなものが四つあるのを一須彌界と云ふ、當節の言葉で云ふたら一つの太陽系と申しても宜い、サテ其太陽系を一千あつめたのを小千世界と云ひ、其小千世界を更に一千あつめたのを中千世界と云ひ、又中千世界を一千あつめたのが大千世界じや、即ち小千と中千と大千と三つあつめるから三千

世界とも又は三千大千世界と重ねても云ふ十呂盤の達者な人は勘定して御覽なさい、何でも一萬億ほどの太陽系を一つにしたのが大千であらう、其れが即ち一佛の化土であると云ふことじやが、阿彌陀如來の極樂世界までは其一佛土を一つや二つでは無い、十萬億の佛土を隔つとあるから、何ともハヤ心も言葉も及ばない遠い話よ、其れを今は大まけにまけて大千を隔つが如しと言はれた、然し親しく自家の獨尊佛に相見さへすれば、觀無量壽經に極樂は此を去ること遠からずとある如く、脚の下も頭の上も皆佛土よ、然らば其那一句を聲前に向て辯得して、天下人の舌頭を截斷すると、三世諸佛の未だ口を開かざる以前に那一句を辯明し得ることが出來たのみならず、世の中の都べての人にも口を開かせぬと云ふ力が有たなら、其れで好いかと云ふに、圓悟老人は決して許さない亦た未だ是れ性燥の漢ならずとある性燥と云ふは性質の鋭敏なことを云ふので、伶俐と云ふも同じことであるから、中々まだ伶俐の漢とは許さぬぞと云ふのじや、ナゼカと云ふに聲前と云へば聲前に付き廻つて辯得だの不辯得だのと去ふのがハヤ第二第三じや、サテ吾人本分の事と云ふものは箇様なわけであるに依て、故に道ふ天も蓋ふこと能はず地も載

ること能はず虚空も容るること能はず日月も照らすこと能はずとある、法性法身の如來さまは天地日月よりも廣大なくらゐては無い、十方虚空もまた法身佛の鼻の穴の片隅よ、サ、此に至て其法身佛もまた無い處が即ち無佛の處じや、無佛の處は本より無衆生の處よ、ソコで獨り尊と稱すとある何を相手に尊だの卑だのと云ふことと有らうぞ、其れは各自の參究に任せるとして圓悟は是れてこそ始めて些子に較れりと云ふた、少しは許せるぞと云ふのよ、先づコゝまでは元來佛だの法だのと問ふべきものではないぞと云ふことを示して、本則の慧超の問話を豫かじめ論評せられたものと見える、然しながら已に言句にあらはして如何なるか、是れ佛と問ひかけた上にはと云ふ所から、更に一線路を開いて其れ或は然らざればと緩みを付け、サテ一毫頭上に透得して大光明を放たねば成らぬぞと云ふた、前の一段では實に一毫を立つる餘地もないが、コゝに少しく血路を開いた所で一毫頭と云ふたのは、暗に本則の法眼の答話を示したものと見える、汝は是れ慧超と云ふ一言の下に忽ち大光明を放つ、大光明と云ふは大智慧と云ふことよ、七縦八横一切諸法の上に於て自在自由ならば手に信せ拈じ來りて不是あること無し、如何なる事に

出合ふてドンなことを仕やうとも、如何なる時に臨みてドンなことを言はうとも御勝手次第じやと云ふのよ、且らく道へ箇の什麼を得てか此の如く奇特なる、一鉢コレはドウ云ふわけかと門下の者に向て復た云く、大衆會すやドウじや一同に合點が往たかと抄着した復、云と云ふ二字は記者の辭で此時に圓悟が前の垂示を言ひ畢つて一段落を附け、更に端を改めて又言ひ出された有様を書きあらはした、ソコで圓悟が従前の汗馬人の識る無し、只要す重ねて蓋代の功を論ずること、と言ふたコレは武將の軍功に譬へて佛祖の修證に骨を折られたことを示されたのじや、汗馬は馬に汗をかゝせたこと、三世の諸佛も歴代の祖師も皆命がけて煩惱魔軍と戦ふたことは實地を踏んだことの無いものの識らぬこと、有るが、能く従前の軍功を調査して見るが、好い實に蓋代と一世を蓋ふほどの功のあること、と云ふて、暗に慧超が一言下に大悟したのを豫言したものと見える、然し表向は従上佛祖の事を云ふたものとして、即今の事は且らく致く雪竇の公案、また作廢生、ソレはサテオキコ、にマタと云ふたやうなグアヒ、致の字は、置の字と音通てオクと讀ませる下文を看取せよと云て本則を呼び出した。

本則 舉僧問法眼道什、慧超 慧超咨和尚如何是佛道什、慧超 法眼云

汝是慧超依後脫出、就身打劫

法眼の文益禪師は五百人の善知識と稱された人で、常に五百人以上の衆僧が從學して居たと云ふことじや、其中の一人て慧超と云ふ人が或る時の問答に慧超和尚に咨す如何なるか、是れ佛と問ふたサ、此の佛と云ふのは一鉢何佛であらうぞ、木佛か金佛か、乃至法身か報身か、然し如何なるか、是れ猫とも問はす、又如何なるか、是れ杓子とも問はす、イカメシクも如何なるか、是れ佛と問ふた、コレには慧超も従前幾多の光陰を費やし、參究工夫に力を入れたこと、有たらうが、圓悟は、問法眼の下に直に着語して、什麼と道ふぞと、咎めた元來他人に向て問ふべき事の無いはずでは無いかと云ふのじや、然るに何やら問はうとするのは擔枷過狀と云ふものよ、枷は手カセだの足カセだのと云て、罪人を束縛する器械じや、其れを自分から擔つて過狀は罪狀と云ふも同じこと、罪過を白狀することよ、我國の俗諺に、言ふに落ちず語るに落ちると云ふことがあるが、其れと同じこと、て人に物を問ふと云ふのが

ハヤ無佛の處に獨り尊と稱することの出来る者で無いと云ふことが自づと知れるぞと云ふのよ、如何是佛の下にも又什麼と道ふぞと着語した、問ふことに事を欠いて佛を問ふと云ふは何としたことじや、然るに自分では一生懸命の問であるから眼睛突出と目の玉が飛び出したやうなグヤイ、鴨が螺螄を丸呑にしたやうな有様ぞと愚弄した、然しながら誰にもせよ此の如何なるか是れ佛と云ふ問題が明らかにかに答辯し得られて妥當で有たら謂ゆる七縦八横自由自在手に信せ拈じ來りて不是あること無しと言はれたのじやが、理論や義解では何とでも言はうけれども實地に釋然たることは容易で無いと云ふことじや、然るに法眼禪師は聲に應じて平氣に答へた、何と答へたぞ、汝は是れ慧超、これが即ち千聖不傳の那一句ぞ、法眼禪師には此のやうな答が多いと云ふことじや、或時の上堂に或僧が如何なるか是れ曹源の一滴水と問ふた法眼が之に答へて是れ曹源の一滴水、この答も今の答へも同じやうな答へかたじや、然るに今の答を義解して佛と云ふ者は外に無い汝が即ち佛よといふ意味で、汝は是れ慧超と答へられたので有ると云ふ者もあるが、法眼には其の様な思慮分別を入れた言句は無いのよ、只是れ汝は慧超と云ふたので有

る、圓悟は摸に依て脱出すと着語した、例の碎啄同時に間に髪を容れぬ答へぶり、法眼和尚の紋切形よと云ふたアンバイじや、其れが直に鐵餞餞ぞ、鐵餞餞と云ふは鐵てこしらいた餞頭と云ふほどのことて沒滋味なと云ふこと、又齒のたゝぬ様子を言ひ顯はした就身打切と云ふ着語に二説ある、一説は碁の手に打替と云ふことのあるのを云ふのじやと云ひ、又一説には身に就て切やかすと云ふので有るから巾着切とかチボとか云ふ類のことて有らうと云ふので有るが、何れにしても法眼の答に一分も隙の無い所を諷敷した辭と見える、人々各自に汝は是れ某と參究して佛と汝と是れ同か是れ別かと工夫し又或は如何なるか是れ某と問ひて、汝は是れ佛とも答へて見るが好い、サテ又雪竇は何と言ふたぞ頌に曰く、

頌 江國春風吹不起

盛大地那裏得道消息○文彩已彰

鷓鴣啼在淡花裡

吹別關中○豈有愁

三級浪高魚化龍

通過一路○冥機大

癡人猶辱夜塘水

扶羅漢壁○接門傍

處○守株待兔

此の頌は七言四句即ち絶句の體じや、例の如く前の二句で本則の頌は済んで三四

の二句は此本則を邪解する者の小言よ、一二の二句を二つに分けて慧超の問と法眼の答とに掛けて見たりする説もあるけれども、圓悟は二句を一句にして見よと云ふて置かれた、謂ゆる宛轉回互して言外に眞意を悟らねば成らぬと云ふことじや、然し一往は文字の意味だけは分らねば成らんが江國と云ふは揚子江の南の方いはゆる江南と申す所て春さきに尤も景色の好い處と見える、向島の春風でも東山の春風でも好いのも、春風は天地の間に充ち満ちて居るが未だ吹き起たぬぞ、春風は吹き起たんでも、鷓鴣は面白く啼いて居る、鷓鴣は啼て居るけれども、深花裏に在て形は見えぬ、形は見えんでも聲はタシカに聞える聲はタシカに聞えるけれども、風は未だ吹き起たぬ、風は吹き起たぬけれども、春色は已に十分じや、此事を般若心經には色即是空々即是色と説いてある、參同契には明暗各相對して比するに前後の歩の如しとも云ふてある、法眼門下碎啄同時の機鋒て、如何なるか是れ佛、汝は是れ慧超、江國の春風吹き起たす鷓鴣啼て深花裏に在り、只この通りの端的よ、繰り返して朗吟して見るが好い、自分で吟じて自分の耳に聞くうちに獨りニコリと笑ふ所が無ければならぬ、其れを江と云ふは水の流れる所て、國と云ふは其水を載せて居る所じや、春と云ふは物の發育する時て、風と云ふは動搖の姿であるなど、云ふやうに、賣卜者が易學小筮を研究するやうなことを幾ら云ふて見たからとて、何の役にも立つことでは無い、圓悟が第一句に盡大地那裡にか這の消息を得たると着語してある、元來春夏秋冬など、云ふ沙汰は無いはずであるに、春風が吹くとか吹かぬとかドコから其様な音信が有たのじやと聞き答めた、又文彩已に彰はると云ふた、雪竇は吹き起たぬと云はれるけれども、春の色どりはトウに十分に彰はれて居るぞと云ふたのと見える、第二句に啼々何ぞ用ぬ、啼々と云ふは鷓鴣の聲を形容したので、鷓鴣の啼く聲を聞いて初めて春を知るにも及ばぬはずじや、圓悟などは鷓鴣の啼々に御用は無いぞとの言ひぐさよ、又風に別調の中に吹かる、コレは全く法眼の汝は是れ慧超と答へた妙處を讚歎してサスガ法眼禪師はまた別段よと云ふたのと見える、又豈恁麼の事あらんや、其様なことは無いはずじやかと云て人の鷓鴣だの深花裡だのと云ふ聲色中に狼狽するのを奪ふた、第三句に三級浪高うして魚龍と化す、コレは龍門の故事て、河南府の龍門縣に龍門山と云ふがある、夏の禹王がソコの瀑布を三段に切り落して水を排除したと云ふ所から禹門とも三

第七則 法眼答慧超

級とも云ふのであるが、俗説に毎年三月の三日に鯉が其瀑布を溯ぼりて龍門を透り抜けることが出来れば角が生えて龍に成る、若し途中で力が盡きて登り得ぬものは點額して回ると云ふことが有る、今其れを引いて來て僧の慧超が法眼の一言下に汝は是れ慧超と聞く、嗚呼同時に豁然として悟りが開けた所を形容して三級浪高うして魚龍と化すと言はれた其れ故に圓悟の着語に大衆を慢すること莫くんば好しとある、元來龍でないものは有るまい、然るに今さら魚が龍に化したなど、人を馬鹿にしたことを言はぬが好いぞと雪竇へ突き掛つて置て、更に龍頭を踏著すと自家の見識を述べられた、其の魚の化したと云ふ龍は雲に乗て虚空はるかに飛び去るか、と云ふに、現に圓悟の脚下に陥み附けてあるぞと云ふのじや、諸君の足元にも龍は居るぞ能く踏み附けて置かないと角で突き殺されるぞよ、誠に危険千萬なことじや、結句に痴人尙ほ屏む、夜塘の水コレは此公案の落處を知らず、知解分別する連中が、法眼の答へを色々、と邪解する小言で、魚はトウに龍に成て飛て往てしまふたとも知らず、ドコに居るであらう、コレに居るかカシヨに居るか、と龍門の瀧壺の下流の水の中を頻りに捜して居るやうなものぞと云ふたのじや、屏

の字はクムと訓むので水を汲み出すこと、夜塘は暗夜の堤塘と云ふほどのことであらう、其れだから圓悟の着悟にも扶維摸壁とある、扶維摸壁と云ふは牆根に取り附いたり壁をサグつたりと云ふこと、暗夜に物を尋ねる有様、門を接し、戸に傍ふと云ふのも同じ意味じや、衲僧何の用處か有らん、苟くも衲僧たらんものは歩々黄金の地を踏まねば成らぬに、夜塘の水を屏んで何にすると云ひ、又株を守りて鬼を待つ、コンな着語は無くても好いやうに思ふ、恐らく圓悟では有るまい、餘りにツマらんことをシッコイやうじや、

第八則 翠巖夏末示徒

示會則途中受用。如龍得水。如虎靠山。不會則世諦流布。羝羊觸藩。守株待兔。有時一句。如踞地獅子。有時一句。如金剛王寶劍。有時一句。坐斷天下人舌頭。有時一句。隨波逐浪。若也途中受用。遇知音別機宜。識休咎。相共證明。若也世諦流布。具一

隻眼。可以坐斷十方。壁立千仞。所以道大用現前。不存規則。有時將一莖艸作丈六金身用。有時將丈六金身作一莖艸用。且道憑箇什麼道理。還委麼麼。試舉看。

この一則は垂示も本則も皆長文句じや、垂示が自づから五節ほどに分れて見える、第一節に參禪する者の得失を論ぜられた、凡そ誰にもせよ參禪する者が會すれば即ち途中受用、會すると云ふのは、イツも申す通り俗に合點すると云ふほどのこと、てこゝでは眞實に悟りが開けたときにはと云ふことになる、眞實悟りが開けさへすれば途中受用じや、途中受用と云ふはドコでも自由に御用に立つと云ふことよ、其自由の様子を龍の水を得るが如く、虎の山に靠るが如しと譬へられた、龍は元來エライものでは有るそうなが、水が無くては小蛇も同様であると云ふことじや、虎も猛獸には違ひないが町中へ生捕れて來ては見世物にされる、吾々人間も其通り本來成佛て人々各自に圓滿具足の如來さまには違ひないけれども、悟りが開けんては底下薄地の素凡夫よ、然るに今は悟りが開けて途中受用と云ふのであるから

龍の水を得るが如く、虎の山に靠るが如くじや、さて又これと反對で會せざるときは世諦流布、悟りが開けんとした日には、口に下のやうな高尚なことを論じても身にどのやうな殊勝なことを行なふても、皆これ世諦流布と申すもの、諦の字のことは第一則で申して置たが、審實の義で俗に謂ふ道理とか主義とか云ふほどのことじや、悟りが開けんては何を言ふても世俗の有様よ、其自由を得られぬ様子を譬へて、羶羊藩に觸れ、株を守りて兔を待つと言はれた、羶羊觸藩と云ふは儒書の易經にある辭で、羊が垣根に角を引つ掛けて進むことも出来ず、退くことも出来ぬと云ふ難澁な有様、株を守ると云ふのは宋の國の百姓が田を耕やしに往て兔が株に突當つて死だのを拾ふた、そこで農業者よりも兔を拾ふのが利益であると思ふて、毎日株の傍へ往て兔を待て居たと云ふ話、いづれにしても馬鹿げた様子を示されたもの、次に有時一句と云ふから、隨波逐浪までが第二節で、これは人の師匠と成て參禪する者を接得する作略と言はるゝ、有時の一句は、踞地獅子の如しとある、地に踞るの獅子と云ふのは、今まゝに飛び掛らんとする勢ひ、氣力が十分に備はつて如何なる者も寄附くことは出来ぬぞ、禪祖の言句には、コウ云ふのが多い、次に有時の一

句は金剛王寶劔の如しコレは鋭どい方から申したのじや、鐵の刃でも寶劔とでも言はれるほどのものなら能く斬れるて有らうに、コレは金剛で作つた寶劔じや八萬四千の煩惱の賊を只一言下に殺し盡す作用が有る、有時の一句は天下人の舌頭を坐斷すコレは人に閉口させて一言も吐かせぬと云ふ方から言はれたので、只一言に世界中の人の舌の根を斷ち切ると云ふ、以上三句は皆把住と申して奪ふ方ばかりであるが宗師家の作略は奪ふばかりが妙でない、ソコで有時の一句は隨波逐浪いはゆる隨機應變て笑ひもすれば泣きもする、千萬無量に碎けては散り散ては寄せる浪のまに、天上の月影は揺られながら碎けながら影のうつらぬと云ふ波は無いやうなものよ、コレで師家の方にも色々と方便があり參禪する弟子の方にも會する者と會し得ぬ者とのあることが分つたに依て、ソコで第三節に前の第一節を承けて若し也た途中受用ならば謂ゆる會する底の者て有たならばコレは互ひに知り合ふて居ることであるから知音に遇ふて機宜を別ち休咎を識りて相共に識明するまでのことよ、何の造作も無いことじや機宜と云ふは心にチラリと働きの兆すのが機て其れを事實に程よく行ふのが宜じや休咎と云ふは休は好な

り美なりてヨイと云ふこと答はトガと讀む字でワルイこと、即ち互ひに會する底の人てさへあれば機宜も休咎も雙方から能く識り別けて居るに依て、相共に證明すと互ひに其れに違ひないと證據人になり合ふまでのことと云ふのじや、然るに之と反對て未だ會せざる底の謂ゆる世諦流布の者に遇ふたときには、更に一段峻峻にして寄り付けぬやうに接してやらねば成らぬ、ナゼかと云ふに世諦流布の者は大抵さまゝの理窟や知解を貯わひて居て妄想が甚だ深いもので有るから一雙眼を具して以て十方を坐斷して壁立千仞なる可し、一雙眼と云ふは一つの眼と云ふこととて左右の二つの眼は誰にもあるが其外に更に右とも左とも片寄らない眼を一つ具へんければ成らんと云ふこと、即ち更に眼の著け處を別にしてと云ふほとのこととぞ、十方を坐斷すると云ふはドチラの方角からも寄り附く路のないこと、壁立千仞と云ふはマツメグに高く突立つて手の掛け處の無いやうす、サテ箇様に厳格な取扱ひに遇へばモハヤ知解も分別も理窟も學問も用に立たんことが始めて知れるに依てソコで眞實に參禪する氣にも成るぞと云ふのじや、サテ箇様になわけて相手の利鈍次第縱横自在に接化するのであるから所以に道大用現前

軌則を存せず。コレは第三則の垂示にも有た通り、佛祖が衆生を濟度する作略の上にもコウせねば成らぬとかソウせねば成らぬとか云ふ軌則はない手に任せ來りてドウでも好い、婆アーさんが赤ん坊の守をするにさへ軌則は無いものぞ、或はソツと抱きしめたり或はユラ／＼と揺つたり靜にしたり歌ツたり起たり居たり歩いたり只其子が機嫌よく笑つたり眠つたりするのが目的じや、都べて大機大用には杓子定規は入らぬものよ、其自由自在のやうすを有る時は一莖草を將て丈六の金身と作して用ゐる時は丈六の金身を將て一莖草と作して用ゆと言はれた、丈六の金身と云ふは佛のことで釋迦如來は身のたけ一丈六尺その色は紫磨金色と申して金色の光を放たれたとある、其丈六の金身の野原に茫々と生ひ茂つて居る草葉一葉と交互融通自由勝手じや、且らく道へ箇の什麼の道理にか憑るサ、是れは一體ドウしたワケぞ、此れには何ぞ子細が有らう遠て委悉すや、よく吞込が附いたかナ、トにカク雪竇老人の拈提せられた公案がある試みに擧す看よ。

本則擧翠岳夏末示衆云。一夏以來爲兄弟說話、看翠岳。

眉毛在麼孔也失了也、保福云作賊人心虛賊然也、長慶云

生也舌頭落也、雲門云關在什麼處去也天下

翠巖と云ふは明州翠巖の令修禪師と申して彼の雪峰和尚の弟子じや、保福と云ふのも長慶と云ふのも雲門と云ふのも皆雪峰の弟子であるから此公案は兄弟四人の見識を一處に見るのを、夏と云ふは天然以來佛家の規則として夏期九十日が間は各自相當な處へ集まつて修行をする其れを結制とも云ひ安居とも云ひ夏安居とも云ひ、又は只略して夏とばかりも云ふ、今は夏末とあるから其夏安居九十日も済てモハヤ解制になる、即ち七月十五日のことと見える、其日に令修禪師が同安居の大家に示して言はるゝには、一夏以來兄弟の爲めに說話す看よ、翠巖が眉毛在りや、コレは佛法を誤まつて説いた者は其罰て眉も鬚も墮落すると云ふ故事が有るので、翠巖が九十日以來諸人の爲めに色々なことを言ふて説法したことて有るが、ドウじや私の眉毛がマメ在るかドウだか諸君見てくれと言ふたのじや、一體に佛法と云ふものは他人の爲めに口を開き舌を動かして説くべきもので有らうか、有るまいかマサカ翠巖が其んなことをしたわけでは有るまい、兄弟の爲めに說話す

と云ふは一體に何のことと有らうぞ、腹がへつては飯を食ひ眠くなつては横に成た、手で物を持つて足で歩いたとでも云ふことと有らうか、外に何ぞ五時入教とか頓漸顯密とかでも云ふやうなことを説法したので有らうか、先づ其穿鑿をして來てからで無ければ眉毛の有る無しは相談に成るまい、サテ又あのれの眼の上に在るはずの眉毛の始末を他人に見てもらはねば在るか無いか分らんもので有らうか其れが又一つの大問題じや、圓悟老人が爲兄弟説話と云ふ下に口を開かは馬くんぞ、恁麼なるを知らん、と着語せられた説話と云ふたからとて口を開て舌を動かしたのならコウ云ふことは言はれまいと云ふたので有らう、コウ云ふたなら佛教の説法と云ふものは口を開き舌を動かさないでドウして説法するぞと云ふ人もあるかは知らんがマサカ木偶の如く啞人の如くにして居ると云ふわけでは無い、釋迦如來が四辯八音で五十年が間しやべりどうしに説法なされても、其儘に一字不説よ、東坡居士などは山色如來の溪聲の説法を八萬四千偈聽聞したと云ふが山色の眉毛が落ちたか落ちないか、圓悟が眉毛在廢の下に只眼睛も也か地に落つることを、麻ち得たりと評した、眉毛どころか眼玉まで落ちて無くなつたぞ、其上に鼻

孔に和して也、た、失ひ了れり、鼻の孔もつぶれて仕まふた、説法の罰は恐ろしいものよ、元來翠巖に最初から眉毛や眼玉が在たので有らうか、無かつたので有らうか、何だか翠巖に馬鹿にされるやうな心持がするぞ、人々各自に眉毛が有るか無いかを點檢して置くのが肝要ぞ、保福曰く賊と作る人は心虛はる盗みをする奴はウソをツクと俗に言ふ通りの詞じや、コレが翠巖に向ての御挨拶よ、圓悟が灼然と云ひ又是れ賊、賊を知ると云ふた、灼然は分明と云ふとて保福の云ふ通りに違ひない、然し盗人仲間て能く内幕を知てるのよと云ふたのじや、圓悟もヤハリ仲間と見えるドウぞ、吾々も互ひも仲間入を願ひたいものじや、然しナゼ保福がコウ云ふたので有らうぞ、元來他の爲めに説法すべきでも無ければ、眉毛の有無の論辯は入らぬはずで有るに、翠巖がおかしなことを言ふから保福が其舌の根を引き抜いたのでも有らうか、長慶曰く生ぜり、コレは又調子が違ふた、翠巖が眉毛が在るか無いか見てくれと云ふ詞の下から生えたぞ、生えたぞ、鬼の角のやうに生えたぞ、火の中の蓮花のやうに生ひたぞと云ふたやうなアンバイじや、コレは一鉢何物がドコへ生じたと云ふことと有らうか、圓悟が舌頭地に落つと云ふた、餘りに言ひ過ぎるぞと

云ふたので有らう又錯を將て錯に就くと云ひ更に果然と云ふた翠巖が衆に示すなど出掛けたのが抑も大間違ひであるに、長慶がまた餘計なことを云ふ、大間違ひの道連じやと云ふのよ、然し長慶はコンなどを言ふて無からうと思ふて居たが果して其れに違はなんだと云ふので果然と云ふた、雲門曰く、關この人は一字の禪と云ふて時々コウ云ふ工合に一字を吐き出す、關と云ふは今では無いが昔は日本でも箱根の關所だの新居の番所だのと云ふて旅人の往來を厳しく検査したもので有たが、雲門は翠巖と保福と長慶と三人で色々なことを云ふのを聞て居てコレは怪しい奴らであるタダは通せぬぞと云ふので新たに關門を一つ鎖した、サ一通れるなら通つて見ると云ふアンバイ、圓悟が走て何の處に在て去らん、翠巖等三人がドコへ遁げて往くて有らう、天下の禪僧も跳不出、この關所は中々ドンな者でも容易に通れまいと云ふた、三人は昔のことよ、即今互ひに此關門をドウして通つたもので有らうぞ、ヘタに狼狽ると忽ちに眉鬚墮落するぞ、ソコが工夫のしどころじや、然るに圓悟老人は慈悲深い人て敗也、この難關を撃ち敗つたぞと言はれる、サ一關門は開いたぞ通るものは、サツサと通れコレから雪竇の頌じや、

頌翠巖示徒 遺老賊○教 **千古無對** 千箇萬箇○分一節 **關字相酬** 不估道○若

是總麼人○方解麼人○ **失錢遭罪** 飲氣吞聲○便打 **潦倒保福** 同行同伴○宿作道 **抑揚難**

○莫勝他好○且喜沒交涉 **嘖嘖翠巖** 道野狐精○合取口好 **分明是賊** 道着也○不坊 **白圭**

○放行把住○誰是同生死 **無玷** 下人不知價○天 **誰辨真假** 來多只是假○山僧從 **長慶相諳** 始得○未得○半在 **眉**

毛生也 至在什麼處○從頂門上

翠巖が眉毛ありやと衆に示した此一言の示とは八萬四千の法門をも皆奪ひ去り一切衆生の命をも奪ふて居るソコで圓悟が這の老賊と云ひ又人家の男女を教壞すと著語した諸君も亦た膽玉を奪ひ去られぬやうにするが好い、實に此老賊に對して千古無對ひかしから誰れ一人も應對したものは無いと雪竇は言ふたが一鉢にコレは酬對すべきもので有らうか有るまいか、翠巖は看よ老僧が眉毛ありやと問ふたのであるぞ、之に對して有ると應對したもので有らうか、又は無いと應對したもので有らうか、マサカに此處で有無に涉るものは有るまい、千古無對は勿論のことよ、然るに圓悟は之に對して千箇萬箇と云ふた、ナニ千古無對なことが有るも

のか、幾らも有るぞ千も萬もある、看よ日は朝々東より出て月は夜々西に沈んで居るでは無いかと云ふたやうなアンバイ、然しながら翠巖が眉毛ありやと云ふたのと雪竇が千古無對と言ふたのと誠に能く符節を合せたやうである、と云ふので分一節と云ふた何處が其やうに能く似て居るやら昔から此眉毛ありやに應對する者は無いはずで有るに、雲門がノコノコと出掛けて關字相酬ふた此の關と云ふ一字が千古萬古に透徹した應對ぞ、ソコで圓悟が妨げず奇特なりと評した、此の關の字がドコに奇特なところが有るぞ、眉毛ありやと問ふたのに答へて關と云ふただけのこと、コレが眉毛ありと云ふことか、又は無いと云ふことか、只いふ關、その奇特な所を捜して見ねば成るまい、イヤハヤ失錢遭罪よ、コレは唐朝の頃に凡そ錢を失なふた者が有れば罪科に處すると云ふ法律の出たことが有たと云ふ話である、錢を失ふた其上に罪科に處せられて、誠に引き合はぬ次第であるが、今コゝで失錢遭罪したのは誰で有らうか、或は雪竇も圓悟も皆失錢遭罪の仲間かも知れぬ、ソコで圓悟は氣を飲み、聲を呑むと云ふた、恐れ入た有様ぞ、誰が其やうに恐ろしがるや、

雪竇も也、た、少、な、か、ら、ず、と云ひつゝ、聲に、和、して、打、つ、とある、誰に何の罪が有て箇様な目に遭はせるので有らうぞ、一鉢に罪と云ふものは有るものか無いものか、善いことか悪いことか、ソコも工夫のしどころぞ、潦倒たる保福は抑揚得難し、潦倒と云ふは老倒と云ふも同じ意味で、老耄顛倒して居ると云ふ事だ、そやうな保福が賊と作る人心慮ると云ふたのを評して、オイボレの保福めが抑とソシツタのやら揚とホメタのやら分らんことを云ふたぞと云ふたので有るが、此の二句も亦た雪竇が保福をホメタので有らうか、ソシツタので有らうか、圓悟は、同行、同伴と云ふた、翠巖も雲門もソ一言はれた雪竇も皆好い道連ぞと云ふたのと見へる、猶ほ、這の、去、就、を、作す、コレは雪竇に向つてお前は保福を老耄したと言はれるけれども、マダ此の位なことはやりませぬ、其やうに世の中に人の無いやうなことはかり云ふものでは無い、兩箇、三箇ふたりや三人は無いとも無いと云ふて置て、直に次の句の下に、把、住、放行と云ふた、其抑揚し得難き所が即ち取るも捨てるも自由なところぞ、誰か是れ、同生、同死、この保福と同生同死する者は誰で有らう、雪竇は實に能く保福を見ぬいて居るから、其れこそ偕老同穴よと云ふたと見ても好し、又は保福と翠巖とが生涯

を俱にするとも見ても好からう、又他を誘ふること莫く、んば好しと云ふた、コレは全く雪竇に向ひ潦倒だの抑揚難得だのと保福を誹謗せぬが好いぞと云ふたらしい、且らく道へ没交渉ツマリ頓とツヂツマが合はんと評したこゝらの着語も何やら穩やかで無いやうに思はれる恐らくは後人の妄添もあるて有らう、勝々たる翠巖分明に是れ賊、勝々は多言の貌とある眉毛が有るか、の無いかのと餘計なことを言ふたものじやと云ふ下へ圓悟が這の野狐精、おのれ野狐の化物め口が臭くて鼻持ちが成らぬぞ口を合取せば好し、ダマツて居れと翠巖を讃歎供養した保福が云ふ通りに翠巖は分明に是れ賊である、盡十方法界を皆盗んだぞと雪竇が云へば圓悟は之にノウウ〜と出掛けて何が悪いと云ふので有るぞ眉毛ありやと衆に示したからとて何の差支へがある釋迦老師などは五十年もシャベリ續けたぞ道着するも也、た妨げずナニ其れが賊であると云ふのか其んなら圓悟が生け捕りにしてやると云ふので捉敗了也、サ一捉まへたぞ白圭玷なし、誰か眞假を辨せん、この賊の妙なことには一點の玷も無いこと白圭の如くじや着語に遠て辨じ得るや、サ一其玷があるやら無いやら能く分る者があるかドウじや恐らくは天下人未だ價を知

らず、誰も此玉の價を知た者はあるまいと圓悟は云ふたが雪竇は誰か眞假を辨ぜん、價の多少よりも先づ其玉の眞偽を能く見分けねば成らん、ドウじや翠巖と云ふ玉は眞玉か偽物か圓悟は多く、只是れ假と云ふた大抵は偽物よとコレが圓悟の辨じかたかと思ふたら山僧從來眼なしと云ふ、眼が無くては眞假の辨じやうは有るまいが碧眼胡僧すなはち達磨ならば其眞假を辨じ得るて有らうと他に譲つた、一鉢コレは眞假の論量に涉るべき者て有らうか有るまいか、メツたに雪竇や圓悟の口うらに載せられぬやうにせねば成るまい然るに雪竇は長慶相ひ詰んぜりと云ふた、長慶は其眞偽を能く詰記して居ると云ふのじや、圓悟が是れ精にして、精を識る化物のことは化物が知て居ると云ふた須からく他に於て始めて得べし、長慶ならば能く知つて居るて有らう、然し未だ一半を得ざることあり、半分は知て居ても半分は知らぬと云ふので有るが、何が半分て有らうぞ、トにカク其長慶がドウ知て居るか、と云ふに眉毛生ぜり、圓悟は什麼の處にか在ると云ふた、トへ眉毛が生ひたぞ、足の底へ生ひたか鼻の先へ生ひたか、頂門上より脚跟下に至るまで、一莖も也、た無し、トにも一本も無いでは無いかと云ふた諸君ドウじや最初からの

問題が翠巖老僧に眉毛が有るか無いかと云ふので保福は賊と作る人心虚はると云ひ長慶は眉毛生ぜりと云ひ雲門は之に關と云ふ一字を答へ雪竈は白圭玷なしと云ひ圓悟は一莖もまた無しと云ふた、コレは人々各自に皆見る所が違ふので有らうか又は同じなので有らうか先づ第一に人々各自の眉毛から穿鑿して見ねば成るまい、一鉢に吾人の眉毛はドコに在るもので有りましやう、匆卒に從來眉毛眼上に在りなどと言ひますまいぞ、

第九則 趙州東西南北

示明鏡當臺。妍醜自辨。鑊錮在手。殺活臨時。漢去胡來。胡來漢去。死中得活。活中得死。且道。到這裏。又作麼生。若無透關底。眼轉身處。到這裏。灼然不奈何。且道。如何是透關底。眼轉身處。試舉看。

明鏡妍醜の二句は、師家の智見を言ひ鑊錮殺活の二句は師家の作略を言はれたのじや、凡そ佛祖の門庭に於て一切衆生の導師と爲るべき人は明鏡の臺に當るが如

き知見が無ければ成らぬ心筈に一點の曇りさへ無ければ一切衆生の妍醜すなはち迷悟邪正が自然にアリくと辨見せらるサテ其迷悟邪正の一切衆生を濟度するには或は折伏或は攝受時に臨み變に應じて殺すとも活かすとも自由に扱ひ得られる鑊錮の寶劍を手に持て居ねば成らぬ其明鏡さへ曇りなければ漢去り胡來り胡來り漢去るドンなものが映つて來ても、少しも滯りなく來去自由に任せて妍醜分明じや、元來明鏡の方には去來の相は無い、只向ふから映つてくる胡にせよ漢にせよ花にまれ月にまれ向ふ次第に任せるのぞ、手に鑊錮の寶劍さへあれば死中に活を得させやうとも活中に死を得させやうとも自由自在に出來る元來寶劍に死活は無い、只これに觸れるものに死活が在るぞ且らく道へ這裏に到て又作麼生、サー箇様な場合に臨んでドウしたもので有らう、コレは人の師となる者も人の弟子となる者も同じこと若し透關底の眼すなはち佛祖が經歷し來られた所の道中の險巖、ひかしの箱根山や大井川のやうな難所を通り抜け來つた眼力も無く、又轉身の處と云ふて進退これ谷まると云ふ所へ往き當つてもヒラリと身を轉じて自由に働らくと云ふことが出來んやうでは這裏に到て灼然として奈何ともせ

ず箇様な場合に臨んで何とも致しかたの無いことは誠に明らかに分つたことと有るサ一其の透關底の眼と云ひ轉身の處と云ふは如何なることと有るぞ各自ドウじやと拶着してサテ本則を引き出し試みに擧す看よ。

本則 擧僧問趙州如何是趙州

河北河南○總說不著○烟泥裏

州云東門

西門南門北門

水○開也○相罵○見成○公案○還見○便打

この問は妙な問じやコレを試問と云ふと申すことじや趙州と云ふはモト地名であるけれども世間の人が皆この從念禪師のことを趙州和尚とばかり云ふて居る山陽道生れの儒者に山陽と云ふ人のあるやうなものじや然るに或る僧が其趙州和尚に向て如何なるか是れ趙州と問ふた此僧なか／＼食へぬヤツぞ趙州和尚がこの問を自分のこととして答へればイヤお前のことでない趙州城のことを問ふたのであると言ひ又趙州城のこととして答へればイヤ土地のことを問ふたのは御坐らぬと言ふつもりものじや問話の語脈が兩端に跨がつて居るから國悟老人が河南河北と着語したドチラを問ふのかトンと分らんぞと云ふので更に總て説不着と云ひ又爛泥裏に刺ありドロ／＼した中に針があるやうな問ひ方でメツタ

に足を入れられない然し河南に在らずんば正に河北に在りドチラかのうちに答へをせねば成るまい生死と涅槃煩惱と菩提地獄と極樂みな此通りのことよコレで下手にマゴツケばモハヤ其れざりじや趙州がコレを何んと切りぬけるぞ州云く東門西門南門北門コレは果して趙州城のことであらうか又は趙州和尚のことで有らうか趙州城の城門はタンカに東西南北の四門がある然し趙州和尚の方にも發心修行菩提涅槃の四門が有て東西南北に配當されてある實に此外にも理入門だの行入門だの聖道門だの淨土門だの有門だのと幾らも門があるけれども今只四門だけを答へたものと見える彼の趙州城の四門の出入は馬も通れば牛も通る官吏も通れば罪人も通る今此の佛祖の關門も彌陀も通れば閻魔も通る八萬四千の法門を八萬四千の塵勞が出入するサ一此趙州和尚の答は何を何んと答へたので有らうぞイツレにても門は開いたと云ふので國悟が開也と着語した諸君遠慮なしに通つて見なされ但し此門はサトリと云ふ鳥の虚音は許さぬと云ふことじや拙老の拙詠にふみまよふ人の心はさ／＼ねども悟のをらね得やは許さんと云ふたのもある御参考の一端になれば幸甚じや國悟は此趙州の答話に

アキレたと見えて相罵し、することは汝に任す、嘴を接け、相唾することは、備に饒す水を、潑けと云ふた、何とても言ひたいやうに勝手に言ふが好いと云ふたやうなアンパイじや然しコレが實に見成公案じや石頭大師の、參同契には門々一切の境、回互と不回互と回して而して更に相渉る、然らざれば位に依て住すとある、盡十方法界アリのマ、の一大公案ぞ、還て見るや、その見成公案が諸人に見えたかドウじや、マゴックと擲ぐるぞ、便ち打つ、

頤句裏呈機劈面來

○響○魚行水濁好燦迦羅眼絶織埃

東西南北門相對

○背却趙州城向什處去無限輪鎚擊不開

コレが雪竇禪師の見かたじや、問ふたヤツも問ふたヤツなれば答へも答へてあるが、中に就く如何なるか、是れ趙州と言ふた勢ひは句裡に機を呈して劈面に來ると云ふもので大抵なものはコレをスカリと切りぬけると云ふことは容易に出來ない、圓悟が響と着語したのもソコじや、問ふたもの、聲にはソレと言ひあらはして無いけれども、タシカに句裡に響があるぞと云ふのじや、ソレが即ち魚行ば、水濁ると云ふものぞ、趙州を誘する莫くんば好し、コレは此の問ひ掛けた僧に向つて

句裡に機を呈するなどは失禮では無いかと云ふたものと見ても通ずるが、コソな着語は無くても好いと思ふ、第二句に燦迦羅眼織埃を絶す、燦迦羅と云ふは梵語て之を漢譯すれば堅固と云ふことに成る、そうじや、サスガ趙州和尚の眼玉は、タシカなものぞ、織埃も無いから明らかに問ふた者の心肝を見ぬいて居るとホメた句と見えるソコで圓悟が相鎚を打て、沙を撒し、土を撒す、何て織埃を絶したのが有り、難いぞ、沙をマキ散らせ、土をマキ散らせ、一鉢に雪竇は趙州の眼に塵が無いなどと云ふけれども、其んなことを云ふて却て趙州を帶累すること、莫れ、趙州はドンなに迷惑するかも知れぬぞ、ソレをも顧りみすに、天を撈し、地を摸するやうなことを言ふて、趙州を讚歎するとは、什麼を作さん、誠に無用なことはあると云ふた、第三句に東西南北門相對す、コレが趙州の眼裏に織埃なきところの景況じや、圓悟が開也と云ふ、ソレ門があいたぞ、其實は此門元來無始劫來開閉は無い、通るものは、イッても通る、通れぬ者は、萬劫にも通れぬ、且つ此門は元來一つじや、經には一路涅槃門とも言ふてある、ソレを東西南北などとは、ケシからんことに思ふと云ふので、那裏にか、許多の門あらんと云ふた、元來盡十方法界すべて是れ趙州城じや、然るに若し趙

州城を背却してはドコへも往けまい、什麼の處に向てか、去るソコで此門は元來あ
けはなしてあるけれども、通り難いのじや、其様子を第四句に限り無き輪鍵撃てと
も開けず、ドノやうな輪鍵で打ち破らうとしても、中々容易に開けないのが此關門
じや、ドウしたならば此門をあけることが出来やうぞ、一體に此門をあけやうと思
ふたのが大間違ひじや、國悟が雪竇に向て自ら是れ、爾が輪鍵到らすソレはお前の
打ちやうがツマらんからじやと云ふて實は吾々の方を後目に掛けた、開也ソリや
開いた通らば通れ花も通れは紅葉も通るものをナゼ人間には通れんので有らう
ぞ、コ、は一つのトツクリと工夫をして見ねば成るまいテ、

第十則 睦州問僧甚處

垂示恁麼恁麼。不恁麼不恁麼。若論戰也。箇々立在轉處。所以
道。若向上轉去。直得釋迦彌勒文殊普賢。千聖萬聖。天下宗師。
普皆飲氣吞聲。若向下轉去。醯雞蠅蠚。蠢動含靈。一々放大光
明。一々壁立萬仞。儻或不上不下。又作麼生商量。有條舉條。無

條攀例試舉看

宇宙萬物すべて皆兩々双々相對して居る。貧富苦樂智愚強弱から凡聖迷悟聖淨顯
密、往相還相、向上向下、智慧門だの慈悲門だの稱ふとか與へるとかイツレ兩々双々
の間にマゴツクので有るからソコで佛祖が吾々をマゴツカセせないやうにしやう
とて色々なことを言はれるのじや、國悟老人今度は何と言ふたぞ恁麼恁麼不恁麼
不恁麼恁麼はイツもの通り此の如しと云ふやうな詞であるから此の十字を俗語
に和譯して見れば、ソウじやソウじやソウて無いソウて無いと云ふたやうなアン
パイであるがソンならドウすれば好いと云ふのであるぞ、ドウもせんでも好いの
よナゼかと云ふにドウても好いからドウもせんでも好いのであるが、又ドウても
好いからドウしても好いのじや、ジャに依て若し戰を論せば箇々轉處に立在すド
チラから論じて見ても各箇に獨立獨尊じや、山は高いまゝに好い風景で谷は深い
まゝに好い風景ぞ、コ、ラの風光を殊勝らしく涙をこぼして、アラ有り難たや此身
此儘のお助けに預かることよなどと珠數つまぐる婆アーさんもあれば、佛法はあ
りけるものを隣なる老爺がさげた火燧袋に、とうたふ老僧もあるじや、所以に道

ふ若し向上に轉し去れば直に得たり釋迦も彌勒も文殊も普賢も千聖萬聖も天下の宗師も普ねく皆氣を呑み聲を飲ひ菩提も涅槃も何の役にも立たぬぞ此時に餓鬼や地獄の衆生はドウじやドンな面附て何をして居るぞ山の高いときに谷はドンなじや智慧の鋭いときに慈悲はドウなるソコは各自に工夫して見るが好い若し向下に轉じ去れば醜難も蠛蠓も蠢動含靈も一々に大光明を放つて一々に壁立萬仞ならんア一ラ不思議や醜難と云ふて鹽辛や醬油樽の中にワイて居る虫けらも蠛蠓と云ふやうな細かな虫も其他のウヨヨして居る都べての動物蛭蜂蜻蛉に蟋蟀辛虫ゲヂク蟹蛙の類に至るまで皆光明赫耀として徧ねく十方を照らし三十二相八十隨好のふん姿これを仰げば愈々高く即ち壁立萬仞て有らうと云ふコレは一躰ドウしたことを其實は最初から此通りなので今さらに驚ろくべきには無い然し箇様に兩々相對して申したのでは中道第一義諦にかなはぬと思ふやからも有らんソコで儼し或は不上不下すなはち向上でも無ければ向下でも無いとしたときには又作麼生サードウしたものて有らうぞ別にむづかしいことも無い條あれは條を攀ち條なければ例を攀つ何やら當今の法律家の云ふやうな申

し分じや條例とは何を云ふぞ天はイツでも高く地はイツでも低い蚯蚓は土を食ひ螢の尻は光る然しコレに一つの昔し話もあるぞと云ふので試みに擧す看よ

本則擧 睦州問僧近離甚處採草僧便喝明頭○也解懸處去州云老僧

被汝一喝陷虎之機僧又喝未是○只恐龍頭蛇尾州云三喝四喝後作

麼生逆水之波○未嘗有○入那裏去僧無語果不然機州便打云若使睦州盡令面行擧這掠

虚頭漢放過第一若一落

睦州和尚のところへ或る僧が初めて参問いたした時のこと、見える直ちに睦州の方から問ひ掛けた近離甚の處ぞ、前は近ごろドコを出立して來たのぢやと云ふコレは試験の問ひかたで此僧の識見がドコまで往て居るかを點檢するのぢや今までドコに居てイツドコを離れたぞ臺灣から來たか遼東から來たか煩惱をイツ離れた又は菩提をも離れて居るかドウじやナと云ふやうなアンバイじや其れだから圓悟が探竿影草と着語したコレは古語に探竿在手影草隨身とあるのて睦州老人が此僧の脚底をサグられるのぞと云ふのじやサスガに此僧もマンザラの

者では無いと見えて便ち喝す。大喝一聲エライ勢ひじや圓悟も作家の禪客と評した作家だの作者だのと云ふことは詩人の稱から出たので有らうけれども唐宋のころは詩文が大流行であるから作家とか作者とか言へは人を稱賛する套語に成たものと見えるソコでサスガはエライ禪客ぞと一旦ホメはホメたが然し詐明頭なること莫しやと駄目を押した詐明頭と云ふは知りもせんことを知つたふりすることぢやそな陸州の試験に逢ふて臺灣から來たとも言はず遼東から参りましたとも言はん所はサスガ作家の禪客らしいけれども其一喝が眞實自分の力量から出たので有れば好いが一時の間に合せて詐明頭ではツマランぞと圓悟が念を入れたのじや州云く老僧汝に一喝せらるドゥじや此の陸州の一言はコレが向上て有らうか向下て有らうかヤア貴様なか〜エライな老僧も其一喝にはビツクリ致したぞとドンな面して言はれたので有らうか思ひやられるよ圓悟が陥虎の機と云ふた此れでいよ〜此僧の實力あるか無いか分る恐ろしい所じや人を揉して作廢コレは陸州に向て其やうに人をタブラカシテ何にするのじやと云ふた此僧も中々油断はせんから僧又喝すと再度の大喝をやらかしたコ、て此

僧が眞實の龍であるやら又は蛇のバケたので有るやらを見て取らねば成らぬぞよと云ふので圓悟が頭角を看取せよカシラに角があるか無いか調査して見るが好し然し恐らくは龍頭蛇尾であらうぞと預言した然るに陸州は百尺竿頭さらに一步を進めて三喝四喝の後作廢生お前は頻りに大喝して一喝再喝エライ勢ひてあるが更に三喝も四喝もやらかした後はドウするつもりじやサ、何となりとも言ふて見なさい陸州ます〜猫なで聲であるが其氣は已に猛虎を丸呑にして居る逆水の波と圓悟が着語したコ、て此僧に實力があれば死中に活を得る手段が無ければ成らんので有るがソコが誠におぼつかないから圓悟が更に那裡に入り去ると云ふた此僧ドコヘドウにげるで有らうか其足元に氣を附けて見て居よと吾々に注意せられたのじや然るに僧無語コ、に至つて閉口しては前の一喝再喝みな虚喝と成てしまふた圓悟に果然として摸索不着と罵しられても一言が無いソコで陸州の一棒を食つた便ち打て云く這の掠虚頭の漢コ、無ければ成らん何でも胡說亂道ては往かん別して生死の一大事を決定すべき肝要の場て似て非なる一喝再喝たとへ陸州は許して置ても臘月三十日に至つて閻魔老子から宿債の

催促にあつかつた時には一言も無からうソコで圓悟は陸州が掠虚頭と叱つた位
て一棒食らはせたばかりでは手ぬるいと云ふ所から一着を放過して第二に落
せりと評した打て打て打ちつゞけて宿債を償却し盡させれば好いのにと云ふた
のじや實に眞箇の參禪は命がけて無ければ成らぬと云ふこともコ、ラてトツク
リ呑込んで置かねば成らぬ

頤兩喝與三喝雷聲大兩點全無作者知機變若不是作家爭驗若謂騎

虎頭人怒感會〇也有人作遊見解二俱成晴漢兩箇〇自領出去誰晴漢辨〇

泊乎陳毅人拈來天下與人看看即不無觀者即晴〇閉梨若若眼看

カアーツ、カアーツト大きな聲ばかりするだけのことなら誰にも真似が出来るけ
れども其れては全く胡喝亂喝と云ふものじや其れだから臨濟大師には四喝と云
ふことが有る或る時の一喝は一喝の用を作さず有る時の一喝は却て一喝の用を
作す有る時の一喝は踞地獅子の如く有る時の一喝は金剛王寶劍の如しと言はれ
た今此の僧が陸州に向て兩喝を食らはせたソコで陸州に三喝四喝の後作麼生と

彈ねられてアトは一言も無い其様子を一句にまとめて兩喝與三喝と言はれた圓
悟が之を評して雷聲は洪大なれども兩點は全く無しカラ神鳴りて雨が降らんで
は苗勃然として此に起きんと云ふわけにも往かんど云ふた又陸州が三喝四喝
の後作麼生とハチノケた様子を評しては古より今に至るまで人の恁麼なる有る
こと罕なりと讚歎した作者機變を知る此の句は此の僧が最初に陸州の近離甚の
處ぞと云ふ拶問を受けてスカサス一喝を下した様子と云ひ又さらに再喝したア
ンパイと云ひ中々の奮參と見えるが尤も感心なことには彼の三喝四喝の後また
作麼生と云はれた所へ往てはマタと喝は發しないのみならずモハヤ慎しんで一
語も出さないコ、が即ち機變を知ると云ふものじや法を知るものは憚ると云ふ
もコ、云ふ場合のことである圓悟が若し是れ作者に在ずんば争てか驗得せん
と云ふたのは陸州の方へ掛けて見たのかも知れんソコで次の着語に只恐らくは恁
麼ならざらんと云ふたのが再喝の僧を抑へたものと見えるソツすると此の前の
着語は陸州ほどの作家で無ければ此れだけに機變を知て居る僧を驗得すること
は出来んと褒めたので有らう、コレでモハヤ此の公案の項は済んですましたので

第三句以下は世人が此の公案を邪解して居るのを勘検せられるのじや、若し虎頭に騎れと謂はゞ二俱に瞎漢と成らん。コレは世人が此の公案を評論して此の僧が睦州に三喝四喝の後また作廢生と彈ねられた時にマタ大喝一聲やらかしたなら好かつたらうなどと云ふものが有るが若し其様なことをしたなら其れは二人とも目盲と云ふものじや、圓悟も虎頭如何が騎らんと云ふた又次の句に何ぞ止だ、兩個のみならんと着語した二人ばかりでは有るまい、目盲ドチ／＼幾らも有らうぞと云ふ自領出去は自分で持て往けと云ふのだからコレは圓悟が雪竈に向て外に瞎漢は無いぞと前こそと云ふたやうなアンバイ然るにコゝて又ガラリと幕がかはつた、誰か瞎漢なるぞ、サ、虎頭に騎れと云ふたのが瞎漢か又騎れと云ふのに騎らないのが瞎漢か今この雪竈が瞎漢と云ふたのはドウ云ふわけて有るか能く辯論して見るが好い大抵のものは瞎漢と聞いたらイヤな心持がするて有らう其んなことでは相談に成らんど盡十法界一大瞎漢とあらはれ來ることも有るまいもので、でも無いサ、其の瞎漢を拈じ來つて天下の人に看せてヤルが好いと云ふたコレは一鉢にドウしたと云ふことと有らうぞ、圓悟は誰をいひ辯ぜいめん、と云

ふたコレは雪竈が誰か瞎漢なるぞと云ふたのに答たので誰が瞎漢であるやら其れを誰れに辯論させやうと云ふのじやとカラカッタコレは人々各自に辯じて見ねば成るまいよ、又結句の着語に看ることは無きに非ず、觀着すれば即ち瞎漢とある雪竈は拈じ來て天下人に與へて看せしむと云ふたか看ると云はれたからとて見やうとしたなら目が潰れやうぞと云ふのじや目がツブれては悪るいか知らん一法を見ざるを觀自在と名くとも聞いたことが有るがソウして見ると觀音もヤハリ盲目では有るまいかサ、畢竟何者か是れ瞎漢なる圓悟は此の斷案を下して開眼も亦た得たり合眼も亦た得たりと云ふた諸君は何と見るぞ

第十一則 黃檗酒糟漢

垂示 佛祖大機。全歸掌握。人天命脈。悉受指呼。等閑一句一言。驚群動衆。一機一境。打鎖敲枷。接向上機。提向上事。且道什麼人曾恁麼來。還有知落處麼。試舉看。

圓悟の垂示が三節に分れて黃檗禪師平生の活機を稱揚せられた第一節が黃檗の

大智慧門て佛祖の大機三世の諸佛代々の祖師の洪大なる活機を、一部分ては無く全く掌握に歸す。藥師如來の十二大願も阿彌陀如來の四十八願も乃至釋迦の拈華も達磨の西來も花の紅も柳の緑も、全分黄檗の手の内に握つて居る。そこで人天の命脈梵天帝釋四大天王を始め凡そ世界中に蠢々として限りも無い人間どもを殺そうとも活かさうとも、悉く指呼に受く。御主人様が下男下女を追ひ使ふも同様じや、次に第二節が黄檗の大慈悲門て衆生濟度の様子を見れば、等閑の一句一言別段に考へも工夫も要せず、と云ふてもエヘンと云ふても、泣いても笑つても其れが悉く群を驚かし衆を動す。那波翁や豊臣秀吉が進めつと一聲かければ百萬の兵が夕立の雲が瞬間に忽ち一天に滿ち寒がるやうに猛進するも同様ぞ、一機一境前は言句であるから口で言ふ方、これは機境で揚眉瞬目舉手投足、寝るも起るも鎖を打し、枷を敲く、鎖は罪人などを縛するもの、枷は罪人の首や足へはめて動かれないやうにするもの、參禪學道の僧にもせよ俗にもせよ文字言句の理窟に縛されたり、己れの獨斷憶想を悟のやうに思ふたりして、己れと己れの首も足も動かさないやうになつて居るのを、黄檗禪師は一機一境で打撃し敲破して自由を得られるやうにし

て下さる、其れが即ち向上の機を接し、向上の事を提ぐると云ふものである、向上といふは今さら云ふまでもないが、獨一眞神のゴットに車を挽かせて毘盧舍那如來に後押させる、檀那殿の身分のことじや、次は第三節に其れを今の公案拈提に結歸させた、且く道へ什麼人が會て、恁麼にし來る、昔から誰れぞ今言ふたやうな人物か有つたか、ナ、還て落處を知るありや、何處等邊が落著の處であらうぞ、其れには適當な話がある、試みに舉す看よ、

本則 舉黄檗示衆云、打水得盆、不出 汝等諸人盡是、下 墮酒精漢、恁麼

行脚、道若○踏破草、○秋天插地 何處有今日、用今日爲什麼、○不妨、○詳動衆 還知大唐國裏無禪師、

麼、老僧不會、○一口吞、○也是、○盤居、○羅漢 時有僧出云、只如諸方匡徒、也、○好 領衆又作麼生、也、○好

抄○這機不、○得、○不、○恁麼 檗云、不道無禪只是無師、直得、○分、○破、○不、○下、○瓦、○解、○水、○消、○龍、○頭、○蛇、○尾、○漢

黄檗は名を希運と云ふて達磨大師十世の法孫である、法を百丈大智禪師に嗣いで、弟子に臨濟義玄禪師が出た、身の長七尺額に圓珠ありとあるから、肉鉢も餘程異常なる人であつたと見えるが、天性に禪を會すと申して生れながらに悟つて居ると

いふ評判である、或時門下の衆に示して云く、圓悟は直にこゝへ著語して水を打いて、盆に碍えらると云ふた、水を打すと云ふは水を汲むこととて、水は幾らで井戸の中に澤山あるけれども、其水を汲む盆すなはち水桶には限りがあるから、限なき水も限られることになる、今黄檗が謂ゆる佛祖の大機全く掌握に歸するの大力量を以て示しても言句には限りがある、況んや其示しを受ける衆徒が凡庸では示しがひもあるまいぞと冷かしか、まかし更に又語をかへて天下の衆僧も跳不出、此の黄檗に口を開かれては如何なる名僧でも知識でも自由を得ることは出来まいぞ、汝等諸人盡く是れ嗜酒糟の漢、恁麼に行脚せば、身のたけ七尺の大入道が手の下の罪人たる坊さんだちを瞰みつけた有様は、どんなで有たらうかと思はれる、汝等は誰も彼も皆ことごとく酒の糟ばかり食つて居る、本統の正宗や劍菱の味を知らない奴等だ、其様なこととて支那四百餘州をウロウロと行脚してあるく、これは支那の昔の話では無い、今日の學者は滔々たる天下皆悉く糟食ひて、三乗だの一乗だの顯教だの密教だの自力だの他力だのと議論ばかり騒々しくして、禪宗坊主までが看話だの黙照だの五位だの四料簡だのと言ふて居るは、まだしものこと、哲學だの科學だの

と云ふことを直指單傳の正法眼藏のやうに思ふて居るのが多い、圓悟がこゝへ著語して道着、そりや言ひ出したぞといふアンバイ、又草鞋を踏破すとある、恁麼に行脚せばと叱られるけれども、其う馬鹿にしたものではない、處々方々をあるくために草鞋を澤山に踏み破つて居ますぞと云ふのじや、これが當今ならば隨分學資は多く費やして居ると云ふのよ、實に其れに違ひない學資だけはたしかに十分かつて居る、何の處にか今日あらん、どれほど草鞋を踏み破り幾ら學資を費やして諸方をうろつきあるいても、どれほどの學問をしたからと云ふても、どこに今日こそ悟りが開けたと云ふ日に遇ふことが出来やうぞ、圓悟がこゝへ口出しして今日を用ひて什麼にかせん、黄檗は今日とかいふことを大切らしく言はれるが、其の今日とかいふものを何にするのであるぞ、悟りは父母未生以前から有るのである、今更に今日も明日もあつたものかと云ふのじや、しかし斯う叱り飛ばされては妨げず、群を驚かし衆を動すること、を誰でもびつくりするて有らうといふのであるが、此着語は圓悟のでは無くて、誰ぞ後の人の下語を誤つて入れたのであらうかと思はれる、還て大唐國裏に禪師なきことを知るや、一鉢に汝等は此の大唐國裏四百餘

州廣しと雖も、禪師と言ふべき者は一人も無いといふことを知つて居るか、恐らくは知らぬに依て草鞋を費やして尋ねあるくのであらうと言はれた、圓悟は之を評して老僧不會といふ拙者などは一鉢に其の禪師とかいふものが有るものやら無いものやら、最初から存せぬに依て、お話が頓と合點がゆきませんといふのじや、又一口に吞盡すとある、恐ろしい大言じやのうと云ふたやうなアンパイ、更にまた是れ雲居の羅漢とある、これは雲居寺の羅漢堂に安置してある羅漢のうちに大層に鼻の高いのがある、ので都べて高慢なことを言ふ者のことを雲居の羅漢と云ふのが此時代の俚諺であつたと申すこと、果して黄檗が斯ういふたのが高慢であらうか大言であらうか、それは後に分ることになる、時に僧あり出て、云く只諸方の徒を匡し衆を領するが如き又作廢生、此僧は嗜酒精黨の代表者と見える、あなたは大唐國裏に禪師と言ふべき者が一人も無いと言はれるけれども、随分處々方々に立派な御寺があつて多くの坊さんを集めて坐禪だの接心だの入室だの工夫だのといふて居るのが幾らもあります、が、あれは何としたもので御座る、只一言に禪師なしとは申されますまいと突つ込んだ、着語にまた好し一拶を興ふるに、と此僧を擲

掄した、又機に、臨ては、恁麼ならざるを得ず、かやうな場合になつては是非とも斯うなければなるまいと益々おだてる、さすがに黄檗も此れには閉口かと思へば、一向平氣で、樂云く禪なしとは道はず、只是れ師なし、只此の一言が此一則の公案の眼目じや、そなたは禪師なしと云ふことを何と聞えて居るぞ、禪といふものは宇宙に先立て有り、萬物滅盡しても無くならないものであるから、禪が無いとは言はぬぞ、只是れ師なし其禪といふ者は人から教へられるものでも無ければ、人に教へることの出来るものでも無い、それじやに依て禪の師といふ者は無始劫來未來永劫までも決して有るべきはずのものでは無い、然るに何處にか禪を授ける師匠でもあるかのやうに思ふて、處々方々の酒の糟を貰ふてあるくと云ふは、何たる卑劣なことであるぞと云ふのが、黄檗禪師の佛祖の大機を掌握に歸せしめて向上の機を接する所である、圓語の短評に直に得たり、分疎不下、何だか申しわけが立ちそうも無いぞと云ひ、又龍頭蛇尾の漢と抑へたやうに聞えるが、これは吾々も互ひに向つて更に大疑團を起させやうとの圓悟の大慈大悲を、畢竟するところ、師教を待つべからざるの禪とは果して何物ぞ、

頌 凛凛孤風不自誇猶自不知有端居寰海定龍蛇也要別編素大中

天子曾輕觸從地起二度親遭弄爪牙死報

世界乃至山河大地盡在黃檗處乞命

雪竇の此の頌を圓悟が評して黄檗の肖像の讚のやうであると言はれてある、本則を直接に頌したのは無く、全く黄檗の平生を頌出したのである、凛々たる孤風自から誇らず身のたけ七尺にして額に圓珠あり、宣宗皇帝をビシヤリとなぐりつけた有様が見えるやうじや、凛々は清寒のすがた孤風は卓立して居る様子、そうして自ら誇らずと宏量大度喜怒色に顯はれないといふアンバイ、老木の梅花が風雪の間に香氣を放つて居るやうに見える、着語に猶ほ自ら有ることを知らず誇るの誇らないのといふ沙汰ではない、黄檗自身には己れに此の如き天稟あることを御存知ないのである、本分の境界は都べて此の如きものよ、水自から物を濕ぼすことを知らぬ、火自ら物を焼くことを誇りはせぬ、仁義でも忠孝でも本統のものには痕跡がないぞ、また是れ、雲居の羅漢といふは、大層に鼻が高いぞと冷かした、これは

雪竇の此一句が能くも黄檗を僅々七字に言ひ盡したぞと褒めたのであると見ざる、寰海に端居して龍蛇を定む、これは更に黄檗の大機大用を頌出した、寰海とは寰は寰中と申して畿内といふも同じこととて天子の直轄の處を云ふ、海は海内の一國全跡を指す、今黄檗の立場は實は寰海くらゐのことでは無い、十方法界に端居して居るのじや、天子が九重の奥に手を拱して居て萬乘の國を治め億兆の民を安んずる如く、龍蛇を定む、謂ゆる人天の命脈指呼に受けて、一切衆生の迷悟昇沈を判断する力があるといふのじや、圓悟が也た、緇素を別つを要すと着語した、緇素といふは常に僧俗のことに使ふこともあるが、今は只雪竇が黄檗に龍蛇を定むる眼があるといふたのを聞き答めて本統に其うかへ能く眞偽を取調べて見ねばならぬぞと云ふたものと見るが好いと申すことじや、次の也た、身白分明ならんを要すとあるのは、これは前の着語の註を後人が書入れたのを誤つて混じたのであるかと思はれる、大中の天子曾つて輕觸す、其れには確實なる證據があると云ふので、龍蛇を定むる様子を故事を引いて證明せられた、大中といふは唐の宣宗皇帝の年號である、宣宗は最初一旦出家して香巖志閑禪師の弟子になり、後に鹽官の齊安國師に參じ

て居られた頃、黄檗が國師の會下の首座であつた或日のことであつたが、黄檗が禮佛して居る處へ往て、佛に着て求めず法に着て求めず衆に着て求めずと云へり禮拜して何の求る所かあると問ふた、この問は一往尤なことで、前にもあつた禪といふものは師匠から教へて貰ふべきものでは無いと言ふのが當然であるから、佛に求むべきでも無ければ法に求むべきでも無い、然るに今黄檗が頻りに佛を禮拜して居るに依て、何を求めるのであるぞと問ふたのである、ところが黄檗の答が面白い、佛に着て求めず法に着て求めず衆に着て求めず、常に禮することは是の如しと言はれた、こゝが即ち黄檗の黄檗たる所以、イヤ佛法の佛法たる所以を説き盡して老婆深切な所であるけれども、宣宗には尙ほ悟れなかつたと見えて、更に禮を用ひて何か爲んと云ふと、黄檗はビシヤリと宣宗の横面をなぐりつけた、宣宗驚いて太座生亂暴なことをする男じやと云ふのを、黄檗が這裏何の所在を鹿と説き細と説く、亂暴だの丁寧だのといふて居る所では無いぞと言ひながら、又ビシヤリ、これは幾らなぐられても致し方が無い、すべて何事でも求むる所があつては本統の事にならねたとへば、君に忠義を盡し親に孝行をすると云ふても、もとより何も求むる所の

あるべきものでは無い、然るに汝は親に孝行をする君に忠義を盡す何の求むる所があるかと問ふものがあつたなら、どうであらうぞ、火に向つて何の求る所あつて焼くぞと問ふたならば、求むる所なくして常に焼くこと此の如しと答へるであらう、それを更に焼くことを用ひて何かせんと云ふたらどうであらう、ビシヤリとやられるのは當然ではあるまいか、偕宣宗と黄檗との話はまだ面白いこともあるが、其れはお預りと致して今此頌に會つて輕觸と云ひ三たび爪を弄するに遭ふと云ふたのは、此事である、大中の句の着語に何の、大中、天子とか、説か、んといふたは、此の黄檗にかゝつては、大中天子どころでは無い、宇宙も虚空も亦たビシヤリとなぐりつけるであらうぞといふたアンバイ、又たとへば、太なるも也、た須からく地より起るべし、といふは、太とは泰山のこと、泰山といへば日本の富士のやうに此上も無い山としてあるけれども、山が幾ら太くても地の上の疣でしかない、又更に高さも天あるを、奈、何、せん、幾ら高いといふても、其上に天があるぞといふたので、天子が何ほど尊とくても、佛祖が如何に勝れてあつても、各自本具の妙心から見れば、何でも無いものよと云ふのである、又結句の着語に死蝦蟇、これは宣宗を罵しつたので、三た

びビシヤリとやられた男振のわるさ、死だ蝦蟇のやうて見られたものでは無い、多
 口にして什麼をか作す、一跡に宣宗はあしやべりてあるから役に立たぬと抑へつ
 け、猶ほ是れ小機巧、これは黄檗が宣宗をなぐりつけたくらゐなことは何も全力を
 盡したわけては無い、ほんの小細工に過ぎないのぞ、若し是れ大機大用現前せば、盡
 十方世界乃至山河大地盡く、黄檗の處に在て命を乞はん、もしも本統に力を出した
 ならば天地も萬物も皆なぐりつけられるぞといふのであるが、是の如きの力を以
 て千年以前支那の黄檗山に居た希運老僧のこととばかり見てはすむまい、即今も
 互ひに其力をどうしたもののじや、一説に此の若し云々の着語は前の小機巧の註て
 後人の加へたのであらうと云ふことじや、其うてあらう。

第十二則 洞山麻三斤

垂示殺人刀。活人劔。乃上古之風規。亦今時之樞要。若論殺也
 不傷一毫。若論活也。喪身失命。所以道向上一路。千聖不傳。學
 者勞形。如猿捉影。且道。既是不傳。爲什麼。却有許多。葛藤公案。

具眼者試說看。

都べて事物は皆兩面のあるものであるから、兩面互ひに宛轉無礙にして始めて事
 物の真相實用が顯はれるのである、今は刀劍と殺活とを以て其道理を説き明かさ
 れた、殺人刀といふは消極の方で空とも云へば無とも云ふ、事業の上で云へば破壊
 する方、掃蕩する方、抑へ附けて働らかせない方、活人劔と云ふは積極の方で色とも
 云へば有とも云ふ、事業の上で云へば建設する方、成立させる方、打ち任せて自由
 させる方、かやうに二方面あるけれども、共に銳利にして間に髪を容れることも許
 さないのは同じであるから、一つの刀劍に譬へたのである、さて斯く兩面相依て事
 物を圓滿ならしむることは、乃ち上古の風規、三世の諸佛も歴代の祖師も皆同様
 の風俗とも規則とも云ふべきぞ、佛祖に限つたことでは無い、花の咲く紅葉の散る
 も風の吹くも雨の降るも皆同一風規である、亦今時の樞要、むかしばかりでは無い
 今の時節でも、此れが樞機である肝要であるといふのじや、さりながら殺と聞けば
 死ぬことのやうに思ひ、活と聞けば生きることのやうにばかり思ふてあらうが、若
 し殺を論ずるも一毫も傷けず、殺といふのが直に活であるので、之を經文には空即

是色とも平等即差別とも云ふてある、秋に木の葉の散るのは新芽を出すのであると云ふが、其うてあらうよ、若し活を論ずるも、喪身失命これを経文には色即是空とも差別即平等とも云ふてある、十五夜のまるくなつたのは、明け初めてある、圓と缺と望と晦との姿はかはつても、月はどこまでも何時でも月よ、所以に道ふ向上の一路千聖不傳と、これは盤山寶積禪師の古語を引て證據にした、向上の一路すなはち眞實の道といふものは如何なる聖人でも賢者でも之を他人から傳ふることも出来なければ、又他人に授けることも成らぬものぞ、然るに滔々たる世上の學者だちが文字言句や伎倆動作を以て眞實の道を得やうと思ひ、形を勞して徒つらに葉を摘み枝を尋ねて居る、譬へて見やうならば、恰かも猿が水中の月影を捉らへやうとして騒ぎ廻るやうなものよ、且らく道へ既に是れ不傳ならば何としてか却て許多の葛藤公案あるや、いかなる聖人も傳へることが出来ぬといふなら、言句も伎倆もないはずであるのに、何故むかしから一切經を始めとして多くの葛藤公案があるのてあるぞ、具眼の者は試みに説く看よ、

本則 舉僧問洞山如何是佛破妄梨○天下 山云麻三斤灼然○破草鞋○

通釋

洞山の守初禪師と申して雲門大師の法嗣である、其人が或時臺所で麻の目方を掛けて居たところへ、一人の坊さんが往て、如何なるか、是れ佛佛といふはどんなもので御座るかと問ふた、此の問は昔も今も屢々ある問題である、古人にも色々なる答があつて、學人を惑はせることであるが、諸君は何と答へなされるぞ、他はともあれ、かくもあれ洞山は麻三斤と答へた、此麻は目方三斤あるといふのじゃ、麻が佛であるか、佛が麻であるか、一體に何の爲に佛を尋ねてあるくのてあらうぞ、佛といふは麻三斤に限るか、米一升は如何、大根一本は如何、味噌一樽は如何、參究の範圍が甚だ廣いぞ、如何なるか、是れ佛の間に圓悟が鐵、羨、藜と着語した、これは戦争の時に鐵丸に針を植えたやうなもの、を路へ振りまいて置て、敵兵の來れないやうにする物のとだ、そうなるか、如何なるか、是れ佛といふ問には如何なる勇兵強卒でも容易に寄り附けまいぞといふたのじゃ、そこで更に天下の衲僧も跳不出いかなる坊さんでも斯の大問題に對しては手も足も出されまいと先づ問に力を入れて置て、麻三斤の答には先づ灼然と着語した、ハッキリと能く分りました眞佛の光明いかにも赫

灼たることとて御座ると揚げて更に破草鞋と抑へた破れた草鞋が何の用に立つものぞ麻三斤と破草鞋の價值高低如何又更に槐樹を指し柳樹を罵しりて秤籠と爲すといふた風外老人が此着語を評して江戸の輕口に此野郎打殺して熊の膽を取るぞと云へば何に馬じやあるまいしと云ふたやうなことぞと言はれてある如何なるか是れ佛に答へて麻三斤と云ふたのが如何にも木に竹を接いだやうなことであるがそこが此公案の骨目とする所であると申すことじや一鉢に都へて狂犬が塊を逐ふて走るやうに佛と言へは直に佛に附て廻はり麻と聞けば直に麻に付き廻るから洞山や雪竈や圓悟に色々とからかはせるので有らう然らば雪竈は此の公案をどう見て居るぞ

頌金鳥急左眼半斤○快語起不及○火烟速極身玉兔速右眼八兩○短善應何曾有輕觸

展事投機見洞山是謂定盤足○自跛驚盲龜入空谷南地竹兮北地木公案○頭上安頭因思長

花簇簇錦簇簇兩重公案○一狀慶陸大夫洞山見案也○山府也解道合笑不合哭阿阿○蒼天夜噴噴○是什

金鳥急に玉兔速これは三言二句じや金鳥玉兔といふは太陽の中に金の鳥が居て月の中に玉の兔が居るといふ支那の昔話を以て日月を言ひあらはした其日月が代るく矢より早く過ぎ去ることを借て来て洞山の答への電光石火の如く麻三斤と言はれたのを形容したのである唯麻三斤の答の速かな所を形容したばかりでは無く如何なるか是れ佛の問に對して雪竈は金鳥急にして玉兔速なりと答へたものとも見るべきである麻の三斤と鳥兔の急速と是れ同か是れ別かとも參究して見ねはなるまいし圓悟は金鳥急に着語して左眼半斤と云ひ玉兔速には右眼八兩と云ふた四文目を一兩と云ひ十六兩を一斤と云ふから八兩が半斤て半斤が八兩じやどちらを見ても目方が同じであると云ふのであるが更に麻三斤は六十四文目とも云ふべきであるやら又快鶴趕ひと及はす金鳥の急なることは快活なる鶴すなはち非常に飛ぶことの早い隼鷹が命がけになつて逐ひかけても到底ひつくことは出来ぬ大抵の者は金鳥と聞けば直に太陽に付き廻り太陽の火焰の裏に身を横たへて喪身失命するものもあらうぞと注意せられた又玉兔と聞けば月に取り付き短絨宮裡に窠窟を作すものもあらうと輒もすれば言葉に付き

廻る者を誠められた、姮娥の事は淮南子に見える怪談で、羿といふ人が西王母から不死の薬をもらうたのを其妻の姮娥が盗んで飲んで仙人になりて月の世界へ赴いたといふのである。善應何ぞ會て輕觸あらんといふは善應はよきことたへて洞山が佛の間に麻三斤と答へたのは如何にも善い應答である。何ぞ會て輕觸あらんコレは中々輕々しく相手になつたわけて無いといふたのである。そこで圓悟が鐘の扣に在るが如し、實に此の麻三斤の答は鐘が鐘木にあたつて忽ち鳴り出したやうである。又谷の響を受けるが如し、彼の山彦の聲に應じて響くやうであると着語した。これ麻三斤の頌は濟んだので、あとは此公案を參究する學人の心得を示されたのである。事を展へ機を投じて洞山を見れば、跛鯨盲龜空谷に入る。これは洞山が或時の上堂に言は事を展へず語は機を投せずと言はれたことがある。すべて言語といふものは閑接に其事柄コトガマ機合の様子を大凡に示すことは出来るけれども、決して言語を以て直接に其事を展開し其機に投契するとの出来るものでは無いといふのである。然るに若し此の洞山の答すなはち麻三斤といふ言葉に附き廻つて其れて洞山の洞山たる所を見やうとしたならば、恰かも跛鯨や盲龜が空谷に入つたやうなもの

て進退に窮することにならうぞよと吾々お互ひに對しての注意である。其れに圓悟が着語して、錯て定盤星を認む、盤星といふは權衡の目方を示す星のこと。此れは其品物次第に重ければ重いやうに、輕ければ輕いやうに、決して其分銅の留り處が一定したものは無い。然るに其れを一定したもののやうに思ふのが即ち錯つて定盤星を認めるので、柱に膠するとか杭コシを守るとかいふのと同じ意味である。今も其通り佛と云へは佛に取り附き麻三斤と云へは麻三斤に取り附いて居たならば決して洞山を見ることが出来ないぞといふのじや、更に自ら是れ、闇藜、恁麼に見るといふた、闇藜は阿闍梨耶の略で和尚といふも同じこと。今は雪竇を指したのに見える。イヤ拙僧圓悟などは事を展へ機を投じて洞山を見るやうなことは致さぬが雪竇闇藜は御自分で左様に見られるのかナと冷かして、吾々後進の物を警誡されたのじや、其れと同じ筆法で次の句に自領出去といふた。自領出去といふは他人の世話をやくよりも御自分で持つて往かつしやれと云ふ俗語である。そナ、同坑に異土なし、一つ穴を幾ら堀つたからても異つた土のありやようは無いのさと云ふ、雪竇も前も御同様よと冷かす、何誰か、你か、鷓子トビを打て、死せる、一鉢に何者が前

方の持て居る準鷹ノボリを打ち殺して跋鱗盲龜にしたのであるぞ、決して他人の仕わざではあるまい、よく自分の脚下を省みるが好いぞと、之は全たく吾々後世の參學者へまでもかゝるお叱り、花簇々錦簇々、これは開福の德賢禪師と云ふ人に或る僧が洞山麻三斤の意旨如何と問ふたとき、德賢禪師が花簇々錦簇々と答へて更に會すやと言はれた、然るに其僧が不會、どうも合點がゆきませんと云ふたとき、德賢が更に南地の竹北地の木と言はれたことがある、雪竇が今それを引て來て麻三斤の意旨を明かす材料にせられた、其實は花や錦に限つたことではない、山層も水潺も猫ニヤリ／＼も犬ワン／＼も盡天盡地悉く麻三斤の當躰ならぬものは無い、圓悟が兩重の公案と云ふたは其れは德賢から聞たのであつたが、二重に賣るのか、一狀に領過す、德賢も雪竇も同罪であるから、一つ宣告よ舊に依て、一般いつても同じことかと、此着語も亦た舊に依て一般であるが、是等は後人の語が混入したので悉く圓語の着語とは思はれない、更に南地の竹の下に、三重も、也た、有り洞山と德賢と雪竇と三人ともに麻三斤といふたり、金鳥急と云ふたり、花簇々といふたり、又南地の竹と云ふたりして、四重の公案ぞ、頭上に、頭を安するのぞと重ね／＼の着語で古人の

同道唱和を示された、其れに就て思ひ出したと云ふので、因て思ふ長慶と陸太夫道ふことを解す、笑ふべし、哭すべからず、これは唐の陸亘といふ人は南泉禪師の弟子で在家ながらに中々たしかな悟道者であつたが、師匠の南泉が死だといふことを聞て、南泉の寺へ往て追吊の供養を營み、呵々として大笑したといふことである、そこで其寺の院主すなはち執事が之を聞き答めて、お前は先師と師弟の間柄であるから、哭すべきが當然であるのに、ゲラ／＼笑つてるとは何事、御座ると云ふた、おうすると陸亘は院主に向つて道ひ得ば哭せん、貴僧の見處を一言いふて見なされ、其の一言が果して佛祖の道に契ふたなら拙者が哭するて御座らうと云ふた、然るに其院主の僧は閉口して一言もない、そこで陸亘は聲を揚げて、嗚呼蒼天々々、先師世を去ること遠しと云ふて大に哭したといふことである、其れを後に長慶和尚が聞て笑ふべし、哭すべからずと評したのを、今雪竇が引て來て都べて眞實の道は人情分別を以て判断の出来るものには無い、陸亘太夫が笑ふのも哭するのも、長慶が其れを笑ふべし、哭すべからずと判決したのも、皆人間の常情を以てあれの、これのと幾ら考へて見ても、決して其當を得られるものには無い、今この麻三斤も亦た其

通りて文字言句の間に人情分別を加へて悟らるべきものには無いぞと云はれたのである。着語に「癩兒伴を牽く俗諺にどん栗の長くらべといふのと同じことて、乞食が乞食仲間を引きつれてあるくやうに雪寶が洞山德賢その上に長慶に陸亘と云連れが多い山僧も也、た、恁麼雪寶も也、た、恁麼御贊成御同威の仲間が幾らもあるぞといふた、呵々といふたは笑ふべしに答へたので蒼天夜半に更に冤苦を添ふといふたは此の笑ふべし哭すべからずの意旨が悟れない者は歎息の上に悲歎をまですてあらうと學者を警戒したのと見える。嘆はこの字は禪語中に時々見る字であるが此字は提起の意でコレを見よといふたやうな所にも使ひ、又冷遇する心で俗に鼻であしらふといふやうな所にも使ひ、又微笑の貌でニコリと笑ふ意味もあると云ふ、今こゝては果していづれであらうか、圓悟は評唱の中に雪寶還つて洗得脱すやと云て其の嘆と云ふた御自身いかして御座るとなじり、大智和尚は只この一字妨げず會し難しと云ふてある、天桂和尚は是れほどに言ふても分らないかと云ふ意味で嘆といふたのであると言はれた、着語に咄、今さらに其やうなこと言ふなと叱つた、是れ、什麼、ぞそれは一鉢何じや、もはや此上は口では言はない手でピシヤリと便ち打つ、

第十三則 巴陵銀碗裏

垂示 雲凝大野。徧界不藏。雪覆蘆花。難分朕迹。冷處冷如氷雪。細處細如米末。淡淡處處佛眼。難窺密密處處魔外。莫測。舉一明三。即且止。坐斷天下人舌頭。作麼生道。且道是什麼人分上事。試舉看。

初めの雲と雪との一對は平等一味の本體すなはち真如法性の無差別なる様を述べられた中に就て雲大野に凝ると云ふは法性の盡十方法界に充滿してゐる景況無限の空間そのまゝに雲ならざる所は無いに依て徧界不藏である露堂々明歷々いさゝかも覆ひ藏す所なく全鉢丸出してある次の句に雪蘆花を覆ふて朕迹を分ち難し、其一味平等なる有様は白妙の雪が白妙の蘆花の上に積つたやうで、白いものに白いもの其の差別を見分けることが出来ぬ、朕といふは吉凶の兆を朕といふと

申して、其きざしは確かに有りながら未だ形にあらはれないと、迹はアトといふ字
 て已に其形が明瞭にあらはれたのであるが、今は雪と蘆花と全く一つかといへば、
 雪は雪なり蘆花は蘆花なり、迹は見えねども朕はある、然らば孰れが雪の色で孰れ
 が蘆花の光りかといへば、全く同一色にして、其迹を認められぬ、此際に於て凡聖だ
 の迷悟だの、善悪邪正だの地獄極樂だのといふ差別はないぞ、偕又更に其景状を形
 容して見れば、冷處は氷雪よりも冷かに、細處は米末よりも細かなり、凡そ冷たいも
 のといふたら氷雪ほど冷たいものは無い、凡そ細かいものといふたら、米末ほど細
 かいものは無いと人間の情識では思ふて居ることであるけれども、今此の徧界不
 藏にして朕迹を分ち難い所の平等一味なる本跡は、冷といへば氷雪よりも冷て、細
 といへば米末よりも細であるぞといふ、之に例して廣いといふたら虚空界よりも
 廣く、高いといふたら九霄よりも高い、結局形容すべき詞は無いといふことも知ら
 れるのである、其れ故に其深々たる處は三世諸佛の法眼を以ても窺ふことが難く
 其密々たる所は一切の邪魔、外道の徒が如何なる神通力を逞しくしても決して測
 ることの出来るものでは無い、此に至ては舉一明三すなはち一を舉れば三を明め

るといふ性燥伶俐の漢はサテ置き、天下人の舌頭を坐斷して如何なる人も最早や
 ノーくともヒヤ／＼とも口出しの出来ないやうに作廢生か道はん、是れ什麼人
 の分上の事ぞ、それは如何なる人の仕事であらうぞ、試みに舉す看よ。

本則 舉僧問巴陵如何是提婆宗 白馬入蘆花 巴陵云、銀碗裏盛

雪 ○七花八裂

これは岳州の巴陵といふ處に新開院といふ寺があつて、願鑿禪師といふが住して
 居られた、其人は雲門大師のお弟子で、當時名高い人であつたから、名を言はないで
 も巴陵とさへ言へは通つたものと見える、是れより先きに江西の馬祖大師が、凡そ
 言句あるは是れ提婆宗と云ふことを言はれたことがある、其れが當時參禪者の一
 問題となつてあつたのを、此の巴陵禪師が自分の弟子だちに示した三點語といふ
 ものの中の第三點に、如何なるか是れ提婆宗、銀碗裏に雪を盛ると言はれてある、是
 れが一時の大問題で難透の公案であると云ふことであつたのを、雪竇禪師が頌古
 百則の中の一題とせられたものと見える、然らば其の提婆宗といふは如何なるこ

とかといふに、印度に於ける第十五祖すなはち達磨大師より十四代前の祖師を迦那提婆尊者と曰ふ、此人は初め外道の碩學で中々豪傑であつたが、第十四祖の龍樹菩薩に教化せられて遂に附法藏の祖位を嗣ぐ人となつたが非常に議論が達者で且つ能辯で如何なる外道も皆降伏せられ一時これを提婆宗と名けて大層な勢ひであつたと云ふことである。然るに元來眞實の佛法は議論や辯説を超越したもので、即ち教外別傳不立文字であるべきを第十五祖は議論辯説を以て宗風を作したのであるから、そこで馬祖の凡そ言句あるは是れ提婆宗といふとも起つたので、更に其れが其言句と宗旨とは如何なる關係であるかと云ふ疑問となつたのであらうと思はれる、我國の曹洞宗祖承陽大師は言語道斷といふ一切の言語なり、心行所滅といふは一切の心行なりと言はれたことがある、之を俗譯すれば、何とも言へないと云ふのは何とも言へるのじやと云ふことになる、其の何とも言へないと云ふことゝ何とも言へると云ふことは、是れ同か是れ別か面白い問題ではないか、圓悟は如何なるか、是れ提婆宗といふ本問題の下に着語して白馬、蘆花に入ると云ふた、是れは巴陵が銀碗裏に雪を盛ると答へるのに先立ちて、歌がるたて鼻をこすつ

たやうな遣りかたじや、更に什麼と道ふぞと答めた提婆宗などと云ふ宗名は是れまで聞いたことも無いが、さなきだに小乗だの大乗だの顯教だの密教だのとゴタ／＼したものの多い中に、餘計なことを言はぬが好いぞと云ふたやうなアンバイ、モ一つ點とやつた此點を點破と見れば此の問を排斥したのである、點定と見れば前に什麼と道ふぞと答めて置いて、更に其問も亦た面白からうと合點した様子にも見える、そこで巴陵の答は銀碗裏に雪を盛る、圓悟の白馬蘆花に入るも垂示の雪蘆花を覆ふも皆同工異曲で、謂ゆる徧界不藏のところ、に朕迹を分ち難い景狀じや、嘗つて洞山悟本大師は其著の寶鏡三昧歌の中に、銀碗に雪を盛り明月に鷺を藏すと云はれ、其次の句に之を説明して類して齊しからず混すれども處を知ると言はれてある、宇宙萬象の眞理實相只此一句に言ひ盡されてある、之を通俗に解釋すれば、すべての倫理も宗教も乃至政治も法律も皆此の山脈の小起伏に過ぎぬ、圓悟の着語に、備の咽喉を塞斷す、誰も彼も此一句に異議を容れることは出来ぬぞと云ふのじや、七花八裂と云ふたは七通八達と云ふも同意義であると古來多くの人は見て居るが、風外老人は其うては無い、此一言の答で提婆宗の議論が七花八裂に粉碎され

たぞと云ふて居る。

頌老新開

求○多口阿師 端的別 上○一○著○見也○未 解道銀碗裏盛雪

不出斗○兩重公案 九十六箇應自知 兼身在○內○開○ 不知卻問天邊月

遊之遊矣○自領 提婆宗提婆宗 道○什麼○山僧在○ 赤旛之下起清風

出去○望空啓告 斬頭截臂來與爾道二句

さて雪竇の頌は初め三言二句あと七言五句の歌躰である。老新開の新開は前に申した如く岳州巴陵の新開院で顛鑿禪師の住持して居た寺の名である。それに老の字を加へて巴陵和尚を尊敬し、端的別なりと稱讃した。端的は眞實の義であるから之を日本の俗語で云へば、新開老人は本統に別段であると云ふたのである。圓悟も相鏡を打て千兵は得易さも一將は求難いどん栗の長くらべといふやうな和尚だちは幾らもあるが巴陵の如き宗匠は實に得難いとほめたけれども直に其口で多口の阿師と抑へた。餘計なことを饒舌すぎる人だと云ふたのである。是れは巴陵が存命中に鑿多口と綽名されて顛鑿和尚は口の多い人であると評判されてあつた

と云ふことである。彼の迦那提婆が議論辯説に長じて居たといふのと、自づから宿縁のあるわけかも知れぬ。第二句の下に圓悟が是れ、什麼の端的ぞと雪竇が端的別と云ふたのを聞き答めて何が端的であるぞと抑へたものとも見られるが、又は門下後生に對して雪竇が巴陵を端的別と云ふた其の端的の處はどこで有るぞ能く審細に參究するが好いぞと注意せられたとも見える。頂門上の一着夢にも見るや、また未だしや巴陵禪師の頂門の一着その見識の非常に高い處は夢にも見ることは出来まいぞと策勵せられた。然らば其の端的別なる點は何所に在るぞと云ふに道ふことを解す。銀碗裡に雪を盛ると、此の提婆宗といふ問題に就ては古人の答案が色々あるけれども、今此の巴陵の答は實に特別であるぞと云ふ。これ本則は頌したたので、あとは例の雪竇の拈弄じや、九十六箇應に自から知るべし。此の巴陵の師匠の雲門大師に向つて或る僧が如何なるか是れ提婆宗と問ふた時に、雲門は之に答へて九十六種汝は是れ最下の一種と言はれたことがある。九十六種と云ふは即ち釋迦在世のころ印度に九十六派の外道があつたと云ふこととして、つまり多くの外道の種類と云ふまでのことである。前に申した如く提婆尊者も元は外道の一

人であつたのが龍樹大士の弟子になつてからは多くの外道を説き伏せて、如何なる論議にも負けたことが無いと云ふのである。まかし其の九十六種のみかは八萬もらふて埒はらの明くべきことでは無いと云ふのじや、吾々互ひの尤も身にしてみても參究すべき所ぞ、そこで圓悟は身を兼ねて内に在り、と着語した、自分の身も亦た其九十六種の仲間よと云ふのである。更に闍黎あつり遠つて知るや、闍黎と云ふは前にも在たが阿闍黎耶の略語て人を敬つて稱するのであるが、其れか平生の詞になつては御前ごまへがとか貴様きさまはとか云ふやうなことになるつて、今は雪竇せつざうにむかひ御前ごまへは能く知つて居るかナと言ふたのである。更に之を抑へて、一坑いっけいに埋うせよ、イツソ九十六種も雪竇も一つ穴へ埋めてしまへと云ふのじや、知らずんば却て天邊あまのへの月に問へ自から知ることが出来ぬならば天邊の月に問ふて見ろ、是れも古人が如何なるか是れ提婆宗と云ふ問題に答へて、天邊の月に問取せよと言ふたのがあると云ふので、其れを引合に出されたのである。自から知ることが出来ないて月に問ふたら月が果して何と答へるであらうか、其の月の答が分れば自から知つたと同じ價値があ

るであらう、行誡上人が般若といふ題で、何をかは照せるものと冬の夜の嵐のあとの月に問はゞやと詠じた歌があつたが、今は恰かも同じ場合のやうである。圓悟が遠くして遠しと言ふた、天邊と云ふては大層に遠いと冷かした、遠くて問はれぬなら、眼上の眉毛に問ふて見よ、脚下の草鞋くさじに問ふて見よ、自領おのり出去、雪竇せつざうは天邊の月に問へなどと言ふが、圓悟には問ふ必要がないに依て雪竇せつざうも前が問ひたければ自分で問ふが好いと云ふたのじや、空を望んで啓告けいこくす、コレは天上を仰いで月に問ふ形容すべて此處の着語は抑へる方のばかりである。然るに雪竇せつざうは、て更に一轉して提婆宗ていばそう、提婆宗ていばそうと唱へ出して、十方法界じふぽうほくがい只此の提婆宗ていばそうの一點張りとしてしまふた、九十六種も雪竇も圓悟もイヤ三世諸佛も歴代祖師も皆悉く提婆宗ていばそうならぬものは無い、圓悟が什麼と道ふぞと答めて、山僧さんそうは這裡こゝに在り、十方法界じふぽうほくがいことごとく提婆宗ていばそうの門徒のやうに雪竇せつざうは言ふが山僧さんそうすなはち圓悟えんごは此處こゝに居るぞと云ふた、更に滿み口に霜しもを含ひと云ふは霜を口一杯いっぱいに含むことが出来ないと同様どうようにモ、此上には何とも言ふことが出来まいぞと云ふのである。然るに雪竇せつざうは更に聲こゑほがらかに唱へて曰く、赤旛せきばんの下清風げうせいふうを起す、赤旛せきばんと云ふは昔し印度で外道と佛弟子と論議をす

る時に、勝つた者が赤い旗を建て、凱歌を奏する慣習である。そこで今雪竇が提婆宗提婆宗の號令の下に宇宙萬象を悉く征服して大勝利の赤旗を建てたのであるから、宇宙萬象そのまゝに皆赤旗の下に錦簇々花簇々て其風光いはんかたなき有様を清風を起すといふ一言で謠ひおさめたのである。そこで圓悟は百雜碎と云ふた。圓悟はどこまでも圓悟の見識で雪竇の赤旗を百雜碎と打ち砕いた。更に打着了也、それ打ち砕いてしまふたぞ、コレは後人の妄添であらうかと思ふ。備且らく去て頭を斬り、臂を截り、來れ備が爲めに一句を道はん、頭と云ひ臂と云ふ皆凡夫の智解分別それを悉く斬り去り截り來りて始めて此上の一句を聞く分あらんと云ふのじや。

第十四則 雲門對一說

本則 舉僧問雲門如何是一代時教直至今不了。雲門云對一

說無孔鐵鎚○七花八

此の一則には圓悟の垂示が無く直に本則である。雲門大師のことは前にも出て有

たが、青原行思禪師七世の孫で達磨大師からは十三代にあたる。雲門宗の高祖て名は文偃と曰はれた人である。如何なるか。是れ一代時教。こゝ雲門に問ひ掛けられた僧は謂ゆる教家の僧で華嚴とか天台とか自力とか他力とか、いづれ經論の言葉に着き廻はつて居る心から、禪宗の教外別傳不立文字などと唱へるのを心にくく思ひ、さすがに釋尊の一代時教と問はれたならば、其れを一言に言ひこなすわけには往くまいと思ふやうな所から、かやうな問題を提出したのであらうと云ふとてある。實に之を教家の方で解釋すると云ふとになつては大層なとてある。一代と云へば釋尊の一生八十年間、その中で五十年の說法、之を五時に分けたり三時に分けたり、教家の祖師だちが色々議論をして居るのが即ち時教である。唐の開元年間、既に五千四十八卷と云ふた一切經、追々と増して今は一萬に近い經文、其れを今こゝて雲門大師に一言に答へさせやうと云ふのである。圓悟は此の問に着語して直に、如今に至りて了せずと言ひ、又つゞけて、座主不會と言ひ、又葛藤窠裡と言つた。座主と云ふは禪宗以外の經論ばかり研究して文字言句の間に佛法を求めて居る人だちのこととて、其の謂ゆる座主連中は葛藤窠裡に埋もれて居るのであるから、何程研究

しても直に今に至まで不了である不會である氣の毒なとよと抑へたのである、しかし教家者流は且らく措く自から教外別傳の參禪をすると稱する人だちは如何であらう、華嚴經には微塵の裡に大經卷が有ると言ひ、金剛經には一切の經教みな斯の經より出つと言ふてある、斯の經と云ひ微塵と云ふは彼の釋迦老人が五十年の間に饒舌した謂ゆる一代時教の中であらうか有るまいか、法然上人は專修念佛を勧めた人であるけれども人々の各自に人々各自の一切經があると言はれたさうな、吾々も互ひ人々各自の一代時教はたして如何と參究して見ねばなるまい、昔し般若多羅尊者(達磨大師の師匠)は人が貴僧はナゼ御經を讀まないかと問ふた時に、吾は日々に是の如きの經を轉すること百千萬億卷と言はれたこともある、是の如きの經とは何であらう、顯教か密教か自力か他力か大乘か小乗か、行住坐臥運作顛動腹が減つては飯を食ひ喉が渴けは水を飲む、其れが其儘に是れ我が一代時教と言ひ得る時節が無ければならぬ、雲門大師は果して何と答へられたぞ、對一說。コレは何と云ふことぞ一に對して説くと讀む人もあれば對する一説と讀む人もあり一説に對すると讀む人もあらうが、對とは何に對するのじや、一とは何のことと

あるぞ説とは何うすることであらうか、其のやうな字引の穿鑿をして居る場合ではあるまい、何にかは知らんが對一説が一代時教ぞ五千四十八卷八萬四千の法門が只この三字ぞ、只この三字これが頓教か漸教か聖道門か、淨土門か、圓悟は無孔の鐵鎚と着語した、コレは何んとも手の着けやうの無いことを形容した宋朝の俗語である、と云ふことじや、七花八裂は前にも有たが七通八達の義で此の答の自由自在をほめたと云ふ説もあるが、破壊の形容で此の對一説の一言に一代時教の妄想が粉碎された意味とも云ふ、老鼠生薑を咬む吞吐不下といふこととて吞むことも出來ず吐くことも出來ないといふ形容の俗語であると云ふことじや、老ぼれた鼠が生薑の辛いのを咬んだなら何のやうな顔をするであらうぞ、五時の四教のと妄分別して居る座主連中が此の對一説を聞いて吞むことも吐くことも出來ない時の顔色も思ひやられるぞと云ふのである

頌對一説

活解○百箇在

太孤絶

傍觀有分○何止壁立

無孔鐵鎚重下楔

館會名首也○雲門老漢也○泥裏洗土塊○靈寶也是粧飾

閻浮樹下笑呵呵

四州八縣○不言見箇漢○同道者方知○能有幾人知昨夜

驪龍拗角折非止驪龍拗角折○有誰見別別誤款有分○須是雪竇始得○有什麼別處韶陽老人得一

概在什麼處○更有二概分付阿誰○德山臨濟也須退倒三千○那一概又作麼生○便打

初めは例の三言二句で中に二字句をさしはさんだ歌である、雪竇慣手の筆法で先づ第一に本則の骨子たる對一説を謠ひ出して太だ孤絶と歎美した、圓悟の着語に活潑々これは誰も知て居る通り鯛や鯉などのやうな魚が勢ひよく跳ね躍る有様實に雪竇がコ、へ直に對一説と言ひ出した調子は誠に活きて働いて居る、そこで更に言猶ほ耳に在り此の對一説といふことを本則で雲門から聞いたのが、いつまでも耳に留まつてゐて忘れられないと圓悟非常に賛成の意を表し、又妨けず孤峻と實に此の一句は孤危峻峭で寄り附けないと讚歎しぬいた、第二句の下に傍觀に分あり雪竇が雲門の對一説を太孤絶と稱揚した其の見かたがサスガに雪竇である、と褒め更に其の孤絶さが何ぞ止だ壁立千仞のみならずやと相繼を打つ、しかし例の語句に喰ひつき廻る者があるを恐れて豈恁麼の事あらんや何も其のやうに褒めるほどの事も無いのサと奪ふた第三句に無孔の鐵鎚かさねて概を下す無孔

は穴なしであるから穴のない鐵鎚は使ひやうがないのであるけれども其れに概を下し柄を附ければ用に立つ、今彼の如何なるか是れ一代時教と云ふ問題は甚だ難題であつて謂ゆる無孔の鐵鎚で中々に手の附けやうの無いのであるが、其れを何の苦も無く對一説と概を下したる雲門の力量は大層なものであると頌したのである、圓悟の着語に錯りて名言を會すコレは雪竇の語句の餘りに巧みなるを裏面から許したので、無孔だの下概だのと餘計なことを言ふたものぞと抑へ更に雲門老漢もまた是れ泥裏一鉢に雲門が對一説と言ふたのが己に泥裏に陥つたので言詮に涉るべからざる真乘を言句に掛けて疵の無い玉に疵を附けたやうなものであるに、更に其れを雪竇が頻りに褒め立てるのは恥の上塗であるぞと云ふので、雪竇も也た是れ粧飾と着語した、然るに雪竇は益々面白そうに圓浮樹下笑呵呵と謠ふ、圓浮樹と云ふは天竺の古説の須彌山説に依れば須彌山の南側に圓浮樹と云ふ大木があつて其木が此の南圓浮提の天を蓋ふてゐると云ふのであるから、今其の樹の下で笑呵呵と云ふは到底人間の往けな、最高の地位に立つてカラ／＼と打ち笑ふて居ると云ふのである、圓悟の着語に四州八縣會つて箇の漢を見ずと云